
COBALT-SERIES
聖石の使徒
前田珠子
其(そ)は力を放つ者
集英社

COBALT-SERIES

聖石の使徒

其(そ)は力を放つ者

前田珠子



集英社



COBALT-SERIES

聖石の使徒

其(そ)は力を放つ者

前田珠子

集英社

目　次

聖石の使徒
其(そ)は力を放つ者

バルヴァローズ創世神話……7

其(そ)は力を放つ者……15

夢紡ぐ聖女……159

あとがき……242

聖石の使徒■登場人物紹介



ガネルオージェ
（ガネル）
金剛石を抱いて生まれるが、その稀有な存在ゆえに公にはされていない。師匠であるナウルニールに絶対的な信頼を寄せている。

アラクセイト
（アーク）
石墨を抱いて生まれた聖石の子供。自分の能力を制御できるようになるため、カーラのもとで修業に励んでいる。


セイタマール
（セイ）
血赤珊瑚の使徒。朱色の髪と褐色の肌を持つたくましい青年。
トリノアーク
紅玉の使徒。矢車菊色の瞳と褐色の肌を持つ長身の青年。ガネルの師匠のひとり。
ナウルニール
青玉の使徒。純白の髪と鳩の血色の瞳を持つ青年。ガネルの師匠のひとり。
カーラトーニ
（カーラ）
黒珊瑚の使徒。黒髪と漆黒の瞳を持つ美女。殊玉の神殿に籍を置いている。
ソラミイノ
（ミイノ）
アラクセイトの同級生で、カーラのもとでともに修業をしている。砂金水晶の子供。

イラスト／山本鳥尾

バルヴァローズ創世神話



麗しき、万能の至高神セイトーリ――。
恵み豊かにして美しいこの世界――バルヴァローズはかの女神の手により生まれた。
女神はまた、この世界のために、多くの神々を産み落とした。
最初に生まれたのは太陽女神ライアトーリ。
セイトーリの両手の間に太陽が生じた瞬間、彼女は生まれた。
次いで生まれたのは三つの月を司る、三つ子の月神――シイムタール、サイサロール、サラムトーリたちだった。
女神の左の瞳から、不意に三粒の涙がこぼれ、月となると同時に三人は誕生したのだ。シイムタールとサイサロールは、バルヴァローズに生まれた、初めての男神だった。
女神の右の瞳からこぼれた涙は海となり、その吐息は風となり、ひと雫の血は大地となった。
それと同時に海神アイルトーリと空神パルムローリ、地神アスカニーリが生まれいでた。
セイトーリはバルヴァローズに生きるであろう者たちのために、やさしい静寂と暗闇を与えてやりたいと願い、歌を歌った――その歌声は女神の願いそのものの姿となり、世界に夜が生

まれ、夜神タイナトーリが誕生した。

女神はバルヴァローズをとても愛していたから、考えられ得るすべての豊かさと美しさと愛情をこの世界に贈りたいと思い、同時に子供たちにもこの世界を愛してほしいと願った。

だから、この世界を作る手伝いをしてくれぬものかと問い、祝福を与えてほしいと子供たちに告げたのだ。

子供たちである神々は、もちろん母神であるセイトーリに言われるまでもなく、バルヴァローズを愛していたものだから、喜んでこの世界を共に作る手伝いに応じた。

空神パルムローリは空を吹き渡る風の神イーオダールを生み、イーオダールも多くの子供たちを作った。

彼らの誕生により、空間はさまざまな表情を持つこととなり、気象や天候が生じた。

太陽神ライアトーリは、自らの光と温もりを伝える者として、火神イイタールを生み出し、イイタールもまた多くの子供を持ったが、彼らはしばしば大きすぎる傷をバルヴァローズにもたらしたため、しばらくのあいだライアトーリの監督下に置かれた。いささか気性が激しい神々揃いだったのかもしれない。

海神アイルトーリは最初、兄である月神シイムタールとの間に世界の愛し児を産みだすつもりだった。

しかし、ふたりの間に生まれたのは、『神』とは呼べぬものだった。

ふたりとも、海のなかでしか育つことのできぬ存在だった。
ひとりは、海の中の月。
もうひとりは、海の育む石。
後に真珠と珊瑚と呼ばれるものの始祖だった。
そのふたりの誕生ゆえに、アイルトーリは兄神との融合をあきらめた。
かくして、彼女はひとりで真水の神カンラタールを生み、カンラタールも多くの子供たちを誕生させた。そうして水は海以外にも居場所を得たのである。
さて、地神であるアスカニーリは、子供神を生まなかった。甥である水神カンラタールと協調することで、やがて生まれてくるであろうバルヴァローズの住人たちをやさしく包みこむ環境を作ろうと思ったのかもしれない。
セイトーリの産み落とした子供神は、ほかに四神……三つ子の月神と夜神との間で、小さないさかいが起こったのはこのころだった。
三つ子の月神たちはみな、自分と夜神が組むことで、星神を生み出したいと思ったのだ。三人の神から同時に同じことを申しこまれ、夜神はたいそう困ってしまった。
結局、夜神が申し出を受けたのは、三つ子の末っ子であるサラムトーリに対してだった。ほかのふたり——シイムタールとサイサロール——が我こそと強く主張したのに対して、サラムトーリだけが夜の空を飾る星々の数や光量、闇との均衡に心砕く気遣いをみせたからだった。

こうして雲のない夜空には、小さな星のきらめきが生まれることとなった。
だが、一層美しくなったバルヴァローズに、穏やかならぬものが生じはじめたのもこのころのことだった。
タイナトーリに選ばれなかったふたりの月神の不満や憤りが、澱のごとく世界に溜まり始めたのだ。
ふたりの月神たちは、自分たちが選ばれなかったことにのみ心捕らわれ、やがてほかにできるであろうなにかを見つけ、行使する道ではなく、どこまでも原因を掘り下げ、その原因となった存在を含むすべてに対して不満を発散する道を選んでしまったのである。
ほかに自分にできることはないのかと、考えるより先に、拒まれたと思いこみ――。
なぜ他者が選ばれたのかと内省するより先に、相手への不満を溜めこみ――。
いつしかふたりの月神は、バルヴァローズを蝕む毒気のみを発するようになってしまった。
瘴気と呼ばれるものは、このふたりによって初めてこの世界に生じたものだった。
セイトーリや姉妹神たちの再三の説得にも耳を傾けぬまま、月神ふたりは瘴気をバルヴァローズに溜めこんでいく。そればかりではない。ふたりの月神は、互いへの敵愾心を抱えたまま、ついにはバルヴァローズそのものへの憎悪まで育て始めてしまったのだ。
セイトーリはふたりの子供神に訴えかけた――それこそ、何度も。
だが、ふたりの行為は改まらなかった。バルヴァローズに集う瘴気は増えていく一方だっ

た。

このままではバルヴァローズ諸共、自らを除くすべての子供神、孫神すべてが滅んでしまう……月神たちの生み出した瘴気によって！

そうと悟ったとき、至高神セイトーリはひとつの決断を下した。

「なんと悲しく情けなく……」

呻きながら、至高の女神は自らの左の瞳から零れた二粒の涙を……その姿を変えたものを消滅させ、嘆きに涙した。

至高の女神の流す涙には万能の力がある。

けれど、それですら浄化できぬほどの瘴気がすでにバルヴァローズには根づいてしまっていたのだ。

残る手段はただひとつ——至高の女神は、ふたりの子供神の生み出した瘴気を抱いて眠りにつくことを決意した。

眠りのなかで、女神は子供神ふたりの生じさせた瘴気のすべてを浄化する。

浄化しきるその時まで、かの至高の女神は眠りつづける。

それは約束されたこと——。

かの女神が瘴気を胸に、大地の奥底に眠りについたそのときに。

その寸前に生み出された誕生の女神と死滅の男神の存在そのものに刻印された、それは絶対

の約束だった。

だから、至高の女神であるセイトーリの最後の娘である誕生神カリカトーリと最後の息子である死神ナムラタールは、バルヴァローズに生まれ、いずれは死に行くすべての存在にこう語りかけたのだ。

『瘴の女神の眠りを妨げてはならぬ――』

と――。

瘴の女神とは、瘴気を封印して眠り続ける至高の女神――。

彼女の眠りを妨げてはならないと。

妨げたとき、訪れるものはひとつきりだと。

つまりは破滅のみなのだと、はっきりとしっかりと、神代の約束には記されている……。

そして、その眠りを守るために、聖石の使徒は生まれたのだ。

けれど、失われた神に、いまも引きずられている存在がいる。

海神アイルトーリ――彼女だけは、そして彼女の加護を得た者たちだけは、いまだに喪月神を忘れることも断ち切ることもできずにいる。

まるで……そう、呪われているかのように。

其(そ)は力を放つ者



プロローグ

「なぜ……」

呆然と、少年はつぶやいた。

目の前には、磔になった青年がひとり――。

それは、少年のよく見知る相手だった。

さながら蝶の標本のごとく、乳白色の髪が羽のようにひろがり、固定されている。

白い、白い肌――シミひとつないそれは、世の女性の半数が焦がれるほどに欲するものだ。

閉じられた瞼を縁取る純白の睫毛――その瞼の奥に隠された瞳は、極上の紅玉そのものであることを少年は知っている。

目覚めているときの青年は、少年が知るなかでも一番美しい人物のひとりだった――性格は別に置いておくとして。

「どうして……」

信じられない。

その青年が、眠りについてしまった。
普通の眠りではない。
仮初めの死という深い眠りだ。
そこまでの代償を払わねば、抑えきれぬ瘴気がここにはあった。
そして、それを封じるために……青年はそれだけの代償を支払うことを選んだのだ。
「冗談じゃない……」
少年は、思わずつぶやいた。
到底認められることではなかった。
こんなことが、あっていいはずがないのだ。
「冗談じゃ、ない……！」
叫んで、彼は駆けだした。
保護者の片割れである男性は、追いかけてはこなかった。
ひとり、息がきれるほどに走った果てに、両腕で、自らを抱きしめる。
「冗談じゃ……」
つぶやく少年の脳裏を占めるのは、絶対的な恐怖と不安だった。
仮死の眠りについた青年の存在は、少年にとってかけがえのない存在だった。
喪失など許せぬほどに……決して認めることができぬほどに。

（だとしたら……どうすればいい……？）

少年は懸命に考えた。

答えはすぐにでた。

自らの支えである青年を解放できればいいのだ。

自分には、その力はない。

青年の相棒である男にも……そんな力はない。

けれど、その力を持つ可能性のある人物は……いないわけではないのだ。

単に噂で聞いた限り――だが、少年の保護者を認じる者たちの情報網には侮りがたいものがあり、そんな彼らから伝わってきた情報であるから……信じるに足る部分は大きい――と、思うのだ。

（あいつを解放できるやつがいる……ならば、おれはそいつを捜し出せばいいんだ）

そうして、青年の『仮死の呪い』を解かせて目覚めさせる。

眠りについた青年は、少年にとって決して失えない存在だった。

決して損なえない存在だった。

だから、少年は決意した。

なにがあろうと、彼はそれをやり遂げなければならないと思ったのだ。

灰色の瞳をきらりと輝かせ、少年は決めた。

後の世で、それは暴挙と呼ばれることとなるかもしれないことを覚悟した上で――。
それでも少年にとって、青年の仮死の眠りは許しがたいものだったのだ。

1

ばきゅん！

破裂音が周囲に響きわたる。

「あ、また失敗」

すでに日常茶飯事となってしまっているから、つきあっている面々も慣れきってしまっていたりする。

「ほんっと、微調整できないんだから……ったく。」

苦り切った顔でため息をもらすのは、ソラミイノだ。

いま現在、修行中に力を暴発させてしまって失敗させてしまった当事者――アラクセイトの同級生で……ついでに言えば一番の優等生で、おかげで彼女を指導する立場みたいなものを背負わされ、でも、なんだかなし崩し的に受け入れてしまったような……微妙で厄介な立場に置かれてしまった少女である。

白金の髪をかきあげながら、ソラミイノは音のしたほうに目を向けた。

轟々たる土埃の向こうから、けほけほと咳きこみながら戻ってくる友人の姿を確かめるために――そして、それはすぐに見つかった。

紫紺色の真っ直ぐな髪をくしゃくしゃに乱し、綺麗な白い肌は土埃で汚れまくっている。長い睫毛に縁取られた黄橙色の目をぱちぱちさせているのは、埃が目に入ったせいなのだろう。こちらの視線に気づいたのか、一瞬ソラミイノを見た少女は、すぐに決まり悪げにうつむいてしまった。

大変な素質を持つくせに、かなり物覚えの悪い彼女――アラクセイトは、ルームメイトにして室長も兼ねているソラミイノに『弱い』のだ。

同い年だというのに、なにやらソラミイノのことを『お姉さん』視している節がある。

それがソラミイノを不機嫌にしていることに気づかないあたり、アラクセイトは確かに鈍感だった。

ソラミイノはもちろん、アラクセイトを嫌っているのではない。

逆だ。

大変好ましく思っているし、その秘められた素質には、畏敬にも似た想いを抱いている。かけがえのない稀有なる力の発露――それを一度でも目にしてしまったら、誰もが同じ想いを抱くに違いないとまで思っている。

が……しかし。

幸か不幸か、ソラミイノはアラクセイトの信奉者にはなれずにいる。
自分以上の才能と力を持つ相手に対する嫉妬のせい……ではなく、アラクセイトの天然の……ぼけっぷりをこれでもかと言うほどに見せつけられているせいだ。
（ほんとーにっ！　これとあれが同一人物なのかって思っちゃうわねっ！）
うつむいたまま、鼻のあたりを指で掻きながら「ええっと……」とか「そのぉ……」とかなんとか言い訳しようとしている少女の姿を見ながらソラミイノは内心息をつく。
ほんの三月ばかり前に、神々しいばかりの力の発現を見せた少女と、いまのアラクセイトはほとんど別人としか思えない。
三月前まで——宝珠大陸の玉濫の神殿で、ふたりは『聖石の子供』として……聖石の使徒候補として力の使い方を学んでいた。
ソラミイノは優等生、対するアラクセイトは落ちこぼれとして。
聖石の子供とは、聖石を抱いて生まれてきた子供の総称だ。
半貴石や貴石、数は少ないが宝石を抱いて生まれてくる子供もいる。そういった子供はみな、格差はあれ、不思議な能力を持っている。
まず、祈ることや、力を発揮するために意識を集中することで、持って生まれた聖石と同じ種類の石を生み出すことができること——これが最大の能力と言えるかもしれない。
次に、その『聖石の子供石』と呼ばれる石を用いて、さまざまな力を揮うこと。本来石であ

るそれらを用いて薬湯を作ることができるのは、彼らしかいない。もっとも、自分の生み出した子供石以外を薬湯に変えることができるのは、使徒と認められた者に限られるということだけれど。

聖石の子供は世界に与えられた神々の福音だ。

だから、子供たちは一定年齢に達すると――見いだされた年齢や呑みこみの早さなどの違いによって、一律とは言えないが――最寄りの神殿に入り、能力を使いこなすための教育を受けることになる。

病に苦しむ人々を救うため、もしくは悪しき気――瘴気と呼ばれているけれど――を浄化するために、神殿内における『学校』で彼らは学び、力の使い方を覚えるのだ。

そのなかで特に優秀で、神々自らが選んだ者だけが、聖石の使徒の資格を得る。

と、言われている。

実のところ、ソラミイノも神々の選ぶ基準は知らない。

例えば同じ水晶を抱いて生まれてきた子供でも、使徒に選ばれたり選ばれなかったりするという話だからだ。かと思えば、半貴石でもない石を抱いて生まれてきた子供が、使徒に選ばれたりするという。

抱いて生まれてきた石の稀少性がそのまま選択条件に当てはまるわけではなさそうだが、宝石と呼ばれる石を抱いて生まれてきた子供のほとんどが、使徒に選ばれたことを考えれば、ま

ったくの無関係とも言い切れないだろう。

ソラミイノは砂金水晶を抱いて生まれてきた子供だった。かつて、緑色の不透明な石はすべて翡翠と呼ばれていたことから、贋翡翠だの翡翠擬だのとも呼ばれる石だが、ソラミイノは自分が抱いて生まれてきたその石が好きだった。

半透明な深い緑の石だが、稀にその表面に瑠璃のそれに現れるような金の輝きが出現する。金そのものではないらしいが、金色のその輝きを見たひとは、砂金のようだと思ったのだろう……そうして砂金水晶とその石を呼んだのだろうと思うと、かえって愛着を覚えるほどだった。

それに彼女は、大変飲みこみの早い……つまりは優秀な生徒であった。

一を聞いて十を理解し、さらには実践もできるという……早い話、出来た生徒でもあったため、周囲の同級生はもちろん、神殿の上層部もまた、近い将来、使徒に選ばれる者が出るとすれば、それは彼女をおいて他にあるまい、と思いこんでいた節もなきにしもあらず。

別段、周囲からの期待を重荷に思うほど繊細すぎもせず、かといって天狗になるほど世間知らずでもなかったから——鼻持ちならないお山の大将になるには、彼女の目は見えすぎたのだ——周囲の期待する部屋のまとめ役を受け入れていたのだ……。

が。

そんな『学校生活』のなかで、唯一彼女が苛立ちを覚えた相手がアラクセイトだった。

アラクセイト――紫紺の髪と黄橙色の瞳を持つ、石墨の子供。
鉛筆の芯の材料となる、やわらかく真っ黒な石を抱いて生まれてきた子供。
半貴石ですらない。
石の種類で尊卑を計るのは愚かしいことだと、教えられていたこともあって、ソラミイノはそういう意味で他者を区別したことはない。
けれど、心のどこかで石の稀少性、あるいは貴重性によって、力の強弱、あるいはその使い手の能力の優劣が決められるのだと……そんな刷りこみがなかったとは言い切れない。本当に、それを目の当たりにしたとき初めて、自覚したことだったのだけれど。
ソラミイノが家族と離れて神殿に入ったのは七つの時だった。
アラクセイトが神殿に入ってきたのは十歳の時だった。
ソラミイノは呑みこみが早くて、ひとつ年上のひとたちが学ぶ教室に入っていた。
なのにアラクセイトは、神殿に入って半年ほどの間に、ソラミイノと同じ教室にのぼってきたのだ。
石墨の子供なのにっ！
ソラミイノよりずっと遅れて神殿に入ったのに！
正直なところを言えば、そんな彼女の躍進ぶりは面白くなかった。あまりにも飛び抜けすぎていたからだ。

あっという間に追いつかれてしまった。この勢いなら、きっとあっという間に追い抜かれてしまう。

それはイヤだった。とってもイヤだった。

なにより、自分が苦労して苦労して苦労して、ようやく体得した技術を、あっという間にものにしてしまうのが憎らしかった。

けれど、ソラミイノは……そこでただ、挫折感にうちひしがれるような性格の主ではなかったのだ。

自分と同い年で、しかも自分より後に神殿に引き取られたというのに、すごい勢いで知識や技術を吸収している相手。

負けたくない、と本気で思った。

負けるものかと心底から思った。

だから、頑張った。頑張れたのだ。

アラクセイトに張り合うのは、確かに疲れるところはあったけれど、基本的に楽しかった。

なぜなら彼女以外に、張り合えるほどの相手はそばにいなかったのだ。

けれど……ある日、突然、アラクセイトは変わってしまった。

神隠しにあって、三日後、戻ってきたとき、彼女は以前とは全然違う存在になってしまっていたのだ。

ソラミイノがライバル視していた呑みこみの早さも機転の早さも、すっかりなりをひそめてしまって……彼女はすっかり落ちこぼれになってしまった。

最初、呆然とした。

信じられなかった。

そんなこと、ありえないと何度も自分に言い聞かせた。

けれど、あの天才肌のアラクセイトは戻って来なかった。

以前の彼女なら、万が一にも失敗するはずもないことで失敗を繰り返し、情けなくもえぐえぐと泣きだし、「どうしたらいいのよーっっ!?」と、自暴自棄に泣きわめき……。

それでもかつての輝かしい姿を忘れることもできず、いつかは元に戻るはずだと自分に言い聞かせながら、ついつい世話を焼いているうちに、今度は『お姉さん』視……だ。

冗談ではなかった。

（もうやめる、もうやめる、もうやめる……！）

金輪際、アークに期待なんかしない！

そう……思ったのが、先日の騒ぎのときだ。

黒珊瑚と血赤珊瑚の使徒であるふたりとともに、想矢湖へ向かった際、はっきりきっぱりしっかりと、そう胸に刻んだはずだというのに……なのに。

（あの天然娘がぁっっ！）

アラクセイトには、そのときの記憶がない。
だから、責めるのは間違っている。
わかっている。それは、わかっているのだ。
けれど――。

ソラミイノとアラクセイトが、ふたりの珊瑚の使徒とともに、想矢湖を目指すことになったのは、ふたりがともに『火の宮』の生まれであり、さらには火神イイタールの強力な加護を得ていたからだった。

イイタールの子供たち――いわゆるところの火の精霊に愛された者だけが持つという、発火能力をふたりともが持っていたのだ。

不凍湖である想矢湖が氷に閉ざされるという異変を招き寄せたのは、月長石の使徒である男性で、彼は相棒であり、片恋の相手である紅水晶の使徒――シオルリイリという女性だった――を誘拐し、氷の檻に閉じこめているのだという話だった。

しかもその男は、決して破られない檻を作るために、世界から喪われたふたりの月神――喪月神の力の名残を利用していた。

喪月神の力とは、瘴気を意味する。

バルヴァローズを食い荒らし、崩壊させかねないほどに強烈な毒気と呼んでもいい。

かつて神代の時代、その毒を世界にまき散らさせぬために、創世神であるセイトーリは、自

ら眠りに就いたのだ――両の腕に喪月神の残した瘴気を抱きしめ、そのすべてを浄化するために……。

彼女を刺激するのは瘴気のみ――そして、強烈な刺激ゆえに女神が目覚めれば……喪月神の瘴気は世界中に広がってしまう。

そんなことになったら、いったいどうなってしまうのか……ソラミイノには想像することもできない。

ただ、そうさせないために、聖石の使徒はいるのだ。

だというのに、身勝手な想いのためにあの男は罪を犯した――ソラミイノが許せないのは、男が喪月神の力を利用したせいで、アラクセイトの身に危険が迫ったからだった。

かつてアラクセイトは三日間、姿を消した。戻ってきたとき、彼女はなにも覚えていなかった。

覚えておられぬほどの……忘れずにいられぬほどの経験をしたせいだろうとカーラは言った。ときおり、そんなことが起こるのだ、とも。

喪月神の執着はいまだ生きており、それらは自らにとって邪魔な子供を幼いころに攫い、始末するのだと。

けれど、アラクセイトは生き延びた。いかなる術を用いたのか、あるいはどんな偶然に助けられたか……詳細はわからないが。

そして、五年の時を経て――彼……あるいは彼らは再びアラクセイトを見つけた。
彼女が攫われたと聞いたときの、血の凍るような恐怖を忘れることはできない。
すべての怒りと憎悪が、月長石の使徒である男に向かった。
二度と彼女に会えないようなことになるなら……決して許さないと心に誓った。
そんなソラミイノの心中も知らずに、アラクセイトは奇跡を纏って戻ってきた。
火気を助ける木気に通ずる青、水気に克つ土気に通ずる茶と黄色、火気そのものの薄紅、緑という……あの場にあって、こちらの優位を築くだけの力に満ちた聖石の子供石を生み出しながら。
そう、あのときアラクセイトは最強の聖石――金剛石を生み出し、喪月神の瘴気を自らの召喚した焔で焼き尽くしたのだ！
あの瞬間、心に走った衝撃を、ソラミイノは恐らく一生忘れられない。
さまざまな疑問があった。
なぜ、石墨の子供であるはずのアラクセイトに金剛石を生み出すことができたのか。彼女はそもそもは金剛石の子供であったのか。ならばなぜ、石墨を抱いて生まれてきたのか。
わからなかった……けれど、その答えはきっと、彼女がくれると思っていた。
だから――こそ！
（やりきれないのよねぇぇっ！）

と、思わずソラミイノはこぶしを握りしめてしまう。
なぜとなれば、あれだけ派手な帰還を果たしたくせに、肝腎のアラクセイトときたら、そのくだりのことをしっかりきっぱり忘れ果ててしまったのである。
瘴気を焼き尽くしたすぐあとに、アラクセイトがそのまま眠りについたとき、寛大な心遣いなどするのではなかった――と、ソラミイノはいまでもそのことが悔やまれてならない。
（あのとき、胸元摑んで揺さぶってでも、事情を聞き出しとけば……っ！）
きっと、こんな不完全燃焼のくすぶりを胸に抱えることもなかったはずなのだ。
（なのに、あのぽややーん娘がっ！　起きたらぜーんぶ忘れちゃっててっ！　おまけに、イイタールの子供たちのこと、見えるようになったから、きっともう暴走させたりしないとか言ってくれちゃって、そのぶんだけでも期待させてもらおうと思ったらっ！　見えても力暴走させるのに変わりはなくってっ！）
考えれば考えるだけ虚しくなってしまう。
あんなぽややん娘のことを、一瞬でも恰好いい……だなんて思ってしまった自分が悲しくなるではないか。
そんなことを思いながら、ふうぅ、と息をついたソラミイノの前で、アラクセイトが身をもじもじさせる。
「ええっとー……その、カーラさんに、顔洗っておいでって言われて……雪でこすればいいっ

て言ったんだけど、そんなんじゃ綺麗に落ちないし、第一顔が霜焼けになるからちゃんと水かお湯で洗ってくるようにって言われちゃって……」

「……そうね」

先日の騒ぎの件を、思い出していたソラミイノの声は、けっこう冷ややかなものだった。

とたんに、アラクセイトが叱られた子犬よろしくしゅんとなった。

「ご、ごめんね。ここいらじゃ水だって氷とか雪、解かさないと手に入らないのに……ええっと、やっぱりあっちの雪でこすって汚れ落としてくるから……」

決まり悪げにそう言って、そそくさと立ち去ろうとするアラクセイトを、ソラミイノはもちろん放っておきはしなかった。

「なに、回れ右してんのよ。本気でこのあたりの雪で顔こするつもり!? 霜焼け通り越して凍傷になっちゃうわよ。ちゃんと火起こしてお湯沸かしてあげるから、さっさとあなたの石墨ちょうだい。火の点きかたといい火力といい、あなたの石墨ほど効率のいいやつはないんだから……ほら」

ずい、と手を差し出すソラミイノは、実のところアラクセイトを軽んじているわけではない——呆れてはいるが。

ただ、きびきび、ぴしゃぴしゃした口調のせいで、アラクセイトが気後れしてしまうわけだ……わかってはいても、彼女の『優しいお姉さん』になるつもりは皆目ないわけだから、つい

つっけんどんな態度になってしまうのだ。
「う、うん……ごめんね」
すぐに謝るくせに、不思議とアラクセイトには卑屈な感じは覚えない。
（こういうとこ、得な性分してるよなーって感じよね）
などと思いながら、ソラミイノは同級生の懐から取り出された石墨に手をのばしかけて……ぎくりとした。
ちりちり、ちりちりと……馴染みのある火の気配が伝わってきたのだ。
「アーク！　それ、遠くに投げてっ！」
「え、え……!?」
言われたアラクセイトは目をぱちぱちさせた後、ようやく直に触れている石墨の塊が、不穏な熱を発していることに気づいたらしく――さすがにこの手の騒ぎには慣れているせいもあってか、すぐさま誰もいない方向に、ばびゅん、と全力投球――全力投石、か？　――した。
その数瞬間後――再び、爆音。
ソラミイノがつい、尋ねてしまったとしても、無理はあるまい。
「アーク……あなたねえ……本当に、石墨の子供？　火薬の子供だって言われたほうが、なんだか納得できるんだけど……」
単なる厭味である。

しかし、相手は天然ぼややん娘だった。

「え？　火薬の石とかって、あるの？」

そうなら、もしかしたらそうなのかもしれない——などと、ぼんやりにもほどがある台詞を口にする同級生の後頭部に、一発こぶしを見舞いたい……と、ソラミイノは本気で思ったわけだが、誰も自分を責めるものはいまいと彼女は確信していた。

2

『この先、なにがあろうとも、卑屈になってはいけませんよ』

とは、地神神殿に行くことを決めたころ、母親に言われた台詞だ。

当時のアラクセイトには、母のこの言葉の意味がわからなかった。

神殿から迎えに来たひとは、神殿に行き、多くのことを学べば、今以上のことができると言った。だからこそ、アラクセイトは家族を離れて、神殿に入ることを選んだのだ。

今以上にできることを増やして、それで家族のためになることを身につけたい、と。

神々に祈るたびに、石墨は生まれた。

最北の大陸――豊珠。

その名の示す通り、掘り出した宝石でもって穀物を他大陸から買い取り、命を繋ぐ民たちの土地。

豊珠は太陽神ライアトーリの恵みから、一番縁遠い土地だった。

大陸の大半は万年雪に包まれた土地――どれほど寒さに強い穀物も、南部の一部の地方でし

か生育できない。

その代わりというわけでもないのだろうが、地神アスカニーリの加護はバルヴァローズ一とも言われる。

なぜか——豊珠ほど、貴石や宝石の鉱床豊かな大陸はほかになかったからだ。

豊珠で産出されない宝石——あるいは宝珠は珊瑚と真珠のみ。

そして、聖石の子供もまた、豊珠にて最も多く生まれるものとされていた。

恐らく、母はそのことを知っていたのだろうとアラクセイトは思う。

神殿に入れば、決してアラクセイトが特別な存在などではないと……いや、確かにある意味では特別かもしれないが、けれどそれは周囲に埋没してしまう程度の『特別』でしかないのだと自覚するに違いないと……きっと、母はわかっていたのだ。

だから、母は神殿に入ることを決めて以来、くどいほどに繰り返したのだ。

『たとえなにがあろうとも、卑屈になってはいけませんよ』

と——。

『アークはアークで、アークにしかできないことがあるんですからね』

と。

『わかってるってば、お母さん』

くどいほどに繰り返された言葉に、半ば呆れながらそう答えていた……あの日々。

あの言葉の意味を、現実に理解したのは神殿に入ってからのことだった。
神殿に入って初めて、自分の抱いてきた石が、宝石でも貴石でも……半貴石ですらないものだったことを知った。
上級生のなかには、アラクセイトが石墨の子供だと知っただけで、あからさまに馬鹿にするひとたちもいた。
なぜ、馬鹿にされるのかわからなかった。
だって、神殿の教えでは、聖石を抱いて生まれてきた子供はみな平等で、抱いてきた石に尊卑などないと教えられていたのだから。
だから……頑張った。
周囲にどうこう言われないように、文句をつけられないだけの成績を上げるよう頑張ったのだ。
そうすればきっと、みんな認めてくれるのだと信じていた。
けれど、そうではなかった。
学習面で、皆に劣っているわけではないと……それどころか優秀ですらあるのだと、試験で証明してみせたアラクセイトに、次に投げかけられたのは、抱いて生まれてきた聖石の尊卑性だった。
『でも、しょせん、石墨の子供じゃない』

半貴石ですらない石――柔らかく加工しやすい利点でもって、鉛筆の芯の材料にされている……ありふれた石。

『石墨の子供が使徒に選ばれただなんて話、聞いたこともないね』

聞こえよがしに告げられた瞬間の屈辱は忘れられない。

けれど……それでも、先輩たちの憎まれ口は、まだ我慢することはできたのだ。

一番……我慢できなかった言葉――それは。

偶然、耳にした、神官たちの噂話――。

『惜しいですな……』

『いや、もっとも。あれでそれなりの貴石を抱いて生まれて来ていれば……』

『どれほどに素晴らしい使徒となったことか……』

『だが……』

『……そう』

『あのような屑石では……』

聞くつもりもなく聞こえてきた……あの会話。

聖石に尊卑などないと言い切った神官たちのその会話に、足元が崩れるほどの喪失感を覚えたのだ。

そして……そして、その夜に――。

夢の中で、奇妙な引力を感じた。
それに引き寄せられるように行って……そうして……そして。
あの恐ろしいモノを見せつけられたのだ。
二度と思い出したくもない。
絶対に、思い出したくもない！
怖かった。恐ろしかった。
ただ、ただ、戻りたかった。
どうやって、戻ってきたのかなんて覚えていない。
同時に、昔出来ていたことができなくなっていることに気づいたけれど、惜しいとは思わなかった。
あの恐ろしい場所から逃れることができた……それがすべてだったのだ。
それだけ、無我夢中だった。
（そうして戻って来てみたら……覚えていないことはやまほどあって、改めて学習しようとしてもなんだかうまくいかなくって……なにも覚えてないのに、以前はこうじゃなかったとか、なんでこんなに呑みこみ悪くなったんだとか思うようになっちゃって……）
何度も自己嫌悪に陥ったものだ。
けれど、心のどこかでは気にしていなかったのかもしれない……と、いまにして思う。もし

も以前のような力を取り戻したら、またアレに攫われるかもしれない、そんな恐怖がどこかにあったのだと思う。

恐ろしい……恐ろしい、アレ――喪月神の名残。

けれど、そんなものは意味がなかった。劣等生になっても、結局あれは自分を見つけたのだから。

（無駄な足掻きだったというか、逃避だったというか……別に怠けるつもりじゃなかったんだけど、あれから五年近くも、ほとんど術のたぐい、上達してないぶん、かえってまずいって感じ……）

こんなことなら、下手な逃げなど打たず――無意識下での選択で、アラクセイト自身にその自覚はなかったのだけれど――真面目に励んでおくのだったと、思うものの後の祭りというものだ。

もっとも、そこでまた、後ろ向きになるほど、アラクセイトは消極的な性格の主ではない。過ぎたことは過ぎたこと、これからのことはこれからのことと、しっかりきっぱり前向きに努力する気満々だった。

……のだけれど。

問題は、せっかく記憶も取り戻し、イイタールの子供たちの姿だってはっきり認められるようになったというのに、能力の制御が、相変わらずうまくいかないということだった。

なぜにどうして――と、何度頭を抱えこんだことか。

最初はソラミイノの言葉通り、ずっと近くにいたのに存在を認めてもらえずにいたイイターの子供たちが拗ねているからかとも思ったが――確かに幾ばくかはそれもあったようだが――ひたすら謝って謝って謝り倒して、機嫌をなおして貰ったあとでも、事態の好転は見られなかった。

（これってば、つまり……わたしの力が弱くなったってことよね……？）

そう思うと、気が重くなる。

せっかくカーラやセイに教えてもらっているというのに、日に一度は先程のような爆発を起こしてしまい、しかもそのせいでソラミイノにまで面倒をかけてしまう。やりきれないというか、自分が情けない。切ないやら悔しいやらで、泣きたくなることしきりだ。

それでも間違っても「わたしなんて」と口にしないのは、卑屈になるなという母の言葉と、出来の悪い生徒である自分を、面倒臭がりもせずに教えてくれるふたりの使徒と、なんのかんのと文句をつけながらも、心配してくれているのがわかるソラミイノのためだった。

自分を卑下したところで、状況は変わらないのだし、カーラたちが一緒にいてくれるいまのうちに、多少でも力の制御を覚えないと、神殿に戻ったとき、以前の比ではない大惨事を起こすのが目に見えているせいもある。

早い話、精霊たちの姿を再び視認できるようになって以来、暴走の規模がより大きくなって

しまったのだ——回数は減ったが、被害のほどは差し引きゼロか、あるいは以前以上……となれば、もはや努力精進して被害を減らすのは自分の義務ではないか。

とまあ、そんなこんなを思いながら、ふう、と息をついたアラクセイトの目の前に、湯気の出ている濡れ手巾を差し出してくれたのは白金の髪が美しい同級生の少女だった。

豊珠はバルヴァローズ最北の大陸——春の訪れは遅い。

現に周囲にはまだ雪が残っている。お湯に浸した手巾でも、いつまでも湯気がほかほか出ているはずもないのだが、アラクセイトとは『発火能力持ち』という共通点を持つソラミイノは、非常に器用に熱を操り、こんな風に気遣いを見せる。

「ありがと」

(ああ、わたしもこれぐらい自然に力を使いこなせたらなぁ……)

受け取りながら、そんなことを思う。

(そうしたら、聖石の子供としては劣等生のままでも、なんとか家族を養うぐらいのことは……)

と考えて、アラクセイトはつい首をかしげた。

「なに?」

そんな彼女の心中を読んだわけでもあるまいが、面倒見がいい上に、勘もよろしいソラミイノが問いかけてきた。



「え？　なにって……なにが……？」

きょとんとして、逆に問い返した彼女に、しかしソラミイノは引いてはくれない。

「なにって、もちろんあなたがいま考えてたことよ？　なに考えてたの？　あなたったら昔から、妙に奇天烈なこと思いつくことがあったじゃない。大抵は馬鹿馬鹿しいことこの上ないことばっかりなんだけど、たまに的を射てたりして、それがまた物騒だったりするから、ちゃんと聞いておこうと思ったわけ。さあ、なにを考えてたの？」

ずいぶんな言いように、アラクセイトは思わず唇を尖らせた。

「そ、そんな言い方って……」

ひどいよ――と言いたいが、なまじ前科があるだけに強くは出られない。

「はいはい、それが奇天烈でも物騒でもないってわかったら、いくらだって謝ってあげるから言いなさいな、なに、考えてたの？」

はなから奇天烈、もしくは物騒な考えだと決めつけているも同然なソラミイノの言葉に、むっとするものを感じたものの、このぶんではどうせ、口を割るまで解放してもらえなさそうだと見越し、アラクセイトは答えることにした。

「うん……だからね、カーラさまもセイさまも、わたしの発火能力の制御の訓練を重視してらっしゃるでしょ？　それってやっぱり、聖石の子供としての能力はあんまり期待できないってことなんだと思ったの」

三カ月前の騒ぎのことを、すっかり忘れてしまっているアラクセイトは、自分がさまざまな色をたたえた金剛石の子供石を生み出したことを知らない。

しかも相変わらず、自分の生み出した石墨の子供石を薬湯に変えようとするだけで、制御できていない発火能力のせいで、まさにソラミイノの言葉通り火薬に火を点けたかのような騒ぎを起こすため、とりあえず、まずはそちらをなんとかしようというふたりの使徒の方針で、このところの修行内容が決定されていることも……知らない。

だから、ソラミイノがこれみよがしにため息をつくのも気づかずに、こんなことを口にしてしまうのだ。

「それでね、一人前の聖石の子供の仕事もできないようなら、神殿を下がったあと、やっぱり生計をたてる方策が必要でしょ？　でね、うまくこの能力を制御できるようになったらって……その上での話なんだけど、お風呂屋さんなんかどうかなー、とか思っちゃって」

「……お風呂屋さん？」

ソラミイノの声は低く、青緑色の双眸には、沈痛な色があった。

なにをどうすれば、そんな発想に行き着くのかと、心底から不思議がっている……というか、困惑を覚えているのがよくわかる。

（う、うーん……そんなに突飛かなあ……？）

と思いつつも、アラクセイトは一所懸命、説明した。

「だからね、ほら、豊珠じゃ冬なんか、滅多にお風呂なんか入れないじゃない。お湯沸かす薪も馬鹿にならないし……せいぜい沸かしたお湯で体拭くのが精一杯って感じで。でも、そうだとなおさらお風呂、入りたくなるんだよね。ほかの大陸には温泉とかっての、あるらしいけど、豊珠にはないし……だったら、わたしのこの能力がもうちょっと普通に使えるようになったらそういう利用法もあるかなって。寒い冬だからこそ、芯からあったまりたいって思うこと多いし……この力利用できたら、ほら、薪もいらないし……なーんて……」

駄目かな？

そっと上目遣いでソラミイノの様子を窺ってしまうのは、ある意味怒鳴られ慣れすぎたアラクセイトの悲しい性だった。

しかし、意外にも、頼りになる優等生は怒鳴りつけたりしなかった。

代わりに……盛大なため息をつき、がっくりと肩を落としたのだ。

「アーク……あなたがご家族思いで、常に必ず家計のことを忘れないのは、悪いことではないとは思うわ……思うけれど……いいこと？　ちょっと考えてごらんなさい？　あなたがその能力を制御できるようになれば、神殿はまず間違いなくあなたを手放しはしないのよ？　喪月神の瘴気すら浄化できる炎を操る人間を、そうと知った神殿が野放しにするはずがないでしょうがっ！　どこから風呂屋なんて発想が出てくるのよっ!?」

物凄い剣幕だった。

ソラミイノが本気で怒っているのがわかって、アラクセイトは思わず身を引いてしまった。けれど、アラクセイトにだって、言いたいことはあった。

なにしろ、そのときのことを、アラクセイトは覚えていないのだ。

人間が発した瘴気ですら、浄化するのは難しい。大きなものともなれば、名の通った使徒でもなければ処理できないと言われている。

しかも、喪月神の残した瘴気を？

自分が？

浄化した？

そんなことがあり得るはずがないではないか——と思ってしまう。覚えていないからこそなおさらだ。

卑屈になるなと母から言い諭されているアラクセイトだったが、それとは別に父親から「自分の力を過信するな」とも子供のころからくどいほどに言い聞かされてもいた。

到底信じられるものではない。

（カーラさまかセイさまのお力に違いないのに……うーん、もう、ミイノったら思いこみ、激しいんだから……）

と、そこまで考えて、アラクセイトはソラミイノが怒る別の可能性に気がついた。

自分がまた怠けようとしているのだと、彼女が考えているのではないかと思ったのだ。

（そんな……怠けるつもりなんか全然ないんだけど……。でも、無意識で逃げてたのはまんざら間違いじゃないわけで……だったら確かにわたしは怠けてたってことになるし。ミイノもその辺の事情はわかってるから、責めたりしないけど、でもでも、同じこと二度繰り返したら確信犯だって思われちゃうわけで……ええっとー、本当に、そんなつもりは全然ないんだけど……でもでも）

もしも、そんな風に思われているのなら大問題だとアラクセイトは思った。

綺麗で頼りになるソラミイノは、アラクセイトにとってはかけがえのない存在だった。怒ると怖いけれど、でも自分は彼女のことが大好きで、彼女に軽蔑されるようなことだけは絶対しないと決めているのだ。

面倒見のいい室長だったからとか、優等生だったから……という以前に、彼女には自分にはない安定感とでも呼ぶべきものが備わっている。

水のように清らかで、風のように涼やかで、木々のように揺るぎない。それでいて、熱い。憧れと呼ぶのが一番近いだろうか。面と向かって口にすれば、烈火のごとく怒るのは目に見えているから、絶対にできないのだけれど。

「あ、あのねえ、ミイノ!?　わたし、わたし、怠けたりしてないし、怠けようとかも思ってないよっ!?」

それだけは、そこだけは誤解してほしくないと、一所懸命力説したアラクセイトだったが、

対するソラミイノの反応は冷ややかだった。
「当たり前でしょう？　さあ、顔拭いたんなら、戻って修行してきなさいな。絶対実現不可能だと思うけど、風呂屋開くにしても、あなたのその能力、自在に使えるようにならないと話にならないでしょう？」
ばっさりと言い切られ、悄然とうなだれてしまったアラクセイトに、仕方なさそうにソラミイノが声をかけてきた。
「そうそう、うまくセイさまがカーラさまからまきあげてくださった干し貝柱とスルメでスープ取ってあるから、今夜は海鮮粥よ。修行で合格点貰えたら、特別に大盛りにしてあげるから頑張ってきなさい」
海鮮粥の一言で、現金にも元気を取り戻した少女は、黄橙色の双眸をきらきら輝かせながら答えた。
「うん、頑張る！」
記憶も自覚もない少女は、自らの世界における価値を、いまだ知らずにいた。

「……ひどいわ……」

鍋をかき混ぜかき混ぜしつつ、同い年の少女の背中を見送った少女――ソラミイノはぼやいた。

なぜ、あれほどに自覚がないのか。

なぜ、あれほどに自信がないのか。

いや、違う。

一番の問題なのは――きっと。

「……なんで……あんなに天然でぽややんなのよ……」

自分が告げた言葉には、ひとつだって嘘はないのに。

「いっそ、二重人格とかでもいうほうが救いになりそうな気がするわ……」

海鮮粥をかき混ぜ、かき混ぜ、ため息混じりにソラミイノはつぶやいた。

「誰か、あの娘に自覚を植えつけてくれちゃったらいいのに……」

よもやまさか、その言葉が自身の思いもかけぬ方面でかなえられることも知らず、ぶつぶつ、ぶつぶつと彼女は不平を洩らした。

それを偶然と片づけるか、言霊の威力とするかは……まあ、受け取る本人次第。

覚悟の有無など見境なしに、運命は皆を飲みこもうとしていた。

3

豊珠は凍える地と呼ばれる。
凍気の凝る土地であればこそ、珍しい存在は自然と目を引く。
真紅の炎の鳥の幻影を、カーラは……カーラトーニは認めた。
もちろん、それは幻だ。印象にすぎない。
だが、この最北の凍土に、炎そのものの具現が訪れることはまずめったなことではあり得ない。
それは、真紅の鳥――。
炎そのものの化身さながら、オレンジと真紅のふたつの輝きを放ちながらカーラへとたどり着いた。
赤という色彩の持つ属性は火。
水の宮の年の水の宮の月、水の宮の日、さらにはその刻に生まれた、水の宮の化身とも呼ぶべきカーラトーニに差し向けるにあたり、これほど向かぬ使者はなかったろう。

だが、カーラトーニはこの使者を受け入れた。
普通であれば、もう少しはこちらに遠慮なり配慮なりを示す相手の切羽詰まった心境をくみ取ったがゆえに。
まやかしの、炎の鳥のもたらした文に目を通すなり、水気の化身にして、黒珊瑚の使徒である女性は呻くようにつぶやいた。
「……まずいね」
「どうした？」
と、問いかけてきたのは、彼女の相棒である血赤珊瑚の使徒たる青年だった。
阿吽の呼吸と言うべきか、このふたりの息はぴったりと合っている。
「あちらの暴れん坊の子供が逃げ出したらしい」
そう告げた黒珊瑚の使徒である女性の言葉に、血赤珊瑚の使徒である青年は、盛大に顔をしかめた。
「保護者どもはなにをしてたんだ……？」
「どうやらそっちのほうもやばいらしくてねえ……」
額に指をあて、カーラはため息をついた。
「厄介で物騒なのにぶつかっちまったらしくって」
との言葉に、血赤珊瑚の使徒である青年は、意外そうに目を瞠った。

「あいつら以上に厄介で物騒なもんなんかあるのか？」
本人、これといった他意もなく言っているのだが、言葉が言葉だ。
カーラがまたひとつ、息をついた。
「セイ……いや、いい。あんたの言い分にはあたしも同感だからね。ただ……本当に厄介な代物だったらしいよ、なんせあの男が体を張ったって話だから」
これには相当な衝撃を受けたらしい――セイタマールの顔が一気に深刻なものになる。
「……あの化け物が、か？」
この台詞もまた、他意なく口から洩れたものだ。
決して口が悪いほうではない彼が、こんな言葉を連発する以上、問題は話題の主たちと見なしたほうがいいかもしれない。
「そう、あの化け物が。もっとも、あの男はけっこう自己中心的にできてるからね、相棒や教え子が捕まって、そのことで苦労させられるぐらいなら、いったん自分が捕まったほうが面倒が少ないとか思ってそうしたって線も考えられるけどね」
この言葉に、セイタマールは不愉快そうに眉宇をひそめた。
それとは違うが、ときおり彼の相棒である美女が、自棄になったとしか思えないような自爆技に走る悪癖があることを思い出したせいである。
そして、そんな彼の様子を見て、相手がなにを考えているのか気づかないはずのないカーラ

は、綺麗にしらばっくれて——なぜか、簡単である。追及されたら面倒だから、だ——話をつづけた。

「とてつもなくでっかい上に、複雑に絡みあった瘴気だったらしいよ。で、美味しく食べられる寸前にあの化け物がふたりを庇った形で逃がしたみたいだね。うーん、やっぱり確信犯だろうね、自分が捕まれば、しばらくは時間稼ぎできるってわかってるあたり……性悪だよねえ、まったく」

しみじみと、呆れたようにも感心したようにも聞こえる口調で語るカーラに、セイがクギを刺す。

「くれぐれも、真似してくれるなよ？」

目の前の相棒なら、やりかねないという危惧からの言葉だったが、カーラはけらけらと笑って取り合わない。

「やるわけないだろうが、あんな化け物の真似なんて。第一、あたしじゃ試してみるのも危険すぎる……わかってるだろ？」

告げられて、「だが、それでもやりそうだから心配なんだ」とまでは言えず、セイタマールは肩をすくめた。

「ああ」

そう、一応はわかっている。

自分もカーラも、海にしか生まれない聖石――珊瑚の使徒として生まれた。
通常、地神アスカニーリの加護しか望めない使徒のなかにあって、海神アイルトーリの加護までも得た存在は稀有だ。
珊瑚と真珠の子供、あるいは使徒にしか、それは授けられない――例外もいるにはいるが、使徒以上に稀少な存在である以上、勘定に入れる必要はないだろう――と、言われている。
だが、真珠のなかには、真水のなかで生まれるものもある。
だが、真水で育まれる珊瑚はない。
珊瑚の使徒ほどに、海神の加護を得た者はいないのだ。
だが……喪月神の残した瘴気と対決するにあたり、その加護こそが問題となる。
三つあった月のうち、ふたつは確かに喪われた。
いま、この世に存在する月はひとつのみ――月女神サラムトーリだけだ。
けれど、喪われたふたりの神が『月神』であったのもまた事実。
そして、月神の影響を一番に受けるのは……海神なのだ。
その影響故に、本来必要性が疑問視される潮の満ち引きを起こしてしまうほどに。
つまり、喪月神の気配に最も敏感に反応するのも、真っ先に影響を受け飲みこまれてしまう危険を抱えているのも……一番に上げられるのは珊瑚の子供、あるいは使徒なのだ。
現にこれまで喪月神の瘴気に毒され、神殿の教えに背くことになった使徒の約半数が珊瑚の

使徒とされている。

血赤珊瑚という、その色彩により、火気にも通じることとなったセイタマールはともかく、黒珊瑚というどこまでも水気の性しか持たぬカーラを、危険視する神殿側の人間がいないわけではないのだ。

人間というものは、ときに思いこみのみで動くことのできる生き物だ。

危険になるかもしれない——その可能性のみを根拠に、誰かを排斥してもかまわないと思ってしまえる程度には。

その恐ろしさを知らぬはずはないだろうに、カーラは自らの態度を——たとえ見せかけだけでも——変えようとはしない。セイタマールは、そんな彼女こそが不安でならない。

……が。

そんな彼の鬱屈を読み取ったのか、カーラが彼の眉間を指で弾いた。

「なに考えてんだかぐらいは想像できるけどね、いつまでも辛気臭い顔してないの。ただでさえ、あっちの化け物がものぐさ根性発揮して、下手したら数年は役立たずって羽目に陥ったんだからね」

虹彩と瞳孔がまったく同じ漆黒の目に間近に見つめられ、セイはつい焦ってしまった。

「あ、あいつら、そんなに長い間、職場放棄するつもりなのか!?」

本当に言いたいことは違ったが、いつまでも慣れることのない相棒のドアップに、それなり

の耐性をつけた青年はなんとか不審に思われない問いを用意することに成功した。
「あいつらっていうより、あの化け物だろ。教え子放り出して、惰眠を貪りかねない性格ではあるけど、問題の教え子の物騒な素質を思うと、さすがにそんな余裕はないと思うわけで……うん、だから、その状況では相棒と教え子の両方を救うって意味で、あの化け物が取った行動は、多分正しかったんだよ……」
　長い、長い沈黙の果てに、カーラは「でもねえ」とつづけた。
「なんって、タイミング、悪いかなあ……？　つきあいの長い相棒はともかくとして、教え子のほうには……うわっ、説明なんにもしてないみたい……最悪」
　この言葉には、セイタマールも深くうなずいた。
「まさにな。しかも……あれだろう、その教え子ってやつは確か美陶で見つかったという……」
「そう。だからこそ、万が一にも暴走しないように、あの化け物がついてなきゃいけないってのに……おまけに相棒は相棒で、それなりに動転した挙句、教え子にあっさり家出されちまってるし……」
「それで……まさかとは思うが、その暴れん坊はお前を探しにくるのか？」
　探るような光を帯びた眼差しから、カーラはすいと逃れるように首をかしげた。
「さて、ねえ？　だが、大慌てで便りをよこしたってことは、その線が強いって向こうも思っ

てる証拠だろうね。なにを吹きこんでくれたのやら……まあ、おおよその見当はつくがね」

化け物のくせに迂闊なやつらだねえ……などと、苦笑まじりにつぶやく相棒に、セイタマールは真剣な面持ちのまま、こう告げた。

「わかってるだろうが、間違ってもその子供に同情なんかするんじゃないぞ。お前だって、素直で可愛いが充分すぎる危険物を預かってる身なんだからな」

素直で可愛い危険物――当人が聞けば、ひどい言いぐさだと憤慨したであろう発言に、しかしカーラは腹を抱えて笑いだした。

ちなみに、彼女のアラクセイトに対する評価は『天然ぽややんの火薬庫』だったりする。

このふたり、やはり、なんのかんの言っても、実に似合いの相棒同士なのである。

突然空から舞い降りてきた少年は、ガネルオージェと名乗った。

折しもアラクセイトたち四人は、カーラが酒の肴にと抱えこんでいたスルメと干し貝柱で取ったスープで作った海鮮粥を囲んでいるところだった。

ちなみに、約束通り、アラクセイトのぶんは大盛りではなかった。

あの後、またしても力を暴走させ、一度目ほどではなかったが、それなりに大きな爆発を引

き起こしてしまったせいである。

さて、この突然の訪問者に、アラクセイトは心底驚いた。

なにしろ、空からの客である。しかも——当然ながら——翼などない、ごくごく普通の生身の人間が、見えない翼を操っているとしか思えない動きで下りてきたのだ。驚くなというほうが無理だった。

一方、ソラミイノはやはり驚きはしたものの、それはアラクセイトのものほど大きくはなかった。なぜかといえば、そのタネを、彼女は知っていたからだ。

三月前のこと、彼女はカーラたちとともに、木気に通じる色彩の——青や紫といったものだ——聖石の子供石を使って、風神イーオダールの子供たち……いわゆるところの風霊に、身柄を運んでもらったことがあったのだ。

恐らく少年も、それと同じ方法でここにやってきたのだろうと、だから目星をつけることができた。なにしろ少年の顔色ときたら、真っ青を通り越して紫に近くなっていたのだから——バルヴァローズ最北に位置するこの豊珠の空をずっと渡ってきたとしか思えないではないか。

（だけど、あれって……かなり上質の子供石が必要だったはずだけど……なんだろう、このひとの気配は木気って感じがしないんだけど……？）

そんなことを思いはしたが、ソラミイノは少年に声をかけたりはしなかった。

そもそも少年自身、目的はカーラのみだと口にするも同然の態度で、彼女にしか目を向けて

いなかったし、なにやら不穏な気配のようなものを感じてしまったからだ。

君子、危うきに近寄らず、である。

別段ソラミイノは自分が君子だなどとは思っていないが、それでもアラクセイトとつきあっていくことを選んだ時点で、彼女以外の『危うき』にかまっている余裕はないと思い極めていたりする。

……賢明な判断だと言えよう。

だが、しかし。

事実上の師匠と言えるふたりから、それぞれ『素直で可愛い危険物』、『天然ぼややんな火薬庫』との異名を与えられているアラクセイトは違った。

思いっきり深刻な顔で、まだ半分ほどしか食べていない、海鮮粥の入った自らの碗をじいいっと見つめた後、ありったけの勇気を振り絞ったような顔で、ずずいっ、とそれを少年に差し出したのである。

「あ、あの、食べかけで申し訳ないんですけどっっ！　あたし、猫舌で、けっこう冷めちゃってるかもしれませんけどっ！　でも、まだ充分あったかいと思うんです……それに、ミイノは料理上手だから、とっても美味しいですっ！　……その、いかがですか？」

体、あったまりますよ。

自分が養われているだけで、なんの役にも立たないばかりか、かえって一行に迷惑をかけて

いるという自覚だけはたっぷりあるアラクセイトにできる、精一杯の客人に対する思いやりだった。

が……彼女のこの行動に、すぐ隣にいたソラミイノは小さく「馬鹿」とつぶやいた。

カーラとセイはなにも言わなかったが、この申し出の後で、初めて気づいたかのように、ソラミイノに予備の碗があるなら客によそってさしあげるようにと言ったのだ。

事態がここに至って初めて、アラクセイトは自分がなんとなくまずい……というか、失敗をしてしまったらしいことに気がついた。

とはいえ、後の祭りというものである。

結局、食事が終わるなり、さっさと寝るように言いつけられ、あの少年とともにふたりが焚き火のそばから離れて行くのをじっと見送ったあげくに、アラクセイトは少しばかりびくびくしながら、自分の行動の是非をソラミイノに尋ねたわけだ。

「ええっと……その、わたし、またポカやっちゃった……わけ？」

「やっちゃったわねえ」

ソラミイノの答えは遠慮も会釈も容赦もないものだった。

「ええーっっ!?」

なぜに、どうして――と顔に書いたも同然のアラクセイトの問いに、伊達に室長を務めていたわけではないソラミイノは的確に答えてくれた。

「まず、いーい？　あのおふたりは豊珠のお生まれじゃない。つまり、この豊珠の寒さにはかなり参ってらっしゃるわけよ。それはわかるでしょう？」

言われてこくんとうなずくアラクセイトだった。

「そんなおふたりが、空飛んできたあのひとの様子に気づかないはずはないでしょう？　普通なら、まず真っ先に体の温まる飲み物か食べ物を勧めたはずだと思うわ。でも、おふたりはそうしなかった……つまり、わざとあのひとの様子を無視することで、相手に自分が歓迎されていない客だってことを認識させるつもりだったんでしょうね」

さすがにあんな顔色のひと、あのまんま放置するようなひとたちとは思えないから、そうと知らしめたあとで、粥とお茶、出させるつもりだったんでしょうけど……。

「それって……つまり、わたしがその算段を台無しにした……って、ことになるのかな？　しかも、食べかけのお碗差し出したりしちゃって……それって、まるでわたしがひどい目にあわされてるようにも見えちゃうよね!?　うわー、どうしよう!?　そんな、そんなこと、思ってもいないのにぃぃっ！」

どうしよう、どうしよう、どうしよう――と、頭を抱えこんでしまったアラクセイトに、ソラミイノはため息まじりの慰めをくれた。

「……まあ、あなたの天然ぶりは仕方ないんだから、うまいことフォローしてくださるでしょうよ。結局あのあと、仕方なく、粥を馳走したって形が出来たことで、あのひとにも

自分が招かれざる客だってことは伝わったでしょうしね」

なにより――と、ソラミイノは言った。

「しょせん、修行中のあたしらにできることはないんだから、ちゃっちゃと忘れて眠っちゃいましょ。少なくともあなたに関しては、その爆発癖直さないことには、おふたりも怖くて新しい術とか教えられないって思ってらっしゃるわよ、きっと」

人間、図星かそれに近いところを突かれると、息が止まるような衝撃を覚えるか、あるいは猛烈な怒りを覚えるものである。

アラクセイトの場合は前者だった。

ずくん、と痛む胸に手を当てて、彼女はようやくの思いで「わかった」と答えた。

なんとか『もの』にならなくては――という思いは、しっかりきっぱり、彼女にもあったわけである。

だから、取り敢えず、アラクセイトは少年のことは忘れることにした。

それ以上に優先すべき問題が目の前にぶら下がっていたからである。

もっとも、すぐにそのことを後悔することになるわけだが。

視えない未来に備えるのは至難の業だ。

だから、彼女は備えなかった。

けれど、そのことを、一体誰が非難できただろう。

誰も、その権利は持たない。
誰にも、そんな、権利はない。
運命とは、そんな気まぐれなものなのだ。
結局のところ。

4

「どうしても、駄目だとおっしゃいますか？」
どうしても、絶対に、駄目だと……無理だと、仰るのですか!?
魂をこめての問い掛けに、黒髪の美女は『応』と答えた。
「無理なことは無理だ。わたしはお前の師匠を救えない。絶対に、だ。お前は待つことで己を鍛練することだ。他人に万能を求めるな。お前の師匠がなにを言ったかまでは知らんが、世界に万能の主などいない。自らを律するのは自分自身をおいてほかにない」
「鍛練しました！　習練も積みましたっ！　それでもおれは、不安でならない……っ！　この絶対的な不安をなんと表現していいのかわからない……！」
ガネルオージェの血を吐くような告白に、しかしカーラトーニはぴくりとも表情を動かすことはなかった。
「だから……？」
冷ややかな声に、少年が息を飲む。

黒髪に灰銀色の双眸を持つ少年――いや、その大人びた目を見れば、あるいは青年と言ってさしつかえないほどの年齢に達しているのかもしれない――は、驚いたように目の前の女性を見つめた。

「要は自分のためかい？」

鋭い、斬りつけるような言葉に、思わず顔を顰めた。

「なにを……!?」

反論しようとしたが、すぐには言葉が出てこない。

半分は、その通りだと彼自身わかっていたせいだった。

ガネルにとって、瘴気に捕らわれてしまった師匠である青年――ナウルニールは、かけがえのない存在だった。

彼ほどに知恵をたたえた者はなく、彼ほどに力を有する者もなかった。

ガネルオージェが生きていくにあたり、彼ほど必要な存在はなかったのだ。

その彼が、喪月神の瘴気に捕らわれた。

是が非でも、救い出さねばならない。

けれど、自分にその力はない。

だからこそ、無茶を承知で空を渡ったのだ――青玉の使徒であるナウルニールの生み出した子供石の力を使って……その力を持っているかもしれない、可能性を唯一持つ女性の元へと。

言うまでもなく、それがカーラトーニだった。
ガネルはふたりの師匠から、彼女の稀有な才能のことを聞いていた。
瘴気の器――寄人となりながら、相棒の破邪の剣によって、自らに集った瘴気のみを断ち切らせることのできる、稀なる異能者……。
使徒は……力のある使徒であれば、ある程度の瘴気を浄化することはできる。
また、その身を器に瘴気を集めることもできる。
だが、自らの意識や魂を損なうことなく、身に集った瘴気を浄化することはできない。それはあくまで最後の手段とされているのだ。
ガネルの養母であった女性もそうだった。
醒めない夢に陥った彼女は、知らぬ間に歪みを紡ぎ、歪みを引き寄せた。
歪みそのものの核となる寸前に、彼女は正気を取り戻したが、元凶となった自らへの戒めの意味も含めて、彼女は我が身もろとも処断されることを選んだ。
普通の人間であれば、器となる人間の命が消えると同時に瘴気も周囲に散じるだけだが、使徒だけは『心中』よろしく、瘴気ごと黄泉路につきあわせることができるのだ。
養母であったひとも、自分が原因で生じた瘴気を抱いて心中する心づもりだったらしい。
幸いにも、寸前で間に合ってくれた師匠たちのおかげで――当時はもちろん、突然現れたふたりづれが、自分の師匠になるだなどとは想像もしていなかったけれど――養母はその場で絶

命することはなかったけれど。
それでも、一度瘴気の器となった彼女の余命は短かった。
瘴気は、心の毒なのだ。
一度でも触れてしまえば、ひとの心はたやすく蝕まれる。
使徒と選ばれた者であっても、その器となれば、命が削られる。
現に養母は、瘴気が片づいたにも拘わらず、一年ほどで物故した。
そのあと、事実上の後見人になってくれた師匠たちは、ふたりとも養母以上の実力者だった……それは確かだ。
けれど、彼らに異能はなかった……いや、聖石の使徒である能力を異能と言うなら、確かにふたりとも異能者ではあったのだけれど。
だが、彼らから聞いた、『黒珊瑚の使徒』の持つような、特異な力をふたりが持っていないのは確かな事実だった。
黒珊瑚の使徒――カーラトーニ。
我が身を損ねることなく、瘴気の寄人となることのできる……恐らくバルヴァローズで唯一の存在。
ガネルにとっては唯一の希望だった。
だから、無理を重ねて飛んできたのだ。

ふたりの師匠たちとはまんざら知らぬ仲でもないということで、期待していたことも否めない。

だからこそ……拒絶の言葉に衝撃を受けたのだ。

いや、つきあいのある仲間への同情で、動いてくれるに違いないと思っていた自分の甘さ、さらには深くこちらの心中を見通すかのような眼差しを向けられたときに覚えた衝撃だ。

「少年」

短く、カーラは問うた。

「あんたはなんのためにあたしを呼ぼうと思ったんだい？」

「それは……」

もちろん、自分の師匠を捕らえているあの瘴気を片づけてもらうためだ――と。

言おうとしたのだが、うまく舌が回らなかった。

「もうひとりの師匠は、大丈夫だって言わなかったかい？」

確かに言われた。

言われはしたが……それでも、到底納得はできなかった。

ひとは、嘘をつく生き物なのだから。

だから、疑わねば手酷いしっぺ返しを食らう。

なまじ真心のこめられた嘘に乗せられたりしたら、なおのこと。

あのとき――師匠のひとりである、純白の髪の青年は平然と笑っていた。
『いいかげん、きみたちが逃げてくれないと、こちらも逃げるきっかけが摑めないでしょう？』
と――。
本当に面倒くさがりで、言動もまさしく『面倒』はイヤの一点張りに思えたものだから、ついつい乗せられた形で逃げて……けれど、振り返ってみれば師匠はしっかり向こうに捕まっていたりして……。
その段になって、ようやく気づいた――師匠である青玉の使徒ナウルニールは最初から、逃げるつもりなどかけらもなかったことに。
「……どうして、あのひとは……!?」
あんなことを言ったのか。
そしてもうひとりの師匠は、どうして「大丈夫」などと言ったのか。
大丈夫なはずがない。彼ら以上に、自分がよく知っている。
大丈夫なはずがないのだ。
彼という枷がなくなった以上、この世で自分という災厄の種を封じられる者はいなくなってしまったのだから！
そんな彼に、カーラはなおも問いかける。

「なぜ、自分の師匠の言葉が信じられない？」
「信じられるものなら信じたいさっ！」
自身も驚くほどに鋭く、彼は言い返していた。
「あなたたちに、なにがわかる……!?　おれは、おれの……この身に宿る力が恐ろしい……！　師匠以外の誰にも制御できたためしのない、ろくでもない力が厭わしい！　こんな力、害毒にしかならない……だのに、唯一抑えることのできる師匠は喪月神の瘴気に捕らわれてしまったんだ！」
助けたいと思って、なにが悪い!?
「悪くはないさ」
あっさりと返されて、ガネルは意外さに目を瞠った。
が、つづけて紡がれた言葉は、彼の期待に添うものではなかった。
「だがね、だからって他人を巻きこんでいいって話にはならないよ。あんたの師匠たちがなんで、大丈夫だって言ったのか……その意味を考えたことがあるかい？　それとも考えた上で出した答えがこれかい？　どちらにしても、応える気にはなれないね。前者なら、あんたはもう少し考えることを覚えたほうがいい子供ってことになるし、後者なら、あんたは自らを律する勇気もない臆病者ってことになる」
そんな子供の言い分に、貸す耳なんぞ持たないね。

はっきりきっぱりと言い切られた瞬間、ガネルは灰銀色の双眸を大きく瞠り、息を飲んだ。
「……どうしても、ですか……？」
尋ねた少年に、カーラトーニはこくりとうなずいた。
「ああ」
「……そう、ですか……」
うなずき、少年はぺこりと頭を下げた。
「……失礼、いたしました」
そうして、立ち去った。
そんな少年の背中を見つめながら、カーラはため息まじりにつぶやいた。
「もう少しはごねられるかと思ったが……まあ、重畳ってところかね」
その彼女と違い、その相棒は別の感想を抱いたらしい。
「……そうかな？」
つぶやいた後、ぼそりと、彼は「悪い予感がする」とつぶやいた。
よもやまさか、それが現実になるなどとは、この時点で誰も予想だにしてはいなかった。
現実が、現実として彼らを襲ったのは……翌日の午後のことだったのだ……。

薪集めというのは、アラクセイトに課せられた修行がてらの義務だった。
豊珠の冬は厳しい――そのなかでも生きつづけている樹木の大半は針葉樹である。
まあ、そのあたりのことは関係ないが、焚き火の薪を調達しようとすると、大体がこういった樹木の枯れ枝が中心になる。
ついでに言えば、豊珠の北部の地方と言えば、夏でも融けぬ雪も珍しくはなく……殊に冬場ともあれば、薪に適した枯れ枝のたぐいはまず湿気ており、燃料として使うにあたっては、いわゆるところの『適度な湿気払い』が必要であり……そのあたりの微調整が、修行の内容となっていたりするわけである。
が、案に反してと言うべきか、当然と言うべきか、成果のほどは……芳しくなかった。
「なんで、うまくいかないのかなぁぁ!?」
半ばベソをかきながら、苦労して集めた枯れ枝を抱きしめてアラクセイトはぼやいていた。
試しに能力を使ってみた部分は、完全に炭化どころか灰化しており、薪としての再利用など無理、無理、無理――な状況だった。
つまるところ、発火能力をなんとか制御するために与えられた宿題だったりするわけだが、前途はなかなか難しいというわけである。
「だから、湿気ちゃった枯れ枝から、湿気だけ取っちゃうぐらいの熱気与えたらいい……はず

なんだよね。そうしたら、不必要な湿気がなくなって、ちゃんとこれ、薪になるわけだし……うん、そうだよね」

こくこく、こくこくとうなずきながら、アラクセイトは教えられたことを脳裏に浮かべて、修行を積もうとした。

が……失敗した。

人間、一朝一夕に全てを把握することはできないのである。

「や、待って！　ちょっと、そこで爆発しないで……待ってったらぁぁっ！」

必死の想いをこめて叫んだというのに、しっかり爆発はついてきた。

煤で顔を汚しながら、けほけほと咳きこみつつ、しっかりきっぱり自己嫌悪に陥ったアラクセイトの目の前に、よりによってガネルが現れたのは……偶然では、なかった。

「えっとーっ!?」

呑気な感想を口にすることしかできなかったアラクセイトのそばに、ふわりと着地した、顔見知りの少年――ガネルオージェは、次の瞬間、彼女の体を横抱きにして、寒風吹きすさぶ豊珠の空に舞い上がったのだ！

「えっ、えっ、えーっっっ!?」

この段階になって初めて、自分がどうやら誘拐されたらしいことに気づいたアラクセイトは目を白黒させたわけだが、気づいたときには、落ちたら無事ではすまない高度に至っており

――しかも誘拐者からの脅しまで貰ったりした。

「暴れるなら、落とす」

なまじ淡々とした声で告げられたものだから、恐ろしさ倍増だった。

それでも恐慌状態に陥っていた場合、子供は逆に暴れ始めることも多いわけだが、ぴたりと静かになったあたり、アラクセイトは実のところ、豪胆に出来ていたのかもしれない。

なにしろ彼女は、生まれて初めて空を飛ぶという経験を味わいながら、ついでに生まれて初めての生身の人間による誘拐騒ぎにまきこまれたそのなかで、実に呑気なことを考えていたのだから。

（昨日の海鮮粥の残り、ミイノに頼んで取っておいてもらったのに……楽しみに、楽しみにしてたのに……っ！）

すっかりかちこちに凍ってしまっていたものだから、朝食には間に合わず、だから昼食にと楽しみにしていたのだ、本当に！

（それなのに……それなのに……っっ！）

どう考えても、このぶんでは昼食時に戻れそうにないではないか。

（恨んでやる……絶対、恨んでやるぅぅ。ミイノのご飯は文句なしに美味しいのにぃぃっ！）

自分を横抱きにして、空をぴゅんぴゅん飛びつづけてくれている少年に対する好意や同情など、この時点でアラクセイトの脳裏から消し飛んでしまった。

かくも、食べ物の恨みとは深いものなのである。

アラクセイト誘拐の件が明らかになった午後……自力で集めた薪――というよりは枯れ枝だが――を、ぼきぼき、ぼきぼき両手でへし折りながら、ソラミイノが爆発していた。

「なんだってあの子はこんなに面倒ばっかり起こすのーっっ!?」

もちろん、本気の本音でそう思っているわけではない。

だが、五年の間に三度も攫われたとあっては、厄介事を招き寄せる体質だと言っても、誰も否定はしないだろうと思ってしまう。

各国や神殿関係の要人、あるいはその縁者だというのならまだしも――それでも、そういった立場にある者は、しっかりその危険性を自覚しているぶん、かえって可能性としては低いようにも思える――いや、だが、しかし。

仮にも二度攫われて、しかも二度とも命の危険にさらされておいて、だ。その上で三度目もまんまと攫われてしまう間抜けがどこにいるというのか!?

確かに二度目までの誘拐者は人外の存在であり、今回の少年に関しては「相手が人間だから」油断したという線もあるとは思うのだけれど。

「でも、絶対っ！　人間に用心するほうが、人外にするより簡単なはずなのにっ!?」

あの子ったら、いったいなにをしてたのよっ!?

思わず握りこぶしで叫んでしまったミイノに、ため息まじりに頭を下げてきたのは黒珊瑚の使徒である美女だった。

「すまない……案外あっさりと引き下がったものだから、てっきりあきらめたんだと読み違えた……あたしの読みが甘かった。本当に、すまない」

慌てたのはソラミイノのほうだった。

そんなつもりで口に出したわけではなかったのだ。

けれど、その言葉に好奇心を覚えてしまったのも事実――なにせ、あの少年の訪問目的やらなにやら、結局教えてはもらっていなかったのだから。

（なんだか、弱みを突くようで、ちょーっとばかり気が引けるんだけど……でも）

集められる情報は、できるだけ集めておきたかった。

知ったところでなにかできるとは限らないけれど、それでも知るだけは知っておきたいというのがソラミイノの本音だった。

この先も、あの問題児とつきあっていくつもりなら、彼女が巻きこまれやすい事件の情報は、ひとつでも多いほうがいい。

アラクセイトという同い年の少女に、少なからず『頼りになる姉さん』視されていることに

腹立たしいものを感じてはいるが、それでもきっと、不本意でも……その役割を結果的に果たすことになろうとも、そばを離れる気にはなれないぐらいには、相手のことを気に入っている自覚はあるのだから！

（我ながら、最悪の選択ってやつだわ……）

そうは思うけれど、脳裏に焼きついたあの日の記憶か、どうにも消えない。

色とりどりの金剛石の子供石を生み出しながら、超越者のごとく自分たちのもとに戻ってきたアラクセイト。

美しいというのとも、神々しいというのとも違った。

それならカーラのほうが、よっぽどその表現に相応しい。

けれど――。

あの日、あのときのアラクセイトには、言いようのない魅力があったのだ。

引きつけられてやまぬ……そう、引力としか呼びようのないものが。

（本人すっかりあのときのこと、忘れちゃってるから聞き出しようもないんだけど）

けれど、使徒の資格も持たぬ自分でさえが感じたことを、他大陸から招聘されるようなカーラとセイが気づかぬはずはない。

現に、あの一件が終わったあとで、彼らは……本来、想矢湖の問題の間だけ借り受けるとしていた自分とアラクセイトを、付き人という形で、諸国を連れ回る許可を神殿から取りつけた

……カーラの口調の軽さほど、簡単なことでなかったはずだということを、ソラミイノは身をもって知っていた。

恐らく、彼女たちはアラクセイトのための教師なのだ。

それはつまり、彼女たちも異能に属する存在だということで。

その意味するところは……。

「立ち入ったことを聞くようですが、あのひとは、いったいなんの目的でカーラさまたちを訪ねて来たんですか？」

答えてもらえない確率が高いと思いながらも、ソラミイノは尋ねてみた。

カーラの性格上、安易な誤魔化しだけは口にしないだろうことがわかっていたからだ。カーラトーニという女性は、実のところ『食えない』性格の主ではないのだ。そういう意味でのひとの悪さという点では、意外にもセイタマールのほうが上かもしれない。

はたして、黒髪の美女は、困ったように息を洩らした後、仕方なさそうにこう答えた。

「答えたくないっていうのは……きっと通じないんだろうね」

そんな顔をしている——と、言われて、ソラミイノはバツの悪い思いでうなずいた。

確かにその通りだったけれど、あくまで砂金水晶の子供にすぎない自分が、使徒である相手に食い下がることなど許されることではないのだ。それを理由に、神殿に送り返される可能性だってないとは言えない。

それでも、絶対に退きたくはなかった。
そんなソラミイノに、念を押すように声をかけてきたのはセイタマールだった。
焔色の髪と褐色の肌を持つ屈強そうな男性は、淡々とした口調でこう問いかけた。
「知れば、きみは生涯そのことに関する沈黙の誓いを強いられることになる……それでも知りたいか？」
その言葉に、ソラミイノはさっと緊張した。
（沈黙の誓い……ですって？）
とんでもない大事だった。
知り得たことを、生涯にわたり、決して口外しないという誓いを立てる。その意味するところは尋常でなく重い。立てた誓いの言霊ゆえに、破った際には命を落とすことさえ覚悟しなければならないことなのだから。
思わず、彼女はセイタマールの顔を凝視した——こちらの決意のほどを試すつもりなのかと疑ったせいもある。
けれど、彼の表情から、それを読み取ることはできなかった。
ソラミイノはだから、少しだけ考えた。
そして、結局うなずいた。
（よくよく考えてみれば、アークのあの能力、見ちゃったからには、賭けてもいいけど絶対、

神殿から箝口令しかれるはず、なのよね。一生口にできない秘密、もう、ひとつ抱えこんじゃったんだから、いまさらそれがふたつに増えたって、きっと似たようなものだわ）

アラクセイトの件に関しては、いまだ誓いは立てていなかったが、いずれ立てることになることだけはわかっていたし、覚悟もしていたから、わりあいあっさりと、ソラミイノは決断することができた。

「かまいません」

アラクセイトとこの先も係わっていく以上、その手の問題は際限なく出てくるに違いないのだから……と、半ば無意識のうちに悟っていたのかもしれない。

そうして――。

与えられた回答に、ソラミイノは意外の念を覚えた。

もっとも、首をかしげる彼女に、ふたりの珊瑚の使徒が詳しい説明をしてくれたおかげで、次第に納得の心境になっていったのだけれど。

ただ、腑に落ちないこともあった。

「そんな……大事なことを、どうしてあのひとは知ってたんでしょう？　その……師匠に当たる方々も、その誓いを立ててらしたわけでしょう……？」

尋ねた彼女に、カーラが気のない素振りで肩をすくめた。

「さてね」

つづけられた言葉に、ソラミイノは少しばかり頭を抱えこみたくなった。
「あの化け物どもがなにをしでかそうと、あたしは驚きゃしないね」
（カーラさま……カーラさまだって、わたしの目から見たら充分に『化け物』じみてると思うんだけど……そんなカーラさまに化け物呼ばわりされるひとたちっていったい……）
どういう人物なのかと、そう思いかけたとき、ソラミイノは別の可能性に気づいて、深く考えることを放棄した。
人間というもの、自分のことは棚に上げるのはけっこう簡単なことなのだ。
カーラたちが、それをやっている可能性は……低くはないだろう。
そう自分に納得させるソラミイノ自身、充分自分の強心臓ぶりを棚に上げていたりするわけだが……もちろん、本人にそんなつもりはない。
人間、一番の謎は自分自身の心のなかに抱えているということかもしれない。

5

「な……んで……っっ!?」

くしゅん、くしゅん、とくしゃみを連発しながら、アラクセイトは自分を攫った少年――ガネルオージェを睨みつけた。

「こんなこと、するんですかっ!?」

実際のところ、滑らかに言葉がつながったわけではない。

なにしろ、春とは言っても万年雪も珍しくはない豊珠の空……というか、上空の気温は非常に冷たいものであったし、そんななかを何時間も横抱きにされて移動させられる羽目に陥ったのである。

毛布を与えられ、暖炉のある宿屋の一室に落ちついたとは言っても、そう簡単に冷めきった体は温まらない。

全身は凍えきっていたし、体中の震えも止まらない。

肺炎にならずにすんだのは、ひとえに彼女が生粋の豊珠生まれの豊珠育ちだったからに外な

らない。もし、そうでなかったら……アラクセイトはいまごろ黄泉路を彷徨っていたかもしれない。

とは言え、相手のせいで強制的に風邪をひかされた形になったアラクセイトが、非難たっぷりにガネルオージェを問い詰めるのは無理からぬことだった。

「ひどいです！」

なんで、こんなこと、するんですかーっっ!?

非難をこめて尋ねた彼女に、ガネルオージェは困惑もあらわに答えた。

「仕方ない」

と――。

「なにが、仕方ないんですかっ!?」

アラクセイトは猛烈に怒っていた。

捕らわれの身の上であることを忘れたわけではなかったが、到底黙っていられないほどに怒っていたのである。

「なんで、です!?」

なぜ、こんなことが必要なんですか――!?

ガネルオージェは答えた。

「お前は囮だからだ……」

と。

「囮……？」

問い返したアラクセイトに、ガネルオージェは深くうなずいた。

「お前を押さえている限り、あの女はおれの言葉を無下にはできないだろうからな」

簡潔すぎる言葉に、アラクセイトは眉宇をひそめながら、一所懸命考えた。

（あの女……ってことは、カーラさまって線が強いのよね、ミイノは特にこのひとと話したりしたわけじゃないんだから……。でもって、わたしのこと囮とかって呼んでるってことは、このひと、きっとカーラさまに一度断られたんだわ）

天然ぽややん娘ではあっても、彼女は決して頭の働きが悪いわけではない。

すばやくそれだけのことを把握して、彼女はガネルオージェに向き合った。

「卑怯だとは思わないんですか？」

ずばりと問いかけた彼女に、彼は驚いたらしい。

僅かに目を瞠り、それからくすりと喉を鳴らした。

自嘲の笑みだと、すぐにわかった。

「めでたいやつだな、世の中には、そんなことといちいち気にしてられない事情ってもんがあるんだぞ？　なんと誘られようと、おれはあの女に師匠を解放してもらわなきゃならない。そのために必要なら、いくらだって間抜けな小娘ぐらい人質に取ってやるさ」

本人を前にして『間抜けな小娘』とは、ひどい言いぐさである。
しかし、確かにあっさり攫われてしまったことを考えると、その件に関する抗議はできない——というか、したところで取り合ってもらえないのは目に見えている。
「わたしを人質にしても、カーラさまがあなたの頼み、引き受けるとは限らないと思うんだけど……？」
慎重に、言葉を選びながらアラクセイトはそう告げた。
知り合って半年足らず——カーラトーニのことをよく知っているとは言えないだろうが、それでもわかっていることはある。
あの黒珊瑚の使徒である女性は、誰の頼みでも無条件に引き受けるようなお人好しではない。ないが、切羽詰まった事情を抱え、飛びこんできた相手の願いを、無下に断るような性格でもないのだ。
アラクセイトですら、追い詰められているとわかったガネルオージェの頼みを、彼女が断ったのであれば、それには相応の理由があったとしか考えられない。
だとしたら、自分が人質に取られたからといって、彼女が首を縦にふるかどうか……疑わしいと思わざるを得ない。
もっとも、それとは別な懸念もひとつあって、アラクセイトはガネルオージェに、この試みを早々にあきらめて欲しいと思ったわけだが。

しかし、自分のことだけで精一杯になっている少年は、そんな彼女の心中に気づく様子もなく、あからさまな軽侮の笑みをたたえ、こう言ってくれたわけだが。

「弟子を見捨てるような師匠か？　だとしたら、お前もずいぶんな貧乏籤を引かされたもんだな」

相手が挑発しようとしていることはわかったが、それでも聞き過ごすことのできない言葉というものはある。

むかっときて、アラクセイトは黄橙色の双眸を怒りにきらめかせた。

「引き受けられない重要な理由があったとか、どうして考えないんですかっ!?　カーラさまにも已むに已まれぬ事情があったかもしれないって、なんで考えないんですっ!?」

感情的に叫んだ彼女の言葉に、返ってきたのもまた、同じ感情に支配された少年のそれだった。

「長年の友人を見殺しにするような女だぞっ!?　しかも、あの女には、それができる力があるのに……なのに、放っておけと言ったんだ！　師匠は……おれを庇って瘴気に捕われてしまったのに……それを助けてほしいと頼んだのに、あの女は一蹴したんだ！　瘴気の寄人となれるくせに！　相棒の剣で、瘴気だけを浄化できる異能を持っているくせに！」

激昂したガネルオージェの言葉に嘘の響きは感じなかった。

（確かに、それが本当なら、このひとが怒るのも無理ないかも……）

と、ちらっと思ったアラクセイトはけれど、すぐに相手に味方する気になれるほど、直情径行に出来てはいなかった。

なにより、有無を言わさず誘拐してくれて、しかも凍えさせてくれた相手に、そうそう好意的になれるはずもない。

「それは、あなたの一方的な見方でしょう？　だいたい……瘴気って言っても、いろいろ種類があるって聞いたことありますよ。カーラさまだって、すべての瘴気の寄人になれるわけじゃないんだし。だいたい、さっきから聞いてると、あなたってわがままな子供みたいなこと言ってますよ？　こっちの事情なんかお構いなしだし、そっちの事情だってまったく説明不足だし、そもそもわたしのこと勝手に巻きこんだくせに説明しようともしないし……行儀悪いし失礼です」

憤然と言い募ったアラクセイトは、次の瞬間、頬を切り裂く熱――否、痛みを覚え、目を瞠った。

そっと手を当ててみる。

指先が濡れていた。

血だ。

なにか硬いものが飛来して、頬に切り傷が生じていたのだ。

（なに……？）

そう思って周囲に目を向けた瞬間、空中に走る光を認めた。
思わず——というか、反射的にそれに手がのびた。
ぱしっと空中で摑み取る。
（なんだったの？）
そう思いながら、そっと指を開いてみれば、てのひらのなかには、水晶にも似た、透明な石が、あった。
（えっと……？）
水晶……とは違う。
玻璃でもない。
しかも、これまでどんな石を握ったときよりも、手に、肌に、馴染む感触——こんなことは初めてだった。
こんな感じは、自分で生み出した石墨でしか覚えたことのないものだった。
（ええっとぉ……!?）
なんだろう、なんだろう、この感覚は!?
そう思いながら、じいっと見つめているうちに、ふたたびその石が手のなかから飛び出そうとするのを感じて、アラクセイトは思わず「駄目ぇ！」と叫んだ。
室内で、視界を焼き尽くすかのような火柱が立ったのは次の瞬間だった。

狼狽したガネルオージェの声が耳に届いた。
「お、お前っ!?　イイタールの娘だったのかっ!?」
返事する余裕など、すでになかった。
ガネルオージェの生み出した金剛石の子供石のことごとくは、イイタールの炎を受けた瞬間凄まじい勢いで燃え上がってしまったのである。
一夜も過ごさぬ内に、ふたりは宿を焼け出されてしまった。
不幸中の幸いと呼べるのは、まだその出来事が昼間に起こったため、犠牲者がでなかったことだが……問題の火事の原因と元凶のふたりが、その場に居つづけられるはずもない。
再び寒風吹きすさぶ空の移動――もちろん、舵を取ったのはガネルオージェだった――を経て、ふたつばかり離れた街に移動したとき、アラクセイトはすっかり本格的に風邪をひいていた。
高熱に見舞われ、うんうん唸っていたアラクセイトを抱え、ガネルオージェがどんな苦労を強いられたかは……謎である。
だが、取り敢えず、意識を取り戻したアラクセイトの目に、真っ先に飛びこんできたのはガネルオージェの顔で、彼は「呆れた」と言わんばかりの顔でこう告げた。
「イイタールの娘なら、ちゃんと事前にそう言っておけ。制御のきかないおれも悪かったが、おかげで大変な被害だぞ」

と――。

それに関しては、アラクセイトも言いたいことがあったので、遠慮なく文句を言うことにした。

「あなただって、突然だったじゃありませんか……。金剛石の子供だったなんて……金剛石……なんてっ！　わたし、石墨だってうまく扱えないのに……なのに……っ！　火事なんて、起こす気なんてなかったのに……っ！」

ひんひんと、泣きだしてしまったアラクセイトに、困ったようにガネルオージェが謝ってきた。

「悪かった……すまなかったよ。あんなことになると知ってたら、お前を選んで攫ったりはしなかったんだ……」

聞き捨てならないことを告げられ、アラクセイトは顔を真っ赤にした。

「わたしじゃなきゃ、ミイノを攫うつもりだったんですか!?　冗談じゃありません！」

とんでもないことだった。

ソラミイノは病弱というわけではないが、少しばかり喉が弱いのだ。あんな風に空に連れ去られたら、風邪ぐらいではすまないに決まっている……いや、そもそも彼女があんな目にあわされるだなんて、考えるだけで寒けがした。

そんなアラクセイトの心中も知らぬげに、ガネルオージェが肩をすくめて答えた。

「あの娘のほうがデキそうだったからな。まだしも扱いやすそうなお前を選んだつもりだったんだが……まさか、イイタールの娘だったとは……」

今からでも人質を取り替えかねない少年の態度に、アラクセイトは低い声で釘を刺しておくことにした。

事実か否かはこの際、あまり必要ではない。大切なのは、相手のその気を殺ぐことなのだから。

「言っときますけど、ミイノも……ですよ」

はたして、ガネルオージェは驚いた顔になった。

「あいつもイイタールの娘なのか!?　なんだって、火神の娘がふたりも揃って、珊瑚の使徒と一緒にいるんだ……？　いや、だからこそ、なのか……？」

ひとりでなにやら納得している少年の灰銀の双眸に、ちらりと走った翳りに気づいて、アラクセイトは急に、怒りを持続できなくなってしまった。

本当に、目の前の少年にはひどいことしかされていないというのに……なぜだか怒れなくなったのだ。

なんというか……相手の瞳に走った感情の色が痛すぎて。

（このひと、カーラさまのこと悪しざまに罵ったり、わたしを攫うなんて乱暴なことやったり……ほんと、目茶苦茶なんだけど……でも、多分……）

それは——それだけ必死なせいなのだろう、とアラクセイトは思った。

火事騒ぎのおかげで、詳しい事情は教えてもらえていない状況だったけれど、彼はきっと、瘴気に捕らわれたという師匠というひとのことを、本当に慕っていて、だからこそどんな手を使っても救い出したいと思っているのだろう……と。

やり方は、決して褒められたものではないし、理由があればなにをやってもいいということにはならない。

けれど、同情の余地があるとなしとでは、こちらの心情にも差が生じてくるというものだ。

「あの……あなたのお師匠さまって、どんな方で、いったいどうして瘴気に捕らわれることになったんですか？　わたし、実践科目では劣等生ですけど、筆記試験に出るようなことなら取り敢えずけっこういいほうだと思いますし、試験に出ないような内容の書物の閲覧も許していただいてましたし……もしかしたら……」

詳しく話してもらえたら、少しは役に立てるかもしれませんけど——。

と、言いかけたアラクセイトの申し出は、しかし中途で切り捨てられた。

「使徒でもない小娘の知識がなんの役に立つ？　おれは青玉と紅玉の、ふたりの使徒にずっとついて歩いてたんだ。お前なんぞに教えてもらうことなどない！」

すさまじい剣幕だった。

アラクセイトには、なぜ突然ガネルオージェが怒りだしたのかがわからない。

だから、あまりな言いように怒りを覚えてもおかしくはなかったはずなのだけれど……彼女の胸を見舞ったのは、怒りではなく痛みだった。

お前など――という、自分を否定する刃のような言葉に、それ以上なにも言えなくなってしまったのだ。

そんなことはない――あるいは、そうとは限らないと……言い切るだけの強さ、もしくは自信というものを、アラクセイトは培ってはいなかった。

だから、力不足を指摘されれば、もう、それきりなにも言えない。

唇を噛み切りかねないほどに悔しかったけれど。

それきり、口を閉ざしたアラクセイトに声をかけようともせずに、ガネルオージェが部屋を出て行く気配を感じた。

（嫌い……嫌いだ、あのひと……嫌い！）

うつむいたまま、顔も上げずに、アラクセイトは声なくつぶやいた。

（大っ嫌いっ！）

はからずも、同じ想いを相手が覚えているとも知らず、彼女はぼろぼろと泣きながら、ぽすんと寝台に沈没した。

風邪に加えて、精神的に受けた衝撃と痛みのせいで、アラクセイトの熱はさらに上がっていた。

6

『この大間抜け！』

かなりな空間を隔てた場所にいる人物だとわかっていても、それでも声や表情が筒抜けの状態である場合、やはり咄嗟に首を竦めずにはいられないこともある。

なまじそれが古馴染みで、しかも相性的に最悪な、さらに剣呑な資質の持ち主とわかっていれば尚更だ。

重ねてまずいことに、今回の非は自分のほうにある。

どれだけ罵倒されても仕方ないとあっては、本当に身の置き所がない。

「わかってるって……それは幾重にも謝るって……だから、こうして叱られるの承知で連絡取ってるんじゃないか……」

ぼりぼりとこめかみのあたりを指でかきつつ、詫びの言葉を口にするのは紅玉の使徒――トリノアークだった。

現在、瘴気に捕らわれの身となっている青玉の使徒ナウルニールの相棒にして、ガネルオー

ジェのもうひとりの師匠だったりする青年である。
外見年齢は二十代の後半といったところだが、その印象が少なくともここ十年ほどは変わっていないことを知っている年下の黒珊瑚の使徒である美女は、情け容赦というものがない。
『足りないね！』
年下のはずだというのに、以前から彼らのせいで何度も、何度も面倒に巻きこまれてきた美女――カーラトーニに遠慮がないのは無理からぬことと言えるかもしれない。
『だいたい、あんたたちはなんでまた、そんなに迂闊なんだい!?　誓いも立てさせないで情報は洩らす……そのくせ、その情報ときたら偏ってて話にならない！　あんたんとこの暴れん坊が、なにしでかしたか教えてやろうか!?　あの坊やはねえ、あたしが申し出断った途端、事前に計画してたとしか思えない素早さで、入ったばかりのうちの弟子、かっ攫ってくれたんだよっっ!?』
この台詞に、トリノアークは「あちゃあ」と額をたたいた。
最早、平身低頭して謝るしかない状況だった。
「すまない、申し訳ない！　あいつは絶対、おれが回収するから……でもって、二度とそっちにちょっかい出さないよう躾けるから……！」
言い聞かすだとか言い含めるとか――決して口にしないトリノアークの言葉から、それがいかなる手段を用いるものなのか、わかりそうなものなのだが……カーラトーニは口を挟もうと

はしない。

お互い、大変に物騒な知己と言えるかもしれない。

『なら、さっさと回収してほしいね』

そう答えた後、カーラトーニは思わしげな顔で、こう加えた。

『あんたんちんとこの暴れん坊が例外中の例外だってことはわかってるけどね、あたしんとこの新顔は、それに輪をかけた例外中の例外の、そのなかでも特別例外ってやつなもんでね。野放しにしとくのは本当にまずいんだ』

焚き火の炎を媒介に、連絡してきたトリノアークが、意外そうに目を瞠る。

「うちの以上に厄介な問題児は、全大陸捜してもいるはずないと思ったが……？」

『ところが、いたんだよ』

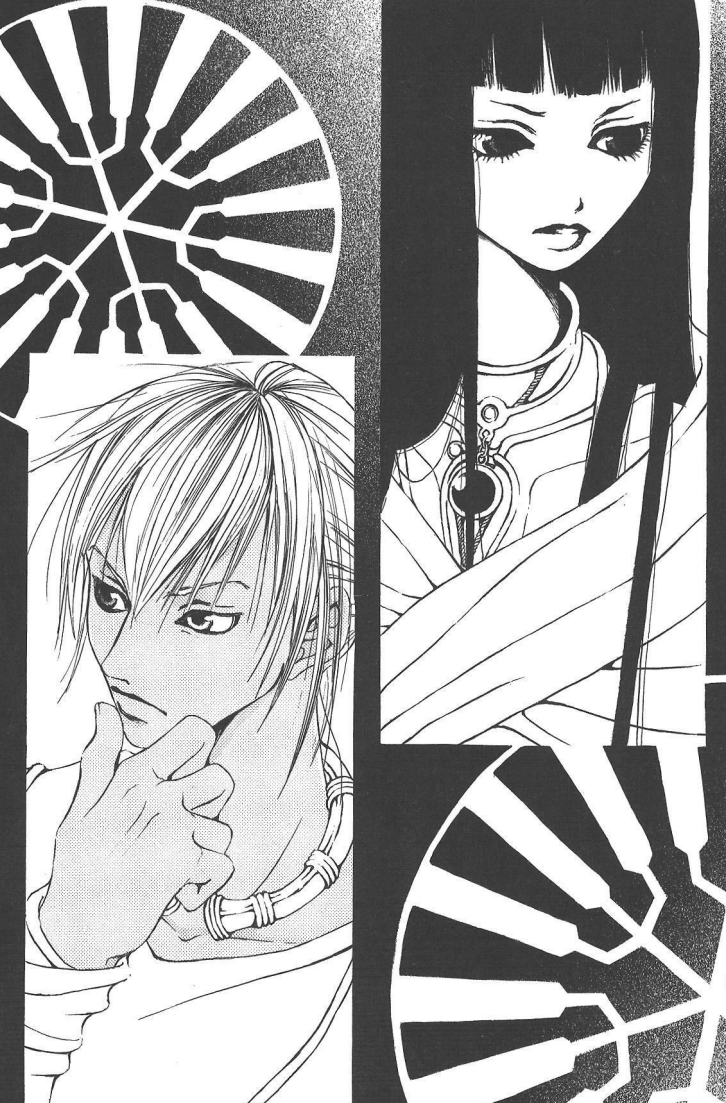
なまじあっさりとした口調だったため、反応が遅れた——という線は……あった。

だが、しかし——。

次の瞬間トリノアークが晒した醜態は、歴史に残ってもおかしくないものだった。

「はあ？」

『出たんだよ、下手したらあんたんとこ以上に厄介なやつが！　元々が石墨の子供で……そのせいであたしらもすぐにはわからなかったんだけど、追い詰められると金剛石の子供石を生んで……自在に操るってえ、厄介この上ない子供なんだよっ、うちの新しい弟子ってのはっ！』



聞いたことも、想像したことさえないとんでもない言葉に、しかし紅玉の使徒にして、カーラトーニから『化け物』呼ばわりされている男性は呑気な感想を返した。

「冗談だろ？」

対する同僚の美女の言葉は容赦なかった。

『誰が冗談でこんなこと言うものかい。ついでに言うなら、その子はイイタールの娘っておまけつきだよ。そんなんとあんたんとこの暴れん坊が、いま、一緒にいるんだって話。どれだけやばいか、さすがにわかるだろう!?』

わかるどころの話ではなかった。

彼と相棒が成り行きで引き取り、教育することになった弟子は、これまで生まれたことのない金剛石を抱いて生まれてきた子供――金剛石の子供だった。

そんな子供をなんとか教育できたのは、ナウルニールとトリノアークのふたりが、金剛石に準じると言われる青玉や紅玉でも最高級の石を抱いて生まれて来、さらに長い人生経験を積んでいたからにほかならない。

類稀なる聖石を抱いて生まれてきた、あるいは稀有なる能力を示す使徒を、神々は特別に選び出すことがある。

通常であれば、長くて五、六十年の寿命しか持たぬ人間の寿命が、神の認めた範囲でのばされるのだ。

ナウルニールとトリノアークもそうして選ばれた者だった。
まだ選ばれて数年でそれらしい自覚は持てずにいるだろうカーラトーニとセイタマールもまた然り。
そんな面々でも扱いに注意するような子供がふたりも、現在野放しになっている……となれば……。
さあっとトリノアークの顔面から血の気が引いた。
金剛石の子供がひとり——でも、充分すぎるほどに面倒だと思っていたのに、聞いた話ではさらに倍。
（ついでにそのうちひとりは、火神の加護を受けている……？）
地上最強の宝石でありながら、金剛石は唯一最大の弱点を持つ。
燃えるのだ。
炭が燃えるように、石炭が燃えるように。
構成元素が等しいゆえに、金剛石は、燃える。
だが、その際生じる炎の勢いは他とは比較できない凄まじさだ。
聖石ともなれば尚更である。
しかも、すぐそばに——というか、ふたりのうちのひとりは——導火線よろしく発火能力まで持っているというではないか。

放っておけば、大火事起こしまくり、である。
背筋に冷たいものがはしる感覚を味わいながら、トリノアークは水鏡の向こうに見える顔なじみに誓って言った。
「絶対、捕まえる！　絶対、拉致して調教して、二度と変なこと考えないよう叩きのめす！」
だから、命ばかりは助けてやってくれ――。
考えられるだけの譲歩の末に、そう彼が頼みこんだとき、水鏡の向こうの美女は、大変不機嫌そうに顔をしかめた。
『誰が殺すだなんて言ったよ!?　そんなつもりなら、わざわざあんたに連絡なんざするはずがないだろうがっ！　ああ、もうやだやだ。この体力馬鹿。あんたとじゃ、普通の会話もできやしない。本当、さっさと縁を切りたいところだよっ！』
ヒステリックな響きも、トリノアークには関係ない。
彼は相棒――（注）同性――の顔を理想の美貌と見なす、少しばかり偏った嗜好性の持ち主だったが、美意識的には世間一般から決して外れているわけではなかった。
つまるところ、綺麗なものは大好きで、それがさらに異性であればなお嬉しいという人物だった。
でもって、水鏡の向こうに見えるカーラトーニは文句なしの美女だった。
（久々に会うけど、やっぱ、美人だよなあ……）

なんてことを思い、ついつい見とれてしまったトリノアークの意識を現実に引き戻したのは、水鏡に映っていない青年の声だった。

『くれぐれも弟子にはいい聞かせておくことだな。二度とこんな騒ぎはごめんだ』

淡々とした口調ながら、その奥に流れる静かな殺気に、トリノアークは肩をすくめた。

カーラトーニの過激な言動に隠れて、気づく人間は少ないが、セイタマールという青年もなかなか恐ろしい性格の主だった。

世間体を憚ってか、決して口にはしないが、実のところあの青年の関心は相棒である美女にしかなく、彼女さえよければほかはどうでもいいと思っているのが見て取れるのだ。

（やっべえ……ほんと、あのガキ無理やりにでも納得させねえと、セイのやつ平気で殺しかねねえぞ……）

もちろん、そんなことを見過ごすつもりはないのだが、それでも敵に回すと厄介な相手を、わざわざ怒らせたくはない。

「わかった。肝に銘じとくよ」

そう答えて、トリノアークはふう、と息をついた。

（あのガキ、面倒ばっかり起こしやがって……）

見つけたら念入りに『躾け』ないとな――と固く心に誓いながら、トリノアークは取り敢えずできることをすることにした。

できること、とは最寄りの神殿に向かうことだ。

トリノアークは非常に強い能力を持つ使徒であったが、感知能力に関しては素人以下なのである。一刻も早く問題の弟子を見つけるために、彼は感知力に恵まれた同僚の力を借りざるを得ないのだ。

（どこかにいないかねえ……おれ好みの美人で感知能力高くて、でもってナニィに妙な焼き餅焼かない使徒……）

万年男前の、しかも男色家でもないくせに、相棒の美貌が一番の好みと言い切る男の、このとんでもなく虫のいい願いがかなえられる確率は……限りなく、低い。

年を取るのは自分だけ、しかも確実に自分より相棒を選ぶような男を、いつまでも一途に想いつづけるのは難しい。

そのあたりのことに気づいているのかいないのか——トリノアークは目先の楽しみを満喫する気満々で、神殿に向かった。

（好みの美女がいるといいなあ……）

緊張感の欠如もまた、この男性の欠点のひとつであった……。

人間というもの、自分にはないものを他人のなかに見つけたとき、好意を抱くか、嫌悪感あるいは苛立ちを覚えるかのどちらかだと言うが、ガネルオージェの場合は後者だった。

（なんだ、あいつは!?）

高熱のため、顔を赤くしていたアラクセイトを後に部屋を出た彼は、自分でもどうしようもない苛立ちに唇を噛みしめていた。

原因はアラクセイトの態度の変化だった。

最初は確かに怒っていたはずだというのに、彼女はいつの間にか、こちらを気づかうような顔になっていたのだ。

自らの怒りより、相手を気づかう心のありようは、妙にガネルオージェの気に障った。

（呑気そうな顔をして……）

自分を劣等生だと平気で言えるあの無神経さも、癇に障る理由のひとつだった。

ガネルオージェには、到底口にできる言葉ではなかった。彼は『出来の悪い生徒』であることは許されなかったからだ。

金剛石を抱いて生まれてきた彼は、未熟であるがゆえに以前大きな瘴気を招き寄せた前科がある。

養母の歪んだ夢を、一刻でも長引かせるために、彼は知らずに瘴気を呼び寄せた。

無知な、能力の発露だった。

養母が命を落としたのは、そのせいと言えなくもない。
だから、二度とそのようなことを繰り返さないために、彼は死ぬ気でふたりの師匠について学んだのだ。厳しい師匠の元で学びつづける日々のなか、失敗を笑って口にできたことなどなかった。
金剛石の子供として生まれてきた以上、技の未熟は大きな災厄をこの世界に招きよせる元凶としかならないことを、誰よりも彼は知っていたのだ。
だのに……あの小娘ときたらどうだ。
イイタールの娘という、稀有な能力を与えられながら、制御できぬことを恥じ入る様子もない。
己の未熟さを深刻に受け止めているふうでもない。
きっと周囲に甘やかされてきたのに違いない。
(たとえイイタールの娘でも、モノが石墨ならたいしたことにはならないとでも思ってるんだろう……)
だから、真剣に修行に取り組もうとしないのだ。
そうに決まっている。
(なにより、あのとんでもないお人好しぶり……)
愛され、許されることに慣れきった者のそれだと、ガネルオージェは思った。

そうでなければ、あんなのほほんな性格が出来上がるはずもない。
その呑気さが、どうにも鼻につく。
（あんな小娘……喪月神の瘴気を目の当たりにしたら、腰を抜かすに決まってる……）
いっそ、見せてやろうかと、ガネルオージェは仄暗い想いを抱きかけた。
単に黒珊瑚の使徒である女性をおびき出すために攫ったはずの少女――それだけの意味しか持たぬはずの存在に対して、異常なまでの苛立ちを覚え、害意さえ抱いてしまった自らの心のありようを、彼は把握できてはいなかった。
（手を焼くことになっても、もうひとりのほうを攫えばよかった……）
そんなことを思いながら、ため息を洩らしたガネルオージェは、しかし次の瞬間びくり、と身を震わせた。
左の手首に、強烈な熱さを感じたのだ。
そこには、銀の腕輪がある。
彼が万が一にも暴走することのないよう、封じの意味も兼ねて、ふたりの師匠から手渡された品だった。
嵌めこまれているのは、二粒の宝石――矢車菊の色をたたえた極上の青玉と、鳩の血色の極上の紅玉。
彼が師匠と仰ぐふたりの使徒たちの生み出した子供石だった。

思わず舌打ちした。

それは、師匠のひとり――トリノアークが近づきつつある兆しだったからだ。

「ちくしょう……近場の神殿から助っ人を呼んだな……」

そうでなければ、こうも早々に、あの師匠が自分の居場所を突き止められるはずがない。

いかなる理由かは知らないが、鋼玉石や黄玉など、硬度の高い聖石を抱いて生まれてきた人間は、感知能力に関してはほとんど役にたたない。ナウルニールとトリノアーク、さらには金剛石の子供であるガネルオージェにしても例外ではなく、三人とも、ほとんど感知能力というものを持たない。

では、その力が必要となったときにはどうするのか？

簡単である。最寄りの神殿から、助けとなる人材を借り受けるのだ。

また、皮肉なことに、硬度の低い聖石の使徒ほどそちらの方面の能力は高いことが多く、旅の間でも困った覚えはない。

恐らく、今回勝手に動いた自分を見つけるために、トリノアークは神殿の力を借りたのだ。見つけられ、駆けつけられたらお終いだった。

いまだ修行中のガネルオージェが、剛剣を軽々と扱う矢車菊色の双眸の剣士にかなうはずもないのだから。

「……にしたって早すぎる！」

苛立ちのままに、宿の廊下の壁にこぶしをたたきつけながら、ガネルオージェは唸った。
相棒が喪月神の瘴気に捕まったときでさえ、苦い顔をしつつも「しばらくは暇だなあ」などと、心配のかけらも見せなかった男が、自分ひとりが姿を消したからといって、こうも早急に手を打ってくるとは予想外のことだった。
それほど、自分が信用のならない子供だということか、あるいはあの怠け者がそうせざるを得ないだけの理由が出来たのか……。
「なんにしても、ここで捕まるわけにはいかない……」
自分自身に言い聞かせるように、ガネルオージェはそうつぶやいた。
（そう……ここであきらめるわけにはいかない）
黒珊瑚の使徒であるカーラトーニには、なんとしてもナウルニールを解放してもらわねばならないのだから！
（おれの、この、いつ暴走するかもしれない能力を封じてもらうためにも、師匠には元気で自由でいてもらわないと……！）
そのためなら、なんだってする――。
そう、心に決めて、ガネルオージェは踵を返した。
目指すのは、出てきたばかりの部屋――あの石墨の子供のいる部屋だった。
アラクセイトは臥せっていたが、かまわずガネルオージェは引き起こした。

「な、なんなんですか、今度は、いったい!?」

熱のためか、真っ赤な顔をして、懸命に抗議してくる少女の手首を無理やり摑み、ガネルオージェは残る左手で、懐からナウルニールの聖石の子供石を摑みとり、イーオダール——風神の子供たちに命じた。

「連れていけ、おれを、あの記憶の場所に！　ナウルニールが捕らわれたあの山窟に！」

冷たい旋風が起こった。

容赦なく体温を奪い取る冷気を纏った豊珠の風霊たちの腕が、彼らふたりを抱きかかえこんだ瞬間だった。

「ちょっと……ちょっとっ！　これっていったい、なんなんですかぁっっ!?」

アラクセイトの必死の叫びが……虚しく空に、響いた。

7

ただでさえ風邪をひいていたところへ、再度の『寒風吹きすさぶ空中飛行』を強いられた結果、アラクセイトは息をするのにも努力が要る状態になってしまった。
どくどくどく、と心臓が脈打つたびに、痛みすら覚える。
体中の関節は痛むし、喉が渇いて仕方ない。
なのに、寒いのだ。
「う、うぅぅ……」
喉もやたらに痛いので、声を出すのも辛い。
けれど、黙っているのも辛いので、ついついぼやきが出る。
「痛いし寒いしきついし苦しいし……」
昨日までのようなくしゃみは出てこない。
どうやらそういう段階を突き抜けてしまったのだと思うと、なんとも不安を覚えるアラクセイトだった。

（なんでわたしがこんな目に……）

悪いのは誰か？

もちろん、あのガネルオージェと名乗る少年以外にはいない。

（ひとのこと、勝手に攫って、風邪ひかせたくせに突然怒りだすかと思えば、また風邪のひどくなるようなことするし……）

おまけに、この山窟に連れてきてしばらくすると、どこかに姿を消してしまった。

（悔しい、悔しいっ！　あんなひと、大嫌いっ！）

一応、野宿用とおぼしき毛布に包んでくれて、そばに火を焚いてはくれたけれど——でも、自分のせいで熱を出した相手を放り出して出掛けることはないじゃない……と思ってしまう。

（ひどい、ひどい、ひどい……っ！　愚痴の聞き手にぐらいなってくれたっていいじゃ……）

ないの——と思いかけて、アラクセイトはぶるぶるとかぶりをふった。

急に動いたものだから、こめかみあたりに強烈な痛みが走った。

（うわぁんっ、最低っ！）

あまりの痛みに涙ぐみながら、彼女はすんすんと鼻を鳴らした。

自己嫌悪のせいだった。

（あんな、あんな勝手でひどいひとなのに……それでもそばにいてくれないよりはマシだなんて……いくら風邪で気弱になってるからって、わたしってば、心が弱すぎる……）

いや、関節が痛むほどの高熱を出した状態で、どことも知れぬ場所にひとり残されたとしたら、不安にならないほうがおかしいわけだが、常々自分の精神面の弱さに劣等感を覚えている少女は、そうは分析しなかった。

（こんなんだから、昔のこと思い出したのに、イイタールの子供たちにからかわれちゃうんだ……ミイノはちゃんと力を制御できるのに……わたしったら、怖い目にあったからって記憶だけならまだしも、力の使い方まで忘れちゃった軟弱者だし……）

これもまた、他者からすれば、とんでもない思い違いなのだが――なにしろ、喪月神の名残とも呼べる意識に目をつけられ、攫われた子供のうち、取り敢えず五体満足で戻ってきた者はアラクセイト以外にはいないのだ――そんなこととは知らない少女は、自分の未熟さばかりを振り返る。

なまじ熱を出して臥せっていることもあり、意識がマイナス方面へ向かってしまうのだ。

いや、熱のせいばかりとも言えなかった。

本人、熱ゆえの苦痛がかなり大きかったものだから、自覚してもいなかったが、この山窟に宿る空気は、ひとを気鬱にさせる力を含んでいたのだ。

（ああ、気持ち悪い……眠っちゃいたい……）

そうしたら、きっと楽になれるのに――。

けれど、どこかでそれを恐れている自分がいた。

（辛いのに……きついのに……眠っちゃいたいのに……でも）

眠るのが、怖い。

違う。

眠ってはいけないような気がするのだ。

（そんなはず、ないのに……）

昔から、風邪をひいたときの一番の治療法は、暖かくしてとにかく汗をかき、そのあと着替えてぐっすり眠ること、なのだ。

もちろんその間に、食事や薬を口にできれば、それに越したことはないけれど、あまり裕福とは言えない、しかも集落から外れた場所に居を構えていた彼女の家族は、ときによってはそこまで手が回らないこともあり、『汗を出す』、『着替える』、『眠る』を繰り返すことで風邪の退散をはかることが多かった。

その『汗を出す』ための暖も、アラクセイトの『石墨の子供』という異能なしにはかなわなかったことなのだけれど。

それでも……と、つい彼女は思ってしまう。

貧しい家だったから、誰かが病気になってもつきっきりで看病なんてできない状況だったけれど、仕事や手伝いの合間を縫って、必ず誰かが、寝ているアラクセイトの部屋に顔を出してくれた。

目の前にいてくれなくても、そばにはいてくれているのがわかっていた。
だから、風邪をひいて熱を出しても――ソラミイノほどではなくても、年に一度ぐらいはそういうことはあるのだ――淋しいとか思うことはなかった。
（淋しい……？）
ふと、自分の考えに引っ掛かりを覚えたアラクセイトは、正しい答えを見つけようとした。
熱のせいで、うまく頭が働かなかったけれど、今回はするりと見つけた。
いまの自分の心のありようが、以前『神隠し』にあったときのそれと酷似していることに気づいたからだ。
（違う……淋しいんじゃ、ない……。わたし……わたし……ひとりでいるのが……）
どくん、と大きく胸が脈打った。
その瞬間、彼女は答えを見つけた。
（……怖い、んだ……）
いったいいつから、こんなふうになってしまったのだろう？
自問の答えはすぐに出た。
あの得体の知れないモノに攫われて、殺されそうになってから、だ。
あれ以来、自分はとても怖がりになった。
みんなの寝息が聞こえないと、安心して眠れなくなってしまった。だから風邪をひいたりし

て、部屋でひとりで残されるのがとてもイヤになった。
（だって、ひとりきりでいると……また、あの声が聞こえてきて、わたしをどこか恐ろしい場所に連れて行ってしまいそうで……）
今度こそ、あの優しい声をした、けれど恐ろしいモノが、自分を捕まえにきて殺してしまうような——その、明確でありながら曖昧な恐怖。
「や、だ……！」
蓑虫よろしく、毛布を体にまきつけながら、アラクセイトは洩らした。
（なんで、なんで、よりにもよってこんなときにっ！　こんなこと思い出さなきゃいけないのよ……わたしの馬鹿、馬鹿！）
そばには誰もいない——この状況で。
また、アレが来たらどうしよう……!?
もちろん、いまではアレの正体がなんであるのかわかっている。
記憶を封じていたころのように、もやもやとした得体の知れぬ恐怖ではなくなっている。
けれど、アレが恐ろしい存在であることに変わりはないのだ。
（だって、アレは……）
そう、思いかけたときのこと——。
アラクセイトの耳は、近づいてくる足音を拾った。

（まさか……!?）

普段の彼女なら、決してやらぬであろうことを、しかし熱のために思考能力が著しく低下していた彼女はやってしまった。

「きゃあああぁぁぁっ！」

恐怖に、身を委ねてしまったのだ。

「おい、待てったらっ！　おいっ!?」

必死に声をかけてくるそのひとを、その声を、知っているような気もしたけれど、強すぎる恐怖感に、アラクセイトはこらえることができなかった。

「いやあぁぁっ！」

叫んで、彼女は逃げ出した。

彼女の属する『場』から――一目散に。

その場に残されたのは、彼女の『脱け殻』としか評することのできぬもの、だった。

アラクセイトの魂は、恐怖ゆえに肉体から抜け出してしまったのだ。

（あれ……あれ、あれ……?）

なんだか急に体が軽く、楽になったような気がして、思わずアラクセイトは目を瞬いた。
先程まで、あんなに苦しかった体が、まるで風のように軽く感じられた。
（あれ、れ……？）
夢だったのかな？
そう思いかけて、アラクセイトは即座にかぶりをふった。
否定したわけではない。
夢と現は場合によっては非常に見極めが難しいということを教えられていたからだ。
いや、現実に、身を以て知っていたからだった。
かつて、喪月神の名残とも言える意志がアラクセイトを攫ったとき、その誘いは夢からのものだった。
だから、自分自身は、あれは恐ろしい、夢に仕掛けられた罠だったのだと……記憶が戻った当初は思っていた。
そうではなく、肉体ごと、攫われていたのだと知らされたのは、ほんの三月ほど前のことだった。
馬鹿馬鹿しいと、そのときは思った。
夢はあくまで夢にすぎない。
そんな曖昧で不安定な『場』と、現実をどうやって繋げるというのか——できるはずがない

と彼女は主張した。

けれど、黒珊瑚の使徒である女性は、「だけど、それと同時にあんたの身柄が神殿から、痕跡も残さずに消えたのも事実なんだよ」と答えた。

そうして、そのあとでこうも言った。

「夢と現は、存外近くにあるもんなんだよ」

と――。

聞かされたときには、よくその意味がわからなかった。

だって……夢は、夢だ。

夢は心が……魂だけが見るもので、現……現実とは違う。

現実とは、心と体の両方が味わう世界だ。

だから、全然違うものだと主張したのだけれど、黒髪の美しい女性は、意味ありげに微笑んで「そうだと、いいね」と答えた。

嘲る風もなにもなく、ただ純粋にそう思い、そう口にしたのだとわかって……その瞬間に、得体の知れぬ不安を感じたのを覚えている。

承服しがたいことを言われたというのに、それ以上、相手に詰め寄って、言葉を撤回させることができなかった。

それは、なぜ、だったのか。

なんだか、いまならわかるような気がした。

（っていうか、わたしってば透けてるし……これってば、多分魂とか意識とかだけ、体から抜け出しちゃった状況なんだろうって思うわけだし……とゆーか、それよりなにより、こんなとこで魂だけうろついてる場合じゃないとゆーか、一刻も早く体に戻らないといけないとゆーか……なのに、なのにっ！）

戻り方がわからない——という、最低な状況にアラクセイトは置かれていた。

仕組みがどうなっているのかなどは、アラクセイトの興味を引くものではなかった。

現実として、困った事態と成り果てている事実こそを、彼女は究明したがっていたのだ。

（悪寒はするし、イヤな気配が満ちあふれてるし……大体、ここってばっ！　悪趣味の限りを尽くしたみたいな変な場所だしっ！）

逃げられるものなら、一刻も早く逃げ出したいという本音のままに、彼女は周囲に目を向けた。

それは、醜悪な光景だった。

脈打つ瘤が、いくつも密集して群生していた。

ひとつひとつが、どくん、どくんと脈打っていた。

さながら、芋のように。

あるいは竹のように。もしくは茸のように。

無数の命の糸を張りめぐらせながら、ただひとつの存在のすべてを根こそぎ奪い取ろうとしているのだ！

そう……かつて見た、創世神セイトーリを貪り尽くそうとする喪月神の瘴気そのままに！

「なんなのよ、ここはっ!?」

アラクセイトは声を張り上げたつもりだった。

けれど、なんの反響もなかった。

自らの上げた『声』すらも聞こえないその事実に気づき、アラクセイトは一瞬目を丸くした……。

（ええっと……これ、なに!?　どういうこと……!?）

普通……というか、一般常識からは外れた事態に身を置いていることは、さすがにこの時点で気づいてはいたものの、さすがにそれ以上の認識はできていなかった。

「いったい……」

そう口にしたときのことだった。

以前見た夢の中心――どくどくと脈打つ瘤と根っこのようなものの中心に、据えられた恰好の存在に変化が訪れたのは。

それは最初、アラクセイトの目には巨大な土の塊にしか思えなかったモノだった。

しかし、見る間にそれは姿を変えていく。

土塊はぼろぼろと崩れ落ちて行き、アラクセイトよりは少々大柄な程度の人の形を作っていった。

ぼろり、と土塊が落ちる。

その瞬間、内側から現れたのは青白いというのとは全然違う、だが見たこともないほどに白く滑らかな……人間の皮膚、だった。

(え!? うそ!? なに!?)

驚愕するばかりのアラクセイトの前で、順々に土塊は消えて行った。

残ったのは……到底人間とは思えないほどに美しい造作の青年の姿——。

その髪は初雪を思わせるやわらかそうな純白、その肌は白磁以上の白、伏せられた瞼の奥に潜む瞳の色だけが、見えない。

けれど、瞳の色を見るまでもなく、感じ取れることはある。

そう、それは奇跡の美貌。

(なんって……)

ほう、とため息を洩らしながら、アラクセイトは思った。

(なんって綺麗なひと……)

そんなことに気を取られている場合ではないとかなんとか、そう自制する働きさえも鈍らせてしまうほどに、それは圧倒的な美貌だった。



（カーラさまと張るわ……ん、でも、ちょっと違う感じもしたけど……でも、本当に怖いぐらいに綺麗で……あ、わかった）

夢のなかだというのに、彼女は自らの手をあわせた音が聞こえたような気がした。

「怖いぐらいに綺麗ってとこが、きっと肝心なんだわっ！　だって、カーラさまはお綺麗だけど、怖い感じはない方ですもの……」

そうか、その差だったのかと、ひとりでアラクセイトが納得しているその間に、眠れる麗人の睫毛が微かに震えた。

だが、彼女はそのことに気づかなかった。

だから——相手が完全に覚醒し、口を開くまで、彼女は相手のことをすっかり忘れてしまっていたのだ。

「……カーラが、どうしたのだ、って……？」

ゆっくりと、純白の長い睫毛に縁取られた双眸が、開く。

あらわとなったのは、鳩の血色の双眸——。

（え？　あ？）

なにが、起こったというわけではなかった。

けれど、その青年が瞼を開けたその瞬間に、空間そのものを震わせるように、空気が質を変えたように、アラクセイトは感じた。

「カーラさまは……その……」

言葉に詰まったのは、別に誤魔化すためではなかった。

その状態において、それ以上言葉を発するための力が足りなくなったせいだ。

早い話、青年が目覚めた途端、アラクセイトの全身にかかる圧迫感とも不快感とも呼ぶべきものが一気に強くなったのだ。

すさまじいまでの不快感を覚える空気だった。

いや、苦痛と言い換えてもいいほどの感覚をもたらすものだった。

（いやだ、いやだ……いやだっ！）

こんなところには、一瞬だっていたくない――絶対にいやだ、と思った。

（たとえ、この山窟を吹き飛ばすことになっても……っ！）

それでも、この気持ち悪い空間にいるよりはまし――。

実体を伴わないアラクセイトの意識は、普段より奔放になっていた。

（ここ、イヤ。ここ、イヤ。ここはイヤったらイヤ……っ！）

そう思う彼女に、土塊のなかから現れた不思議な青年は「待った」をかけた。

「待ちなさい、ちゃんと戻れるのかい？　きみはずいぶんと敏感にできているようだ。闇雲に逃げ出してもこの瘴気に飲みこまれるのが落ちだよ」

「それはそうかもしれないけどっ！　でも、イヤなんですもの……ここにいたくないんですも

のっ！」

叫んだアラクセイトに、青年が意外なことを言いだした。

「ここにおいで」

告げられた内容が信じられずに、アラクセイトはふるふるとかぶりをふった。

なぜなら、青年はこのイヤな気を発しているモノの中心に据えられた恰好だったのだから！

（イヤ……絶対にイヤ。ここでもこんなに強く感じるのに……あのひとのそばに行ったりしたら……）

もっと強い瘴気に触れるに決まっている。

しかし、青年はあきらめなかった。

「いいからおいで。きみが生身なら、わたしの子供石を投げてあげられるんだろうが、その状態では投げても受け取ることはできないだろう？」

子供石という言葉のおかげで、アラクセイトは冷静さを取り戻した。

（ええっと……この方はカーラさまのこと御存知なのよね？　でもって子供石って口にするってことは聖石を抱いて生まれてらした方ってことで……）

しかも、こんな強烈な瘴気のなかにあっても、平静でいられるとあれば、使徒であるに違いない。

（でもって、瘴気に捕まってるみたいにしか見えないってことは……あ、もしかしたら……!?）

この段になるまで気づかなかったあたり、自分はずいぶん鈍いか、あるいはよっぽど混乱してたんだろうな——と思いながら、彼女はそろそろと尋ねてみた。
「もしかして……あのひとのお師匠さまって、あなたのこと、なんでしょうか……？」
青年は、不思議そうに首をかしげた。
「あのひと……？」
「ええっと。ガネルオージェって名乗るひとで、金剛石の子供で……多分。使徒さまなのかもしれないけど、あんなひとが使徒さまだったらちょっとイヤかもとか思っちゃったんだけど……ううん、そうじゃなくてっ！」
なにをどこから説明していいのかわからなくて、しどろもどろの説明となった。
本人、冷静になったつもりだったが、実のところ、まだ混乱していたのかもしれない。
だがしかし、相手の青年は非常に冷静で、しかも勘がよろしかった。
「もしかしてあの子はカーラに会いに行ったのかい、わたしを助けてくれるように？　困った子だな、わたしは大丈夫だと言い聞かせたはずなのに……」
ふう、と物思わしげなため息を洩らし、青年はしばし考えこむように沈黙した。
「馬鹿な子だ……。カーラがうなずけるはずもないというのに……おまけに、きみがこんなところにいるということは、断られた腹いせか、あるいは人質に取るつもりで、攫ってきたという線なのだろう？」

そのものずばりな言葉に、アラクセイトは目を瞠ると同時に、少しばかり居心地の悪い気分になった。

なんだか、自分が告げ口したような後ろめたさを感じたのだ。

もちろん、ガネルオージェのやったことは許しがたいし、はっきり言えば大嫌いな相手だったけれど、だからといって彼のお師匠であるひと——それも、彼が、救いたいがために無茶をやった原因であるひとに、彼の悪さを教えるつもりはなかったのだ。

返答に困ったアラクセイトに、怖いぐらいに綺麗な顔の青年は——そんな彼女の心中を察したのかもしれない——やわらかい微笑みを浮かべ、言を継いだ。

「きみが気に病む必要はないよ。非はすべて、こちらにあるんだからね。あの子は、そろそろ自制することを覚えてもいい頃合いだと思ってこの方法を選んだわけだし、なぜ大丈夫なのかは、わたしの相棒がしっかり説明してくれるはずだったんだからね。相棒の言葉が足りなかったか、あの子の我慢がきかなかったのか……どうせ両方だろうけど、カーラやきみたちを巻きこんだのは、全面的にこちらのせいだし……」

そう言って、青年は再び深い息をついた。

「それにしても……きみも、どうやら複雑な事情を抱えているようだね？　あのカーラたちが酔狂で弟子を取るとも思えないうえに……感じ取れるだろう、いまのきみなら。いったん落ちつきかけていた瘴気が興奮している。どうにもきみが欲しいらしい。もう一度言うよ、ここに

来なさい。なにも自分の身代わりにしようだなんて思ってないから」

こちらを安心させるように告げられた言葉に、しかしアラクセイトが返した反応は、素朴と言えば聞こえはいいが、呑気というか、間抜けなものだった。

「あ、そういうこともあり得るんだ……」

癖気の強さゆえに、どうしても青年に近寄れずにいた彼女だが、彼が口にしたような可能性については、かけらも考えていなかったりするのだ。

ソラミイノがことあるごとに「この呑気者！」と、青筋を浮かべて怒鳴りつけるのも無理からぬことかもしれない。

青年もまた、あまりに意外な言葉に面食らったのか、双眸を瞠ったが、すぐにくすりと小さく笑った。

「いいね。けれど、きみの周囲にいる人間は、ずいぶん苦労させられそうだ」

褒めているのかけなされているのかわからない台詞に、アラクセイトはしゅんと身を――実体はないのだが――縮こませた。

自分の劣等生ぶりを見抜かれたような気がしたのだ。

だが、青年はそれ以上彼女に対して踏みこむ真似はせず、静かに微笑んだ。

その途端――だった。

空間に青い光が溢れた。

極上の青玉の条件とされる、矢車菊の花の色そのものの光が――。

（え……!?）

目を焼かれるような眩しさが過ぎた後――生身でもそうでなくても、眩しければつい目を閉じてしまうのだと、ひとつ学習したアラクセイトである――そろそろと目を開けた彼女は、青年が「大丈夫だから」と口にした、その理由を目の当たりにすることになった。

青年を捕らえている枷とも檻とも見えた、瘴気のあのぶよぶよした瘤のようなモノの一部は、色彩を……いや、本質的な部分で変化していたのだ。

いまのアラクセイトの目に映るのは、捕らわれ人の姿ではない。

我が身を投げ出したかに見せ掛け、じわじわと、自分を中心にして、瘴気を浄化するという、とんでもない真似をやっている超人のそれだった。

青玉は魔を……瘴気を祓う。

（では、このひとは、捕まったふりをして、瘴気を浄化してらしたんだわ……）

それができるのは、極上の青玉を抱いて生まれてきた青玉の使徒のみ。

大丈夫なわけだ。

安心していいと言うわけだ。

確かに極上の破邪の宝石――しかも聖石そのもののようなひとの懐以上に、この瘴気に溢れた場所で安全な場所などない。

「おいで」
今度は、アラクセイトも迷わなかった。
「はい！」
と、答えて、この場における一番安全な場所に駆けこんだ。
危険はほかにもあったのだけれど――。

8

なにが起こったのか、ガネルオージェには理解できなかった。

突然悲鳴を上げ、がくりと倒れふした少女の体を、すんでのところで受け止めた彼は、まずその口許に、自らの腕輪を寄せた。

その銀が、かすかに曇りを生じたことに、ほっと息をつき……けれど、それからどうしていいのかわからず、半ば途方に暮れてしまった。

神にかけて、アラクセイトという名の少女に危害を加えたわけではないと誓える。

大体、彼女はあくまで人質にすぎない。それ以上のなにかを、彼は期待したことすらなかったのだ。だからこそ、風邪をひかせたことには罪悪感を抱いていたし、さらにその上、強行軍を強いたことも……悪いとは思っていた。

彼女をひとり残して、山窟の外へ出たのだって、近くの街で解熱薬と、消化のいい滋養のある食べ物を購入するためだったのだ。

だのに、戻って来るなりのあの出来事——なにが起こったのか、教えてほしいのは自分のほ

うだと言いたいぐらいだった。
（息は……あるんだ）
死んだわけではない。
だが、それ以上のことがわからない。
（熱のせいで、夢と現を取り違えたのか……？　それでおれのことを、なにか恐ろしいモノだと勘違いしたとか……？）
あり得ない話ではない。
悪夢というものは、健康なときより、病に伏したときに忍び寄ってくるものなのだから。
（あんな呑気そうな小娘でも、悪夢を見ることはあるというわけだ……意外だが）
当人が聞けば、烈火のごとく怒りだすこと間違いなしなことを思いながら、ガネルオージェは少女の体を再び横たえ、毛布でくるみこんだ。
よもやまさか、この山全体に息づく瘴気の影響だとは、かけらも考えはしなかった。
なぜなら彼は、出掛ける際に、自らの生み出した金剛石の子供石でもって、結界を敷いていたからだ。
それは完全に、結界内部に位置する人物を、瘴気から守る種類のものだった。
たとえ相手とするのが喪月神の生み出した瘴気であろうとも、簡単にその内部を窺うことなどできぬ、強固なものだった。

矢車菊色の青玉の使徒と、鳩の血色の紅玉の使徒――ふたりの師匠についてすでに五年、外見こそ十代後半にさしかかるかどうかぐらいにしか見えないが、今年二十歳になった彼は、その間にさまざまな術や力を会得していた。

感知能力に関してだけは、ふたりの師匠が揃いも揃って鈍感この上ないものな上、彼自身、その手の才能はないらしいことが、早々に判明したこともあって――師匠たちのツテでもって、神殿に属する使徒に学んだことはあったのだが、十人以上に学んだにも拘わらず、そちら方面の師匠たちことごとくに匙を投げられたという、あまりありがたくない過去があるのだ――その手の努力は放棄して久しかったが、それでも強固な結界を張ることについてはそれなり以上の自信を持っていた。

よほどに敏感な者か、あるいは瘴気自身がよほどに欲する者でもない限り、彼の結界に包まれた者が、瘴気によって危害を加えられることはない――と、感知能力の高さで知られる神殿の使徒がお墨付きをくれたわけだから、この自信はきちんとした根拠あってのものだった。

だから、一概に彼を責めるわけにはいかない。

彼には感知能力がほとんどなく、しかも人質にと攫ってきたアラクセイトに対する情報量も極めて乏しかったのだから。

（なんだって言うんだ……）

どうも、この小娘に係わって以来、ろくなことがない――などと、これまた身勝手なことを

考えながら、ふと結界に用いた子供石に目を向けた彼は、はっと息を呑んだ。
無色透明なはずの金剛石が、焚き火の炎の光を反射しなかったことに気づいたのだ。
なにがあったというのか――注意深く、少女の体をその場に横たえて、彼は結界石へと近づいた。そして、それを見るなり絶句してしまった。
金剛石が……彼の生み出す聖石の子供石が、完全に力を失い、白濁していたのだ！
「どういう……ことだ……!?」
この山窟が、喪月神の瘴気の溜まり場であることは知っていた――そう、師匠であるナウルニールは、その瘴気に捕らわれてしまったのだから。
だからこそ、結界を敷く際には、細心の注意を払ったのだ、病で弱った少女が、万が一にも瘴気に触れることのないようにと。
だのに、白濁してしまっている金剛石――ということは、結界は無効化されていたことにはならないか？
（最高の結界を張ったんだぞ!?　だのに、役に立たないのか!?）
それとも、自分がまだまだ未熟であるということなのか。
だが、あれこれ考えこんでいる余裕はなかった。
かろうじて、息をしているとはいえ、恐らくいまの少女の肉体は空っぽなのだ。瘴気怖さに意識が体から逃げ出したのだろうが、戻れる体を確保するのは、最低限の自分の義務だとガネ

ルオージェは思った。言うことなすこと、ことごとく鼻につく、気に入らないことこの上ない少女ではあったが、死なせたいとは一度だって思ったことはなかったのだから。

「取り敢えず、新しい結界を……」

張らなければ——とつぶやきながら、白濁してしまった結界石に近づきかけたガネルオージェは、本能的な危機感を覚え、反射的に飛びのいた。

その、刹那のことだった。

星を描くべく据えられた十個の金剛石が、ほとんど同時に炎を噴き出した！

途中立ち寄った宿での出来事と酷似していた。

「あの小娘っ！　まだ悪夢に捕まっているのかっ!?」

なんとはた迷惑な——と顔に書いて、ガネルオージェは唸った。

しかも、間が悪いことに、左手首の腕輪がちりちりと熱を放ち始めた。

（トリノが近くに来てる……!?）

冗談ではなかった。

こんなところで捕まるわけにはいかなかった。

なんとしても、師匠である青年を、ガネルオージェは解放するつもりだったのだから！

しかし、暴走したとしか思えない、アラクセイトの放った炎は広まるばかりだった。

空気そのものを焼き尽くす勢いで、山窟内に広がっていく。

（ならば、いっそ……）

と、ガネルオージェは思った。

彼が抱いて生まれてきた聖石は無色透明な金剛石――。

黒、灰色、透明な石は、水の宮の加護を得るという。

（そういうことなら……！）

懐から自らの子供石を数粒取り出し、覚悟を決めてガネルオージェが息をついた――まさにその瞬間――。

ごくごく身近な場所から、制止する声が聞こえてきた。

「やめて、おおき」

その声を、ガネルオージェは知っていた。

（カーラトーニ!?）

間違い、なかった。

なにより、彼の喉元につきつけられた漆黒の――黒珊瑚で出来た短剣の刀身が証明していた。

（なぜ、ここに……!?）

問いかけるより早く、黒髪の美女はこう告げた。

「空を飛べるのは自分だけの特権だとでも思っていたのかい？」

油断というよりは、誤算だった。
最上位にある聖石の使徒たちのとんでもない能力と、その情報及び物資交換の実情を、ガネルオージェはわかっていなかったのである……！

アラクセイトは、まるで幼い子供だったころに逆戻りしたかのような、絶対的な安心感のなかにいた。
破邪の宝石である青玉の化身のような青年のそばで、彼女はこれまで努力してもできなかった数々のことをやり遂げていた。
いや、ナウルニールという青年を信頼したことで、その能力をうまく誘導されていたのだという言い方もあるかもしれないが。
けれども、まず第一に、体から逃げ出してしまったこの魂が、なんとか戻れるよう努力するというのが最優先事項だった。
「瘴気の塊は……どう？　感じ取れるかい？」
問われて、アラクセイトは首をかしげた。
そんなことを言われても、わからないものはわからないのだ。

「わかりません」

と、正直に告げた彼女に、青年は微笑みを崩すことなく「目を閉じてごらん」と言った。

「ときには見えることが邪魔になることもある……らしいからね。いいから目を閉じて……そして、感じてごらん。いま、自分が一番行きたいところがどこなのか……ね」

言われたままに、目を閉じてみる。

意識体であるいまの自分に、それが意味を持つものかどうかはわからなかったが、それでも試してみる価値はあると思ったのだ。

そして、彼女が驚いたことに、まぶたを伏せたその瞬間、確かに別の視界が目の前に広まったのだ！

「きゃあっ！」

あまりのおぞましさに、思わずアラクセイトは目を開いてしまった。

艶のない黒煙にも似たなにかが、木の根を思わせる形をとり、蠢いていた。

ざわざわと、のたうつような動きは、本能的な嫌悪感を呼び起こすもので、アラクセイトは目を逸らさずにはいられなかったのだ。

そんな彼女にナウルニールは告げた。

「怖がらないで……よく見るんだ。さっきも言ったように、やつらの動きが活発化してる……つまり、きみたちのことに気づいて捜してるってことだ。イヤかもしれないが、戻る道は

きみ自身で見つけるしかないんだよ。わたしには、そこまでの力はないからね」

そう言われて、アラクセイトは小さくうなずいた。

青年の言ったことが事実にしろ、そうでないにしろ、自分で自分にできることを放棄していい理由にはならないのだから。

(ようし……落ちついて、落ちついて……怖いと思わなければいいんだから。怖くない、怖くない、怖くないったら怖くない……けど)

「でも、やっぱり気持ち悪い……」

思わずつぶやいた彼女に、青年はにこやかに、とんでもないことを耳打ちしてくれた。

「だけど放っておいたら、その気持ち悪いやつが、きみの体を乗っ取るかもしれないよ?」

がつんと、こぶしで頭を殴られたような衝撃を受けた。

アラクセイトが俄然やる気を出したのは言うまでもない。

(冗談じゃないっ! あんなモノに触られるなんて……それどころか乗っ取られるだなんて! 絶対、絶対御免だわっ!)

かくして、気持ち悪さを堪えながら、彼女は必死に自分の体の在り処を捜した。

最初はうまくいかなかったが、あるときを境に、捜しやすくなった。なんとなれば、墨色の触手のうごめく闇のなかに、ぽう、と輝く存在を見つけたからだ。

それは強い、強い輝き——目を灼くような、すさまじい白光。

存在そのもので、周囲の瘴気を焼き払う――圧倒的な力の主。
その正体に気づいたとき、アラクセイトは少々意外に思った。言動といい性格といい、こんな光輝を放つような人物には思えなかったからだ。
白光を放つ者――それは、そう、ガネルオージェだった。
彼を中心にして、光は闇を徐々に薄めていく。
闇夜のように、なにも見えなかった山窟内が、いまでは夜明け前、あるいは日没直後ぐらいには見通せるようになっていた。
だから……そんな薄明のなかで、アラクセイトは彼以外の、気配を綺麗に隠して近づいてきた数人の人物の存在にも気づくことができたのだ。
（カーラさま、セイさま……それに、あのひとは見たことないけど、多分トリノアークさま……だわ）
ほっと息をついた。
きっと、大丈夫だと思った。
あのひとたちが来てくれたのだから、もう大丈夫だと。
けれど、それと気を緩めるというのとは違う。彼女の心配は、自分の『イイタールの娘』としての能力の暴走であり、彼らの姿を認めて安心したのは、そうなったところで大被害をもたらすことにはなるまいという……いささかその、感心できない理由からだったのだから。

それに実際、事態は安心できるものではなかった。

ガネルオージェが、自分の体を丁寧に――これもまた、意外に思った。もっと乱暴に扱われるかと思っていたのだ――横たえたとき、アラクセイトは小さな悲鳴をあげた。

彼が結界を張るために地面に置いていた十個の金剛石――そのことごとくが白濁していることに気づいたのだ。

（……結界、張っててくれたんだ……。もしかしたら、だからこんな空気の悪い場所でも、なんとか助かってた……？）

思えば、風邪のせいで、ずいぶん弱っていたはずなのだ――自分は。

それが、こんな瘴気の巣窟のような場所で、生身のまま放り出されていたら、一刻だって無事にすんだはずがないのだ。

（ごめんなさい……思いやりのかけらも持たない身勝手野郎だなんて思っちゃって……。そのことについては、あとでちゃんと謝らなくちゃ……）

と、いまは届かぬ言葉を紡いだ彼女は、しかし次に見せた彼の行動にぎょっとした。

ガネルオージェが……白濁してしまった金剛石に向かって歩きだしたのだ！

『取り敢えず、新しい結界を……』

声も、不思議にはっきりと聞こえた。

「だめぇっ！」

アラクセイトは必死に叫んだ！
けれど、声は届かない。
瘴気に毒され、それでもなんとかぎりぎりのところで持ちこたえている金剛石の結界を、一度壊して張り直すために、彼が歩を進める！
ガネルオージェが結界石に触れた瞬間にも、結界は消滅する。
そして同時に、白濁しきった金剛石に宿った瘴気は、いっせいに自分の体に襲いかかる！
いや、それだけではない。この視点に立って、初めて気づいたのだけれど……この山窟に巣くう瘴気は、自分だけでなく、彼をも欲している。
普通では触れることもできないはずの、光輝の化身のような彼――けれど、彼自身が生み出した子供石を媒介とすれば、あるいは逆に彼の内側に入りこみ、蝕むことも可能かと……瘴気がもくろんでいるのが、なぜかアラクセイトにはわかってしまったのだ。
「駄目ったら駄目ぇっ！」
叫んで、アラクセイトは知らず、動いた。
先程まで、恐ろしくたまらず、居すくんでいた空間へと、彼女の意識体は駆けだしていた。
自らの肉体へと戻るために。
そして、この山窟に巣くう瘴気を焼き払うために！
そうしなければ、全員が無事にここから出ることはできないのだと、心のどこかでわかって

いた。

「ナウルニールさま！　今度は生身で会いにまいりますっ！」

叫んだ彼女に、件の青年はにっこり微笑んで答えとした。

大丈夫だと、保証してもらえたような気がして、アラクセイトは一所懸命、自らの肉体を目指した。

魂は、一夜にして千里を駆けるという。

確かに、彼女の意識はすさまじい速度で肉体に戻ろうとしていた。

それでも、黒い瘴気の妨害に、思ったほどに早くは戻れない。墨色の触手は、なんとかして彼女を搦め捕り、時間を稼ごうとしていたのだ！

ガネルオージェが結界石に近づく――一歩、また一歩。

（駄目ったら駄目だって、言ってるのに……なんだって伝わらないのよっ！）

もう、あと一歩で届いてしまう。

壊れてしまう！

そう、思った瞬間のことだ、アラクセイトはガネルオージェのすぐそばに、力強い味方の存在を感知した。

（カーラさま……！　間に合った……感謝しますっ！）

ならばもう、遠慮はいらない！

「イイタール！　あなたに名付けられ、あなたの真名を授けられたわたしの声が聞こえるならば、わたしに助力をっ！　わたしは、瘴気を焼き尽くすっ！」

叫ぶ！

それが、彼女が意識体としてなした最後のことだった。

白濁した十個の金剛石から、一瞬にして火柱がたったのはこの直後のことだった。

宿る喪月神の瘴気ごと、金剛石は燃え尽きたのである。

目を開ける。

もっと大変かと思ったけれど、それはたやすいことだった。

体は……やっぱり重くてだるかった。熱が下がっていない証拠なのかもしれない。

けれど、意識だけははっきりしていた。澄みすぎていて、怖いぐらいだ。

ただ、体だけが重くて……生身って、ちょっと面倒くさいかも、なんて少しだけ思ってしまった。

（だからって、幽霊になんかなりたくないけど）

そう思いながら、アラクセイトはその場に立ち上がった。

「よかった、気がついたかい？」

周囲は喪月神の瘴気ふんぷん、はっきり言って尋常な事態でないことなど、百も承知しているはずのカーラトーニの声は朗らかだった。

いまのアラクセイトには、この場が……いや、喪月神の瘴気の係わる場所が、どれほど黒珊瑚の使徒にとって危険な場所であるかがわかる。知識としてわかるのではなく、全感覚でもって理解できるのだ。

海神アイルトーリは、水神カンラタールを生む以前に、いまでは喪月神と呼ばれるようになったふたりの月神との間にふたりの子供を産み落とした。

けれど、ふたりはふたりとも、神とはなれぬ存在として誕生した。

ふたりとも、海のなかにあってしか生きることのできぬ存在だった。

ひとりは海によってのみ育まれ、生きることのできる『育つ石』。

もうひとりは海によってのみ育まれる月のかけら。

それらは人の世において珊瑚と真珠と呼ばれる。

真珠は後に、真水のなかでも育まれるようになったが、珊瑚だけはそうはならなかった。

珊瑚こそは、失われたふたりの月神の唯一の子供とも呼べる存在なのだ。

それを抱いて生まれてきた者——珊瑚の子供、あるいは使徒。

彼らは最も喪月神に近い存在であり、だからこそ喪月神の瘴気に近づくべきではないものだ

った。

あまりにも、彼らは近しいから。

たとえ使徒と選ばれようと、人間にすぎぬ身にとって、喪月神の瘴気の引力は強すぎるものだ。

ガネルオージェの頼みをきけるはずがなかったのだ――下手をすれば、カーラトーニは魂ごと喪月神の瘴気に取りこまれてしまうのだから。

もちろん、たやすくそんなことにならないように、破邪の『守り石』を用意しているのだろうが、それでもここの瘴気は強すぎる。

「カーラさま！　焼いちゃいますからっ！　そのひと連れて逃げて下さい……って、ナウルニールさまがまだいらっしゃるんだった！」

さて、どうしたものかと、首をかしげたアラクセイトに、黒珊瑚の使徒である美女は、軽やかに笑って請け合ってくれた。

「いいよ。あいつの居そうな場所なら見当がつく。どうせ盛大に青玉生み出してるんだろう？それなら捜すのは簡単だ」

この瘴気のなかにあって、感査の糸をのばすことは、相当負担のかかる作業であろうに、なんでもないことのように言ってくれる。

だから、アラクセイトも笑ってうなずいた。

「お願いします！」

はっきりと言い切った彼女の背中を押すように、カーラトーニが声をかけた。

「頑張りな。本当なら、こんな実戦修行ばっかりやらせたくはないんだけどね、こうなるとそうも言ってらんないからね。ただし間違っても、自分まで焦がすんじゃないよ！　近くの街の宿で、ソラミイノがぷりぷり怒りながら心配して待ってるんだからね」

脳裏にその様子がはっきりと思い浮かんで、アラクセイトは黄橙色の双眸をかすかに細めた。

「怖いなあ……」

（きっとミイノのことだから、わたしのせいじゃないとか言っても、聞いてくれないんだろうなあ。攫われるのは隙があるからだとかなんとか……きっと嵐のようにお小言言われるんだわ……）

けれど、それをイヤだとは思わない。

本人気づいているかどうかは不明だけれど、ソラミイノは多少なりとも気に入った相手にしか口やかましさを発揮しないのだ。

（わたしが叱られるのは、不出来だってことが一番の理由だろうけど……）

それでも、自分のことを本気で心配してくれているのはわかるから……叱られるのは、本当はイヤじゃない。

「頑張ります！」

朗らかにそう言い切って、アラクセイトは深く息を吸いこんだ。

遠ざかっていくカーラやセイたちの気配を感じる。もう大丈夫だと思った時点で、彼女は思いきり、力を解放した。

それは、とても不思議な感覚だった。

力が内側から溢れ出る。それでいながら、別のなにかが内側に収束していくような、奇妙な矛盾――。

相反する感覚に、内心首をかしげながら……それでも心地よさゆえに、彼女は意識をそれに委ねた。

瘴気が、燃える。

焼き尽くされていく。

炎は徐々に赤みを失っていく。

生身の人間が、無事ですむはずもない灼熱の炎が山窟内を浄化していく。

なのに、アラクセイトは不思議と熱さも息苦しさも感じなかった。

きらり、と視界の隅でなにかが輝いた。思わず目を向けた彼女は、ほんの一瞬目を瞠り、そうしてぽつりとつぶやいた。

「ミイノの言ってたことって……本当だったんだ……」

もちろん、彼女が嘘をついただなんて思わなかった。
けれど、そんなはずはないと、アラクセイトはずっとソラミイノの勘違いだと信じていたのだ……。
だが、そうではなかったらしい。
事実を目の当たりにしては、そうと認めるしかなかった。
木気――風を司る青。
水気を司る無色。
土気を司る黄色と茶色。
この炎のなかで、アラクセイトが無事でいられるために必要な、『気』を宿した色とりどりの金剛石が、彼女自身から生まれ、彼女を守っていた。
もしこの光景を目にする者がいたとしたら、感動にうち震えたに違いない。
だが、しかし――当事者である少女は、自らの発火能力を『お風呂屋さん』に活用できないかと真剣に考えるような性格の主だった。
だから、この神々しくも感動的な場面を前に、彼女が覚えた感想というのも……少しばかり世間からずれたものだった。
「燃えないように気をつけて、取っておかなくちゃ。金剛石って多分高価だから、越冬資金になるかもしれないし……」



この段に至っても、自らが使徒になる可能性をかけらも考えていないあたり……アラクセイトは確かにある意味では、大人物と言えるかもしれなかった。

エピローグ

さて、この大騒ぎの顚末は、やはり大騒ぎになった。

まず、脈が常時の倍ほどあった状態で、頑張った——頑張りすぎとも言える——アラクセイトは、案の定それから数日というもの、枕から頭を持ち上げることもできない状況に陥り、騒ぎの元凶となった少年——実年齢を聞いたところ、れっきとした青年だったことが明らかになったわけだが——ガネルオージェは無事に瘴気から解放された師匠に首根っこをひっつかまえられた恰好で、カーラトーニたちに平謝りする羽目になった……のだという。

アラクセイトが熱でうんうん唸っていたころのことだから、彼女はその場を目にしたわけではないのだが、後にソラミイノから「怒り心頭だったあたしでさえ、少しだけ、気の毒に思ったぐらいよ」と聞かされたものだから、よっぽど怒られたんだろうなあ、と思い、彼女もなんだか可哀相な気がしてきた。

もっとも、このことをぽろりと口にしたとたん、ソラミイノが鬼のような形相になって、とんでもないと再び怒り始めたので、それ以降、口には出さないことにした。

ソラミイノの言い分は「有無を言わさず攫われて、しかも肺炎になるような目にあわされて、さらにその上喪月神の瘴気の巣窟に連れこまれた人間が、ほいほい加害者に同情してどうするの!?」だった。

言われてみると、確かに相当ひどい目にあわされたなあとは思ったが、理由が理由だったから、心底憎めない……というか、嫌えない。

「んー、でも、わたしもなんとか無事にすんだし……」

もちろん、カーラトーニたちが巻きこまれて、取り返しのつかない事態にでもなっていたら、きっと自分だって絶対に彼を許せなかったに違いないとは思うのだけれど。

アラクセイトという少女は、ある意味究極の『喉もと過ぎれば熱さ忘れる』タイプの人間だった。

「アーク！　あなたねえ……っ！」

またぞろソラミイノの小言が始まりそうな気配に、咄嗟に彼女は話題を変えた。

「あ、それで、あの方たちは……？　もしかして、もう出立してしまわれたの……？」

見え見えの話題転換だったが、ソラミイノはそれ以上突っこむことはしなかった——まだ本調子でないアラクセイトのことを気づかってくれたのかもしれない。

「ええ、昨日、出立なさったわ。本当ならあなたが目覚めるまでは逗留なさるおつもりだったらしいけど、あのはた迷惑で未熟な男とあなたが近くにいたら、どんな大惨事になるか想像し

ただけで恐ろしいって話になってね。ええ、もちろん、璃央の街での火事騒ぎは知っているわ。大火事の大騒ぎよ。あなたのせいではないけれど、あなたとあの男を一緒にしてちゃいけないって、いやというほど思い知らされたわよ！」

璃央、とつぶやいて、アラクセイトはそれが例の騒ぎのあった街なのだと、初めて知った。なまじ空を飛んでの移動だったものだから、いまのいままで、あれがどこだったかも知らなかったのだ。

だが、知ったと同時に胸に押し寄せてきた不安というか恐怖は切実だった。

「ねえ、ミイノ!?　もしかして、賠償金とかの問題、出てくるのかな!?　人死には出なかったってあのひとに聞いて、それで安心してたんだけど……原因って結局わたしの能力だから、わたしに支払い義務とか生じちゃうわけかな？　折半とか無理かな!?　って、相談しようにも、もういないんじゃ相談しようがないしっ！」

どうしよう、どうしよう、どうしよう!?

極めて俗世的な問題に、頭を抱えこんだアラクセイトに、ものすごーく嘆かわしげな、悲しげな視線を向けた後、ソラミイノはぽつりと告げた。

「そっちに関しては大丈夫よ。弟子の不始末だからって、向こうが全額補償するってことで納まったし……それから、あたしの怒りの血管切れないうちに、渡しておくけど」

そう言って、ソラミイノはアラクセイトの掛け布団の上に、バラバラとんでもない代物を

ぶちまけてくれた。

それは矢車菊色の青玉と、鳩の血色の紅玉――どれをとっても小指の先ほどはある大粒のものばかり。

「お詫びとお礼とお見舞い……ですって。あの迷惑男の師匠だっていうふたりの使徒さまから。あと、伝言で、ナウルニールさまから、今度はもう少し穏便な状況で会いましょう……ですって」

なにか、感想は――？

問われてアラクセイトは言葉に詰まった。

（えーっと、えーっと、えーっと……）

一所懸命考えたあげく、彼女が捻り出した言葉といえば。

「これってば、青玉と紅玉、なんだよねえ……？　でも、わたしよく宝石の価値とかわからないからミイノに教えて欲しいんだけど……ねえ？　これ何粒ぐらいで、一冬越せる……？」

ソラミイノの怒号が響きわたったのは、実にこの直後のことだった。

「あんたってひとは、もう少し、感覚どうにかできないのーっっ!?」

一方、今回の主役の片割れであるガネルオージェは、げしげしに痛めつけられていた――言葉という力によって。

「呆れて言葉もありません」

とは、師匠の片割れ――ナウルニールの言葉だ。

ガネルオージェは……うなだれたままだった。

「知ってましたね、あなたは。わたしに破邪と浄化の力があることを……だからこそあの場面で、その力のないあなたたちを庇ったことを。そして、なんのためにわたしがそうしたのかも……なのに、あなたはたかだか数年間、自制することさえ耐えられなかった」

容赦のない糾弾に、ガネルオージェは言葉を失う。

言い訳するより先に、ナウルニールは彼の狡さを暴く。

どうしようも……どう言い訳のしようも、なかった。

「破門します」

決定的な一言を、青年は口にした。

「どこなと好きなところへ行きなさい」

それが、ガネルオージェがかけられた、師匠からの最後の言葉だった――。

夢紡ぐ聖女



プロローグ

「ガネル……ガネル、どこにいるの……？」

季節は春――麗春花の花咲く庭で、夢に囚われ、夢を捕らえた女性がただひとつの名を口にする。

風が、吹く。

儚い風情の麗春花の花びらが、イイタールの指先に攫われ、空に舞い散る。

それでも花園に、淋しい気配は訪れない。

いくら散ろうとも、それに劣らぬだけの花々が、そこを埋め尽くしているのだから。

「ガネル……ガネル……」

薄衣を纏い、長い髪を結いもせずに流したままの女性はひたすらにその名を呼ぶ。

それは彼女の恋人の名前であり、同時に息子のそれでもあった。

「ガネル……？」

「おれならここにいるよ」

呼んでも返事がないことに、段々不安な様子を示しはじめていた女性の肩を、背後からぽんとたたいて答えたのは、年の頃にして十二、三ほどの少年だった。

女性と少年に似たところはない。女性は金褐色の髪と菫色の瞳であるのに対し、少年の髪は黒く、瞳は灰銀色――しかも、顔だちに似通った部分はいっさい見つからないのだから。

「ガネル」

その女性がふわりと微笑む。

その笑顔は、恋人に向けるものに似ていたが、そうと断じるにはいささか両者の年齢は離れすぎていた。

少年が十二、三にしか見えぬのに対して、彼女はすでに二十代の半ばには達している様子なのだから。

年の離れた姉弟というには、前述した通り、あまりに似ていない。かと言って、母と息子と言うには、今度は年が近すぎる。

なんとも奇妙に見えるふたりなのだが、当人たちはそのことになんの疑問も不都合も感じてはいないらしい。

「ガネル」

もう一度少年の名を呼んで、その女性は彼の腕に自らのそれをからめた。

「見つけたわ、ほら、もう逃がさない……隠れてどこに行っていたの？　旦那様が留守だから

と言って、羽目を外しすぎるのは感心できることではありませんよ」

すっかり母親の顔になってそう言う女性に、ガネルはすまなそうに頭を下げた。

「ごめん。ちょっと街で買いたいものがあって……」

そう言うガネルに、彼女は拗ねたように口を尖らせた。

「欲しいもの、だなんて……そんなもの、出入りのマスカンにでも取り寄せさせればいいだけのことでしょうに」

マスカンとは、彼女の生まれ育った屋敷に出入りを許されていた商人だった。

彼女はここが、生まれ育った屋敷だと信じて疑わないのだ。

けれど、この屋敷にマスカンが訪れることはない——ここは彼女……アリオーニの故郷からは遠く離れた場所なのだから。

だが、少年はその事実を指摘することはせず、曖昧に笑いながらこう答えた。

「そういうわけにはいかないよ。だってマスカンを通したら、おれがなにを頼んだか、アリオーニに筒抜けになってしまうじゃないか」

筒抜けになってしまう——その言葉に、アリオーニの菫色の瞳が翳った。

「わたしに、隠し事を、するの……？」

突然子供のように不安と悲しさを瞳にたたえて問いかけてきた女性に、ガネルは安心させるように微笑んでこう答えた。

「おれがアリオーニを悲しませるような隠し事をするはずがないだろう？　忘れたの？　今日はアリオーニの誕生日じゃないか。せっかくアリオーニをびっくりさせるような贈り物を考えたのに、マスカンに頼んでそれがなにか筒抜けになってしまったら、全部台無しになっちまうじゃないか」

その一言で、アリオーニの瞳から翳りは消えた。

代わりにその菫色の双眸に浮かんだのは期待する光だ。

それでも、これだけは言っておかねば——とでも言うように、金褐色の長い髪の女性は、ガネルにこう告げた。

「そんな言葉づかいは感心できないと、何度も言っているでしょう、ガネル？　あなたは旦那様の跡取りで、この家を継がねばならないのですから、そんな下々の言葉を使ってはいけないわ」

心からの諫める口調に、ガネルは素直に「ごめん」と答えた。

それを聞いて気がすんだのか、アリオーニは再びにっこり微笑んだ。

「わかってくれたのならいいのよ。あら、わたしったらこんな薄着で……どうしましょう？　アーニャやキリスがめくじらを立てて怒りそうだわ……彼女たちは、いつも厳しいのですもの……」

しょんぼりとした風情で、アリオーニは縋るような目をガネルに向けてきた。

アーニャもキリスも、本当はここにはいない。けれどアリオーニが『いる』と信じている以上、この空間に彼女たちは『いる』のだ。

「大丈夫だよ」

安心させるように囁いて、ガネルはアリオーニを促すように屋敷へ戻る。

途方もない絶望感を胸に抱きながら。

「彼女たちにはちゃんとおれから説明するから……アリオーニがおれのことを心配して、捜しに出ただけなんだって、ちゃんと説明するから……誰もアリオーニを叱ったりなんかしないから……ね？」

「そう……？　本当にそう説明してくれる？　だったら安心できるのだけれど……だけど、本当にアーニャもキリスも怖いのよ？　わたしが物心つかない子供のように扱うの……わたし、わたし、そんな子供ではないのに……」

不満げに……それでいて心配げに訴えてくるアリオーニに、ガネルは「もちろん、わかってるさ」と応じた。

「でも、アリオーニ、わかってあげなきゃ。あのひとたちは、アリオーニのことが心配で心配で仕方ないんだから……ね？」

だから、神経質にもなってしまうんだよ。

ガネルの言葉に、すぐにはうなずけぬ様子を見せた女性は、けれど仕方ないように、不承不

承の体でようやくうなずいた。
「わたし……いつまでも子供ではないのに……」
「仕方ないよ」
と、ガネルは答えた。
「だって、ほら。子供のころからアリオーニのことを見てきたひとたちなんだから……きっと心配でたまらないんだよ」
「そう……かしら？」
「そうだよ」
力強く言い切られて、アリオーニは心細げに「そうなのかしら？」とつぶやいた。
「きっと、そういうことなんだよ」
ガネルが断定すると、どこか安心したように「そうかもしれない」と彼女は洩らした。
そうして、彼女は屋敷に戻った。
ガネルの姿など眼中にもないように――。
麗春花の花園に、ひとり取り残された恰好になった少年は、力まかせにこぶしをふるった。
赤や白、薄紅、青い花びらが、風ではなく少年のこぶしの一振りでもって宙に舞い散った。
「ちくしょう……」
聞けばアリオーニが注意するに違いない言葉を口にして、少年はその場に立ち尽くす。

「ちくしょう……！」

きりきりと唇を噛みしめて、少年は麗春花の花園を睨みつけた――。

バルヴァローズには七つの大陸があり、美陶はそのひとつである。
びとう、と読む。
七大陸中、最も山岳地の多いこの大陸は、農耕に適した土地が極端に少ない土地と言えた。
バルヴァローズ最北にして極寒の地として知られる豊珠ほどではないにしても。
ただ、美陶にとって幸いなことは、この大陸の山岳地には、農耕には適さずとも、別の意味で貴重な価値を持つものが眠っていたということだろう。
陶器や磁器を作る上で最も重要視される陶土や陶石――それの最上とも言える水準のものが、この地には眠っていたのだ。
絵の具や釉薬の原料となるものも揃っていたのは偶然か、必然か――。
美陶は名陶の産地として知られている。
さて、美陶でも一、二を争う大国として知られる灰豊の抱える最大の港街――緒有に、奇妙な二人連れが現れたのは、初春のことだった。

美陶はどの国においても、入国に際して厳しい審査をすることで知られている。陶土、陶石の産出地はもちろん、他大陸の技術者では、決して再現しえぬとまで言われる絵の具の配合、それをあざやかに表現させる釉薬の原料――陶器、陶磁器に関するすべては、美陶の最高の機密であり、それが他大陸に流出する危険を防ぐために、美陶の審査は七大陸中でも一、二を争う厳しさだという評判である。

とりあえず、街中に出ることを許された以上、そのふたりが他大陸から送りこまれた、美陶の技術や秘密を探るための密偵ということはないのだろうが……それでも、そのふたりが目立っていたことに違いはない。

樹翁という大陸では、体の線が出るほどに、布を惜しんだ衣服を身につけることは下品で不作法なこととされている。

だが、美陶では違う。

陶器や陶磁器を作ることを第一に考える者たちにとって、最も必要なことは、身軽にしかも炎の被害を受けずに動き回れること、なのだ。

大陸の位置が北寄りということもあるだろうが、皆、厚手の布地の、しかし動きやすい――言い換えれば布地の少ない――服を身に纏っている。

そんななかで、すっぽりと全身を覆う衣装を身につけて上陸してきたそのふたりは、かなり奇異な視線を向けられた。

じろじろ、じろじろ——向けられる視線に、二人連れのうちの片割れが、ぼそりとつぶやいた。

「なにやら……ずいぶん目立ってしまっているようですね……？」

ぱさりと頭巾を払いのけて、連れに話しかけたのは——年の頃は二十歳になるかならずの……背の半ばまで届く純白の髪の青年だった。

ほっそりとしたその体つきだが、痩せているという印象はない。

頭巾を払ったおかげで明らかになった肌の色はやわらかな乳白色、瞳の色は極上の紅玉を思わせる真紅である。

柔和な顔だちと表情、そしてその色彩から、彼を見たたいていの人間は雪ウサギを連想する——内面がその通りだとは限らないにも拘わらずだ。

「仕方ないだろう」

そんな青年に苦笑まじりに答えたのは、彼の連れである男性だった。

深みのある低い声から、彼が連れの青年より年長であることがわかる。

しかし、こちらは頭巾を被ったままだ。だからすべてが見えたわけではなかったが、頭巾から一房こぼれた髪は光沢のない琥珀で、連れを見下ろす瞳は矢車菊を思わせる深い青、ちらりと覗いた肌は日に焼けたものではない褐色だった。

けっこうな長身だが、こちらも屈強そうな体格とは呼べない。かと言って、ひょろ長い印象

も与えない。均整のとれたそれと言えるだろう。

青年の乳白色の肌——あるいは、連れの男性の琥珀の髪と褐色の肌。

それだけであったなら、あるいは他者の不審を買うこともなかったかもしれないが……いま、このときの美陶において、彼らふたりは明らかに異質なる者、だった。

美陶にあっては、紅玉の赤を纏って生まれてくる子供も、青玉の青を纏って生まれてくる子供もいないのだから。

美陶では、作られる陶器、陶磁器——さらにはそれに用いられる絵の具や釉薬の呈する色彩を持つ子供しか生まれない。『宝石のような』という形容は、美陶には存在しないのだ。

「やれやれ」

ぼやくようにつぶやいたのは、頭巾を被ったままの男だった。

「早いとこ宿でも見繕って、せめて恰好だけでもここ風にせんことには居心地が悪くて仕方ないな。目立つのはいつものことだが、警戒心ばりばりの視線ばかり投げつけられるのも面白くない」

「同感ですね」

と、答えたのは雪ウサギのような青年——ナウルニールだった。

しかし彼は、すぐに「けれど……」とつづけた。

「我々の場合、恰好だけを変えてもあまり効果はないのでしょうね……」

仕方ないとでも言いたげなナウルニールの言葉に、あっさりと連れの男性――トリノアークが応じる。

「ああ、そうだろうな」

たいしたことではないとでも言いたげな連れの言葉に、青年はため息を洩らす。

「あなたが……我が道しか行かないひとだということは、重々承知してますが、トリノアーク。美陶での協力者まで挑発するのはやめてくださいね」

その青年の言葉に、どうやらむっとしたらしいトリノアークが振り向いた。

「人聞きの悪いことを……おれは一度だって、自分から喧嘩を売ったことはないぞ？」

「ええ、存じてますとも」

軽く肩をすくめながら、雪ウサギのような青年は呆れた様子を隠しもせずにこう答えた。

「あなたは一度だって、直接喧嘩を売るような真似はなさいませんでしたとも。必ず、相手から売ってくるように仕掛けてきただけですとも。ええ、わたしはそのことは、ようくわかっておりますよ」

揶揄もあらわな連れの言葉に、反論しかけたトリノアークは、なにかに気づいたのか、押し黙った。

「あー、その、つまり……だ？　そいつの機嫌を損ねた場合、仕事に支障が出かねないほど、今回の一件はやばい……って、ことなのか……？」

恐る恐るといった体で、尋ねてきた男に、ナウルニールはつんとすまして答えた。
「知りませんよ。生憎、あなた同様わたしにも、そういった気配やなにやらを詳細に分析できるような能力はありませんからね。サギスリーニは稀有な女性でしたのに……」
サギスリーニとは、ほんのこの間まで、ともに組んでいた女性だった。
感応力にも洞察力にも長けた、ふたりにとって最高の仲間だった女性は、先日結婚を理由に故郷である美香――樹翁南部に位置する、香木の産地として名高い国である――に戻ってしまった。
その遠因が、トリノアークへの失恋にあったことを思えば、ナウルニールの口調に皮肉が混ざるのも無理からぬことと言えよう。
「ああ？　仕方ないだろうが……そりゃあ。おれだってサギィは好きだったさ。だけど、あいつを最優先なんてできなかったんだからな。ちゃんと愛してたし、女のなかじゃ最優先してたんだぜ？　結婚だって、あいつとなら悪くないって思ってたさ……だけど、同僚のお前にまで焼き餅やかれると……なあ」
つきあってられんだろうがよ。
あっさりとそう言い切るトリノアークに、ナウルニールはふううっ、とため息をついてこう洩らした。
「そんな誤解を与えるようなあなたの言動が問題だとは思わなかったのですか？」

「ああ？　なにかまずいこと、おれが言ったか？」

どうやら本当に自覚がないらしいトリノアークの言葉に、ナウルニールはがっくりと肩を落とした。

「……別に、いいですが、もう……。ただし、くれぐれも……そうですね、わたしの顔を褒めたり素直な感想を口にするのは慎んでいただきたいものです」

「なんでだ？」

自覚皆無な相棒の、心底不思議そうな問いに、それ以上ナウルニールは説明しようとはしなかった。

「いいから、約束してください」

あまりに強い口調のせいか、トリノアークはしぶしぶながらうなずいた。

彼は……男色の気などかけらもないくせに、相棒の顔が大好きだと公言してはばからない、ある意味困った男なのである……。

2

バルヴァローズには、聖石の子供と呼ばれる存在がいる。

文字通り、石をその身に抱いて生まれ落ちてきた子供たちだ。抱いてきたとはいっても、その掌に石を握りしめて生まれてきたというわけではない。

選ばれた子供たちは、その肉体の一部に人体にとっては異物としか呼びようのない石を、埋めこんだような形で生まれてくるのだ。

その石も、多種多様である。

ただの石くれとしか見なされないものを抱いて生まれてくる子供もいれば、半貴石や貴石、宝石と呼ばれるものをその身に抱いて生まれてくる者もいる。

稀少な石を抱いて生まれてきたから貴いと、一言で断じるわけにはいくまいが、貴石を抱いて生まれてきた子供ほど、神々からより多くの加護と力を与えられているというのは通説となっている。なぜとなれば、あまたいる『聖石の子供』のなかから、神々に選ばれた存在――聖石の使徒の持つ聖石は、そのほとんどが半貴石以上の価値を持つものばかりだったからであ

る。

聖石の使徒とは、神々の加護と力を与えられた者の名称であると同時に、バルヴァローズに多大なる責任を負う者たちである。与えられた加護と力は、あくまで世界を守るために貸与されたに過ぎないのだから。

ふたりの月神が放った瘴気を浄化するために眠りつづける瘴の女神――彼女の眠りを妨げぬために。その眠りを守るために。

瘴の女神は瘴気に反応する。

だが、瘴の女神はまだ月神の放った瘴気を浄化しきれてはいない。

彼女の目覚めは、いまだ浄化しきれずにいる月神の瘴気を世界に解き放つことを意味する。

創世神たる女神の子供神ふたりの生み出した瘴気だ。

そんなものが解放されれば、若く未成熟なこの世界はたやすく壊れてしまう。

だから、聖石の使徒たちは、身を粉にしても働きつづけるのだ……人間の生み出した瘴気が大きく育ち、眠る瘴の女神に刺激を与えぬように。

時に、その元凶となる同胞を切り捨ててでも、彼らは瘴の女神の眠りを守る。

すべての使徒がそうとは限らない。

だが、確かに戦うために選ばれた……聖石の使徒はいる。

そして、今回美陶を訪れたふたり連れ――紅玉と青玉の使徒であるトリノアークとナウルニ

ールは、まさしくそういった存在だったのだ……。

ひとまず落ちついた宿の一室で、ナウルニールは懐から問題のモノを取り出し、ため息をついた。

それは、本来は無色透明なはずの……だが、無残にも白濁した石だった。

これが、今回彼らが美陶を訪れた理由である。

「なんだ、また見てるのか」

よく飽きないな——と、ずいぶん呑気な声をかけてきたのはトリノアークで、そんな彼の様子に、ナウルニールはまたため息をついた。

「どういう反応だ？」

「これが全然気にならないという、あなたの神経に呆れただけですよ……これが届けられたせいで、神殿でどれほどの騒ぎが持ち上がったか、あなただってご存じのはずですのに……」

聖石の使徒は、神殿に籍を置く存在であり、ごく一部の例外を除けば、生まれ故郷の地神神殿に住んでいるものだ。

ごく一部の例外である彼らが、珍しくそこに居合わせたのは、あまりにも人使いの荒い神殿

のやりように腹を立て、直談判のために乗りこんでいたせいである。

聖石の使徒とはいえ、あくまで彼らは人間である。

いかに稀有にして強大な力を与えられているとはいっても、休みもなく馬車馬のように働かされたのではたまらない。いくらそれなり以上の報酬を約束されても、使う暇もないのでは堪忍袋の緒も切れるというものだ。

三年以上、まとまった休みを一度ももらえないのはあまりにひどいということで、美香の本神殿の上層部に直談判するために乗りこんで行ったそのときに、よりにもよってこの白濁した石が届けられたのだ。

その際の騒ぎの大きさといったら、かなりの修羅場にも慣れきってしまったナウルニールにしても、唖然としてしまうほどのものだった。

まず、神殿に籍を置く者のなかでも感受性の強いとされる者たちはほとんど全滅してしまった。別に死んだわけではないが、ひどい恐慌状態に陥り、つぎつぎに意識を失ったのである。命に別状はなかったが、気がついたあとも、精神的な不安やわけのわからぬ恐怖に捕らわれた者がほとんどというありさまで、あのままでは神殿としての機能に支障を来すまでにそう時間はかからなかったに違いない。

ところが、そんななかで、トリノアークとナウルニールがけろりとしていたのが災いした……いや、神殿にとっては幸いだったのだろうが。

神殿の上層部は、よりにもよって休暇をもぎ取るために乗りこんできた彼らふたりに、元凶となった白濁した石を――半ば強引に――押しつけ、しかも、問題解決のために美陶へ向かえと、拒否権なしの命令を下してくれたのだ。

『まったく、冗談じゃない』

とは、トリノアークの発言で、ナウルニールも内心大いに同感だったが、相棒ほどには利己的になれなかった彼は、仕方なく石を預かった。

その石が瘴気に毒されているのは、神官や同僚たちの様子を見ていればわかったし、相棒に保管を委ねた場合、「そんなもん、土に埋めときゃいいんだ」の一言で、本当にどこかに埋めてそれでお終いにしかねない、相手の性格を見抜いていたためだ。

これ以上、こき使われるのは御免だと主張するトリノアークを、なんとか説得したのもナウルニールだった。

この一件が終われば、必ず長期の休みを保証するという、神官長からの念書を抜け目なくもらっておいたこともあって――神官長に言わせれば、脅迫されて書かされたということになるかもしれないが――なんとか説得には成功した。

さて、そういう事情で美陶を訪れることとなったふたりだが、実のところナウルニールは非常に気にかかる事実を抱えこんでいた。

白濁したその石の正体について、だ。

よりにもよってそれは、ただの石ではなく『聖石の子供石』と呼ばれる、聖石の子供や使徒が、能力を発揮するさいに産み落とす、特別な力に溢れたものだったからだ。

聖石の子供石は、通常の、地中から掘り出された石と外見はほとんど変わらないが、まったく違う力と硬度を誇る。自然に産出された石と、聖石もしくはその子供石であれば、同じ種類のものであっても、明らかに硬度が高いのだ。

たとえば地上で最も硬いとされている金剛石であっても、それが自然物であった場合、黄玉の聖石、あるいはその子供石ででも瑕をつけることができる。柔らかいことで知られる真珠すら、聖石の使徒や子供が生み出したものであれば、まずめったなことでは傷つかないのだ。

だからこそ、聖石やその子供石の判定には、やはり同じ……聖石の子供石が使われる。自然に掘り起こされた石では、判断材料にならないのだ。

そして、凄まじいばかりの瘴気を吸いこみ、白濁してしまったその石は……少なくとも水晶より……いや、水晶よりさらに硬度の高い黄玉よりも硬いことがわかっていた。

黄玉より硬い石は限られる。

幾種か挙げることはできるが、一番知られているのは鋼玉石――つまりは、色彩の違いはあるが同じ硬度を誇る紅玉や青玉……さらにはそれらの変種である。

これより硬い石は一種しか存在せず、しかもそれを抱いて生まれてきた子供など、バルヴァローズの歴史において、皆無とされていた。

だから、ナウルニールも一所懸命、そうではない可能性を見いだそうと頑張ったのである。

黄玉のなかにも無色のものはある……まあ、これは黄玉でも瑕ひとつつかなかったと聞いた時点で破棄された可能性ではあったのだけれど。

せめてこうであってほしいという可能性……いや、希望は、鋼玉石にも、透明なものがある——というものだった。

心からのナウルニールの願い……いや、祈りは……しかし。

「トリノアーク……」

いつもの穏やかさに欠けたナウルニールの声に、なにかを感じ取ったのか、五つ年上の青年が「うん？」と振り向いた。

「怖いこと、言っていいですか？」

とたんに、トリノアークは渋面になった。

相棒の人柄や性格をよく知る彼は、ナウルニールがそう言った場合、本当に『怖いこと』しか口にしないことを熟知している。

案の定、逃げ腰になった。

「聞きたくは……ないなぁ……」

矢車菊色の瞳に「だめ？　逃げたらだめ？」とでも言いたげな光をたたえてそう応じてきた相棒に、にっこり笑ってナウルニールは鳩の血色の瞳で「だめ」と応じた。

さらには、そのままこちらの言葉を聞く前に、相手が逃亡しないよう、あっさりきっぱり厳しすぎる事実なるものを口にしてしまう。

「この石、本当に硬いんです。わたしの子供石でも、瑕ひとつつけられませんでした」

彼の抱いて生まれてきた石は鋼玉石――それ以上に硬い石は……この世にはひとつしか、ない。

さしもの楽天主義者も、この台詞には顔色を失った。

「……本気、かよ……？」

呆然としてそうつぶやいた後、トリノアークは大仰ではなく――ひとを煙に巻くことを趣味にしているとしか思えない彼の性格からすれば、ずいぶんと意外なことに――天を仰ぎ、呻くように洩らした。

「金剛石抱いて生まれてきた子供だぁ……!?　んなの、聞いたこともねえぞっ!?」

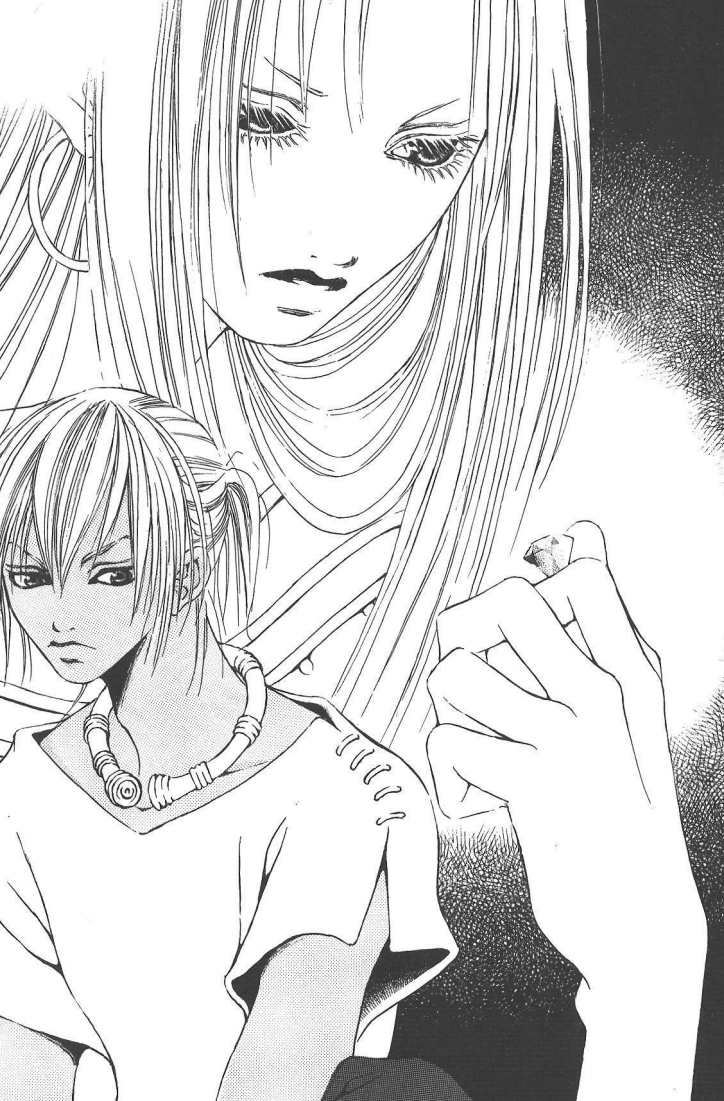
「わたしもありませんよ」

答えながら、ふうぅ、と息をつきながらナウルニールは瞼を伏せた。

これがいかに重大な事態であるのか、ようやっと相棒にも認識してもらえたと思ってのことだったが……この判断は、少々早計だった――らしい。

次の瞬間、相棒が、よりにもよってとんでもないことを叫んでくれたせいである。

「神殿のやつらっ！　手抜きしやがったなぁぁっ！　おれより強いかもしれない奴ら、全員教



えるとか言いやがったくせにっ！」

許せんっ！

と、ひとり怒り狂う相棒を前にして、ナウルニールは「頭痛が痛い……」と文法上おかしな言葉をつぶやいた。

「いまさら、あまり変わりないことでしょうに……」

「いいや、全然違う！」

こぶしを握りしめて、トリノアークは主張してきた。

「お前と戦えなくて、だから勝負がつかないのは仕方ない！　おれはお前の顔が大好きで、だからお前の苦しむ顔なんて見たくないんだからな！　だがな、お前じゃないやつのことで、強そうなやつがいるんなら、それは当然教えてもらわないことには……っ！」

意気ごんで主張する相棒の頭に、ナウルニールは容赦のないこぶしを見舞った。

「わたしがなぜ、あなたのような性格に問題のあるひとと、長年組んでると思います？　あなたのその暴走癖をどうにかしなければという義務感に駆られた以上の意味があるとでも思ってらっしゃるんですか？　確かにあなたはある意味可愛い性格の方ですし、頭に血さえ上らなければ、冷静な判断もできる方だとは知っていますが……ね」

ぎろりとねめつけるナウルニールの真紅の瞳には、この上ない冷ややかな光がたたえられていた。

「この期に及んで……それ、ですか？」
冷ややかな、冷ややかな……ひややかーなナウルニールの言葉に、トリノアークはひっ、と首をすくめた。
「悪い！　悪かったっ！　反省するっ！　反省するから……っ！」
必死な思いも露なトリノアークの言葉に、ナウルニールがにっこり笑った。
「わかっていただけて、嬉しいですよ」
その満面の笑顔を前に、「ペテン師」だの「詐欺師」だの「大嘘つき」だのと、トリノアークが毒づいたかどうかはわからない。
ただひとつ確実な事実は、相棒の顔の造作が大変に気に入っていて、それもあって相手に強く出られぬ弱みを持ってしまった男が約束したこと、だった。
「お前の許しがなきゃ、絶対、絶対、そいつに喧嘩なんか売らない！　約束するっ！　……それで、いいんだろう？」
恨みがましげにナウルニールを見つめながらそう問いかけてきた相棒に、純白の髪の青年はにこにこにっこり笑いながら「はい、よくできました」と答えた。
ずいぶんとふざけたやり取りだった。

3

そもそもの始まりは、ある日突然現れる、不思議の地の存在に、神殿が気づいたことだった。

いや、正確に言えば、偶然街で奇妙な噂を耳にした水晶の使徒が、好奇心をくすぐられ、そこに足を運んだことから事件は発覚した。

そこはまさしく、不毛の地としか呼びようのない土地だった。

大地そのものが疲弊しきっており、草はおろか、苔さえ生えぬ干からびた場所となっていたのだ。

尋常では考えられぬことだった。

津波などのせいで、海水にさらされた土地が、作物の実らぬ不毛の地と化すことは確かにある。だがそれはあくまで沿岸部における話である。

使徒が向かったそこは、内陸部にあった。到底、その説明は当てはまらない。

何者かが塩をまき、そこを不毛の地へと変えた可能性もなきにしもあらずではあったが、そ

んなことは可能性のひとつとして口にした使徒自身、信じてもいないことだった。
塩は、他大陸以上に、美陶にあっては貴重品だった。それを、たいした価値があるとも言えない土地に振りまくなど、浪費の極みだ。第一、土壌から塩分はいっさい検出されなかった。
奇妙なことだと、その使徒は神殿にその土地のことを報告した。
世の理から外れる事象には、常に危険がつきまとう。
それは歪みや偏りを生み出すことなのだから。そしてそれは、とても強い瘴気と似ている。
ふたりの月神の生み出した瘴気を浄化するために、眠りについた瘴の女神を刺激しかねないほどに。
いまだに月神たちの瘴気の多くは浄化されることなく女神の腕のなかにある。もしもこと半ばにして、女神が目覚めてしまったら、神々の生み出した瘴気が、毒が、バルヴァローズ中に飛散してしまう。
それの意味するところはひとつ――バルヴァローズの破滅である。
使徒の報告を受けて、神殿は調査を始めた。
そうして間もなく、美陶各国の神殿は衝撃的な事実に行き当たった。
同じような……というか、ほとんど同じ現象が、二年から三年おきに、国を違えたいくつもの場所で起こっていたことが判明したのだ。
いくつかの共通点が重なることで、恐らくは同一の事象であろうと神殿は認めざるをえなか

った。

ひとつは、問題の土地が二年か三年の間――もっと短期間のこともあったが――誰も足を踏み入れられなくなっていた、ということ。

ふたつめの共通点は、不思議な花びらだった。

不毛の大地になぜか、麗春花と思しき花びらが散ったばかりのような状態で残っていたのだ。この花びらは数日から半月もの間、干からびることなく存在していたが、あるとき突然に消えてしまう性質を持っていた。

そこに存在していたことが幻でもあったかのように、塵ひとつ残さず、消失してしまうのだ。

そして、みっつめの共通点――。

それはその付近の街には、必ず一時期――そう、問題の土地に誰も入れない状況にあったころと一致する時期、姿を消していた人物が数人いたということだ。

彼らのほとんどは、身寄りのない独り暮らしか、あるいは家族ごと姿を消したのだという。

不毛の地が姿を現すころに、彼らはふたたび元の場所に戻っていたらしい――しかも、当分の間生活に困らぬだけの金子を懐にしてだ。

不審なのは、彼らが皆、消えている間のことを覚えていないことだった。

どこかのお屋敷で働いていたような気がする。

とてもやさしいご主人に、よくしていただいていたような気がする。
夢のように美しい場所で、暮らしていたような気がする。
消えていた者たちは、皆が皆、そう口にしたという。
なにかを隠すために、忘れたふりをしているのではないか――との意見も上がり、精神方面に明るい人間が当たってもみたのだが、結果は全員白。彼らは本当に、目覚めれば忘れてしまう夢程度のことしか覚えてはいなかったのだ。
美陶における各神殿は、だがこのころまでは、他大陸にまで協力を要請するつもりはなかった。世界の破滅の危機を前にして、意地や縄張り意識などなんの意味もありはしない――それどころか、有害ですらある。
だから、美陶の神殿関係者たちは、このころは、真実、美陶にある人材でもって、ことを収める自信を持っていたのだ、と言える。
ところが、三年前、問題の土地から、とんでもないモノが発見されてしまった。
調査に赴いた水晶の使徒が、地中から不快にして無視出来かねる気配を感じ取り、そこを掘り起こしたと同時に昏倒し、生死の境を彷徨う状況に陥った――その元凶が。
白濁し、瘴気に毒されてしまった、本来透明であったはずの聖石の子供石――が。
美陶は、陶器や陶磁器で知られる大陸だった。
そのせいだと、一概に決めつけるわけにはいかないだろうが、この大陸では、比較的硬度が

低いとされる石……聖石を抱いて生まれてくる子供が多かった。
つまり、水晶の使徒の持つ聖石が、当時の最も硬い鉱物であったのだ。
ところが、発見された聖石の子供石は、水晶では瑕ひとつつかぬほど、硬質なものだった。
調べねばならないと、美陶における各神殿は判断した。
水晶より硬い石の数は限られる——ならば、一刻も早くその正体を見極めるべきだ——と。
最初に使者を差し向けた先は、美陶から最も近い大陸——緋芭だった。
船による片道三月、往復半年、あるいはもう少しかかるかもしれない、それ以上に危険が山積している旅程をものともせずに、出向くことを申し出た勇敢なる使者たちは、約一年後、件の石の正体すら摑めぬままに帰郷した。
その間にも、例の不毛の地は出現を繰り返していた——期間を徐々に狭めながら。
ここに来て、美陶の神殿の各責任者たちは、覚悟を決めた。
残る五大陸の神殿全てに向けて——まあ、証拠となる白濁した石が、そのころには山ほど集まっていたこともあって——協力者且つ解決者捜しの使者を送りだしたというわけである。
嵐やらなにやらで、樹翁に向けての船が予定より三月後に樹翁にたどりつき、しかも船員含めて不慮の事故ゆえに衰弱し、結果的に予定より半年ほどもずれたころ、ようやく、問題の石は樹翁大陸の美香の地神神殿に持ちこまれ——これまたいかなる偶然か、そこに、あまりの人使いの荒さに堪えかねた鋼玉石の使徒ふたりが居合わせた——。

そのことを、どう呼ぶべきだろう？
大変な幸運だと呼ぶべきだろうか？
それとも、その事実こそが宿命であったのだ、と――？
いずれにせよ、現実はひとつだった。

「きゃああっっ！」
美陶の最寄りの神殿から派遣されてきた女性――杉石の使徒で、ファタラーニと名乗った――は、問題の白濁した石を目にするなり、悲鳴を上げて意識を失った。
それでもずいぶんと強靭な精神の持ち主だったらしく、意識を取り戻すなり、彼女は蒼白なままトリノアークとナウルニールをそばに呼びつけた。
まるで、生きたお守りでもあるかのように。
「わかりますわ……彼は、確かにこの美陶におりますわ……」
告げて彼女は、ぶるりと身を震わせた。
「けれど、彼は自らの過ちを知りません……浄化を施さず、瘴気に染めたままの石を放り出す、そのことが、いかに罪深いことか……彼は知らないのですわ……」

それは――と言いかけて、ナウルニールは言葉を呑みこんだ。

とても、恐ろしいことだった。

仮にも金剛石を抱いて生まれてきた子供が、一般の『聖石の子供』と等しい教育を与えられないない。

聖石の子供としての認識、もしくは常識を、彼は植えつけられることがない。

それは無防備なまま、この世で最高の聖石が瘴気にさらされ、染められるということだ。

現に、送られてきた金剛石は、白濁するほどに瘴気に毒されている。

金剛石には自浄作用がある。ある程度の瘴気であれば、自らの力で清めてしまうのだ。力を使い果たした石が、割れたり白濁したまま元に戻らぬことはあるが、金剛石の……しかも聖石の子供石でそんなことが起こるなど、ほとんどあり得ない事態なのだ――実際、青玉でも、濁ったり割れたりといった話は聞いたことがない。

(それが、ここまで濁ってしまっているとは……それほどの瘴気のなかに、その子供がいるということなのか、それとも……)

単に浄化する方法を知らないだけ、なのか――。

「ファタラーニ、苦しいだろうが、もっと詳しくこの石を念査していただけませんか？　そういう事情であれば、一刻も早くその子供を保護し、正規の教育を施さねばなりません……聖石の子供のなかにも、道を踏み外す者がいないではありませんが、その子供にだけは、そうさせ

るわけにはいかないのです……おわかりでしょうが」

「まあなあ……おれだって、金剛石の子供を処分するのは苦労しそうだしなあ……」

などと言いながらも、なぜか瞳をきらきらさせているトリノアークの後頭部に、ナウルニールは無言でこぶしを見舞う。

口とは裏腹に、やる気満々なのがあからさまだったのだ。

「いってぇなー」

暴力反対などとぼやきながら、抗議の目を向けてくる相棒を綺麗に無視して、ナウルニールはファタラーニを凝視した。

杉石には強い浄化の力とともに、心身を活性化し、洞察力を高める力がある。そのため、杉石に選ばれた者は、鋭い感性と深い洞察力を備えた者が多い。

そのなかでも使徒に選ばれるほどの女性である――瘴気に満ちたこの金剛石に触れることは、尋常ならざる苦痛を意味することに違いない……そうとわかっていても、ナウルニールは頼むしかなかった。

自分でできることであれば、ひとに任せたりはしない。殊に多大なる負担をかけるとわかっているようなことなら尚更だ。

だが、不幸にもナウルニールには――相棒であるトリノアークもだが――そういった感性がほとんど……いや、皆無と言っていいほどに、ない。いかに神々の加護を受ける身であろう

と、人間という器には、許容できる力の分量というものが決まっているのかもしれない。戦闘において、人間離れした力を見せる彼らふたりには、その代わり、感応力のたぐいはいっさい……と言っていいほどにない。

もっとも、以前知り合いの、非常に柔らかい聖石の使徒である少女から、違う指摘を受けたこともあるのだが。

『聖石の硬さが、そのまま心……というか、精神にも反映してるんじゃないのか？　鋼玉石は硬いだろう？　まず同じ鋼玉石か、金剛石にしか傷つけられない……特に聖石となったら普通の石じゃ、絶対に傷つけられない。だから感じないんだよ、きっと。脅威を感じるほどの相手がいないんだから、感じる必要がない……というか、感じ取れないんじゃないのかな？』

つまりは鋼玉石なみの神経の持ち主だと言われているのだろうか——と、少々穿ったことを考えたことを覚えている……が。

（しかし今回は、金剛石が相手なのだし、いかに鋼玉石といえど、金剛石相手には傷つくのはわかっているんだが……）

それでもなんら影響を受けなかった事実は、どう受け取るべきであろうか。

少女の推測が完全に外れていたと見なすべきか、あるいは神経だけは鋼玉石どころか、金剛石なみの図太さを誇っていたと見なすべきか……。

どちらに転んでも、あまり楽しい結論にはなりなさそうだと早々に見切りをつけ、ナウルニ

ールはあっさりと思考を放棄した。

重大なことを他人に頼みながら、実は全然別のことを考えていたことなど微塵も感じさせない罪悪感たっぷりの顔で――彼の表情筋は、素晴らしく高性能と言えよう――ナウルニールはファタラーニに畳みかけた。

「お願いできますか？」

問い掛けの形をとりながら、実のところそれは確認のためのものでしかなかった。

たいした性格である。

本来、深い洞察力を持つはずのファタラーニだったが、受けた衝撃の大きさゆえか、そんな彼の演技には気づかないようだった。

幾分緊張した面持ちで、しかし彼女ははっきりとうなずいた。

「やりましょう……いえ、やらせてください。確かにナウルニールさまのおっしゃる通り、この子供をこのままにしておいていいはずがないのですから。金剛石を抱いて生まれてきた子供がいるなどという話は、確かに聞いたこともありません……けれど、目の前に現実があります。前例がないからと言って、目の前で起こっていることを否定することは無意味ですものね。それに……」

と、言いかけた彼女の瞳から、ふっと自我とも意識とも呼べる光が失せた。

感性の鋭い使徒がよく見せるトランス状態だった。

紫水晶のそれとは違う、濃厚な紫の瞳が空中に焦点を結び、その唇からはうわ言のような言葉が発せられる。

「……大切な、ひと……常春にこそ相応しい……だからふたりは常に移動しなければならなかった……彼女の幸福は、春にしかなかったから……だから……。麗春花の花びらが……風に舞って……彼女は幸福の夢を紡ぐ……夢を……恋人と、愛しい子供との美しい……美しい夢を……」

夢見るように、どこかうっとりと言葉を紡いでいたファタラーニの様子が徐々に変化しはじめる。

なにかに焦がれるかのように——あるいは焦燥するかのように。

「最初は……恋人……彼しかいなかった……？　けれど彼は突然にいなくなって……？　残されたのは……子供……？　彼によく似た……？　育つ……子供が育っていく……愛しい恋人のただひとりの子が……。子供なのに……期待……？　成長するごとに、恋人そっくりに育っていく子供に……これは錯覚？　子供は恋人ではないのに、恋人が育ってくれているような……？　もうすこし、もうすこしだけ待てば、子供は恋人とそっくりになる……違う、恋人が戻ってきてくれる……きゃあああっっ！」

突然悲鳴をあげ、ファタラーニは両手で頭を抱えて、床に膝をついた。

わずかに光沢のある鶯色の髪は、さんざんに乱れていた。無意識に指で、掻きむしったせ

いだった。

「ファタラーニ！」

これ以上の同調は危険だと、ナウルニールは判断した。

鋭い視線を相棒に向け、さっと手を差し出す。

トリノアークも心得たもので、「なにを」と問い返すでもなく、懐から小さな革の袋を取り出した。

神殿本部には内緒で——とかく悋気を出しがちな神殿は、申請した分の聖石の子供石を回してくれた試しがないのだから、これは立派な自衛手段のひとつではあるのだが——聖石の使徒同士が、本来は完全に神殿に提出するはずの子供石を提供しあうやり方は、実のところ、けっこう幅をきかせており、その関係上、彼らも常時、不安のない程度には、さまざまな効能を持つ子供石を携帯していたりする。

トリノアークが取り出した革袋に入っているのが、まさにそれだった。

「おれがやろう。なにが必要だ？」

聖石の子供石を用いて薬湯を作ることは聖石の使徒にしかできぬ技だった。

ナウルニールは一度だけファタラーニに目をやり素早くその状態を判断した。

迷うことなく、それをトリノアークに伝える。

「紅玉と青玉と砂金水晶を」

紅玉には心臓を強化する作用があり、青玉には邪を祓う力があり、さらに砂金水晶には精神面の均衡を保つ効果がある。

瘴気に触れ、しかも同調したせいで均衡を失したいまのファタラーニには不可欠なものばかりだった。

「わかった」

あっさりとそう答え、薬湯作りに入ろうとするトリノアークに、ナウルニールは一言クギを刺すことを忘れなかった。

「紅玉と青玉は、砂金水晶より小粒なものを選んでくださいね」

紅玉も青玉も、持つ力が強いだけに、反動を呼びかねない。

強すぎる薬は、いかに良薬であろうとも、ときに心身の弱った体には毒としかならないこともある。

現在の状況は、まさにそれだった。

（こんなところで、死なせるわけにはいかない……）

情ではなく理性で、そう考えていることが伝わったのだろう。

ぽつりとトリノアークが洩らした。

「こんなときでさえ、損得勘定でしか動けないおれたちって、地獄行き、確定だよな」

「同感ですが、急いでください」

鋭く言い切って、ナウルニールは内心息をついた。

事態はまだ全貌を明らかにしていない。

だからこそ、ファタラーニの存在は不可欠だった。

必要であるとか不要であるとか、そんな基準で簡単に、他者の生死を判断してしまう自分に対する苛立ちと、「それのどこが悪い」と傲慢に思い切ってしまいそうな強烈な誘惑の間で、ナウルニールもまた、揺れていた。

4

黴が、じわじわと侵食してくる。
常春の庭で、屋敷で、そんなものは見えない。
見えるはずがない。
すべてをガネルは封じてきた。
愛しい、唯一愛するひとの夢を守るために、ガネルは努力しつづけてきたのだ。
彼女の夢を守るために。
彼女の夢を壊さないために。
ただひとえに、そのためだけに——。
ガネルは努力しつづけてきたのだ。
（だけど、苦しい……）
いつのころから、そう思いはじめたのか——。
（危険だ、危険だ、危険だ……このままでは……）

いつごろから、本能はこんな警鐘を鳴らし始めたというのか。
わからない。
けれど、徽は確実に彼女と自分を包みこむ空間を侵しはじめた。
徽は、すべてを脅かす。
だから、封じてきた。
どうやって——と尋ねられても答えに困る。
ガネルはただ、知っていたのだ。
だから、知っているその方法で、徽を封じつづけてきたのだ。
だが最近、それがうまくいかない。
徽の繁殖は広まるばかりで、ちっとも減ってはくれないのだ。
「ちくしょう……まだ……！」
アリオーニの夢を壊さぬために、屋敷の四方に置いた結界のための石が、白濁してしまっていた。
その石が、なんであるのかガネルは知らない。
ただ、生まれたときから、彼には馴染み深いものだった。
毎夜とは限らぬが、目覚めたとき、なぜか握っている石のひとつだった。どうしてそんなことが起こるのか、不思議に思ったこともなかった。なぜならアリオーニが、それは少しも不思

議ではないことを教えてくれたからだ。
彼女もまた、なにもない場所から赤い石を取り出すことのできるひとだった。
結界の張り方も、彼女から学んだ。
母親の顔をしているときのアリオーニは、なかなか厳しい教師なのだ……最近では、別の夢に浸る時間のほうが多くなってしまったが。
美しいアリオーニの、美しい夢――決して壊したくないというのに、こんなとき、どうすればいいのか、ガネルにはわからない。一度アリオーニに尋ねたが、彼女は「知らない」と答えたのだ。
以前は、こうではなかった。
黴の気配はもっと微弱で、ひとつぶの石が濁ってしまうまでに、もっとずいぶん時間がかかった。
それが最近ではどうだ――ほんの半月ほどで、石は真っ白く濁ってしまう。
「どう……すれば、いいんだ……」
呻くようにつぶやいて、ガネルは新たな石を地中に埋めた――濁った石はそのままに。
彼は知らない――その行為こそが、彼が黴と呼んでいるものの力をさらに強くしてしまっているのだということを……そう、まぎれもない瘴気を。
知らないからこそ、彼は過ちを繰り返す。

「ちくしょう……ちくしょう……まだだ。まだ、ここを離れるわけにはいかないってのに……どうして……」

歯噛みしたいほどの悔しさを抱えたまま、ガネルは屋敷を取り巻く一面の花園を見やった。

アリオーニが一番好きな麗春花は、半ば以上散りかけていた。

「駄目だ！　まだだ！　まだ散るな！　いま散ってしまったら、あのひとの夢が……！」

壊れてしまう。

破綻してしまう。

ここはあの夢の花園ではないのだと——最高の幸福を覚えたあの瞬間ではないのだと……彼女が、気づいてしまう。

「……あんな最低なやつのせいで……」

脳裏に浮かぶ顔は、実際には目にしたことのない男のそれだ。

アリオーニが愛したただひとりの男——なのに最初から裏切りしか用意していなかった卑怯な男……。

「なんで、あんなやつのために、アリオーニがこんな目にあわなきゃならなかったんだ……!?　ひとかけらの誠意すら持ち合わせていないあんな男のために……どうして……」

それは、深い、深い憎悪だった。

その男の名を、ガネルは知っている。自分と同じ名前なのだ。

その男の顔も、彼は知っている。自分とよく似た顔だちの、同じ黒髪と灰銀の瞳を持つ、恐らくいまでは壮年にさしかかっているであろう……男。

ふたりの女を裏切った男。

ふたりの女を嘆き悲しませた男。

ふたりの女を絶望の淵に追い詰めた男。

そして……ひとりの女に、罪を犯させた、男。

「……殺して、やりたい……っ！」

想いに力が宿るなら、自分はきっと何度でも、その力で男を殺していたに違いない。

言の葉に力が宿るなら、自分はすでに何十度も、男を殺していたに違いない。

尽きせぬ憎悪を向けるその男の名はガネルオージェ……ガネルの実の父親だった。

「聖女アリオーニ？」

薬湯のおかげか、精神的な混乱もなく目覚めたファタラーニが告げた名に、トリノアークとナウルニールのふたりは首をかしげた。

聖石の使徒と呼ばれる者の数は決して多くない。とはいえ、それは地域や国に限ったこと

で、ひとつの大陸ともなれば、それなりの数になるわけで、七つの大陸すべてを含むとなればさらに数は多くなる。

かなり勤勉な者でも、バルヴァローズ中の使徒の名を把握することは無理であり、使徒自身にしても、顔どころか名前もしらない同僚が、世界中にごろごろいるという寸法だ。

強大な力を持つ使徒の名が、広く知られることは珍しくないが、それだとて大部分が誇張された噂にすぎぬことが多く、しかも、どれほど広まったとしても、数国ぐらいが関の山だ。

ましてや、違う大陸出身の者ですら耳にしたことが一度ならずある——というほどに名の知れた使徒など、まさに伝説としか呼びようのないものであり……当然、他大陸生まれのふたりが、その名を知っているはずもなかった。

ふたりの困惑を見て取ったのか、ファタラーニはこう切り出した。

「おふたりがご存じないのも仕方のないことですわ……聖女とまで呼ばれたあの方は、けれどいまでは神殿内の禁忌となっているのですから」

こちらの無知を咎めぬばかりでなく、補足までしようという彼女の態度は、公正どころか親切ですらあった。

「あの方が聖女と呼ばれてらしたのは、十五年前までのことです……柘榴石の使徒であられたあの方は、血の病に苦しむ者のために、自らの生み出した聖石の子供石を、惜しみなく薬湯に変えて与えておられました……」

聖石の使徒が生み出す子供石は、本来すべてが神殿の所有物と見なされる。
聖石の子供石の持つ、強力な守護力を考えれば、それを神殿が独占したがるのは自明の理ではあったが、さすがにその神殿すら、使徒たちにただで子供石を提供しろとは強要しなかった。
いかに育て、教育した恩を打ち出したところで、そんなことを強要すれば、使徒たちが黙っていないことをさすがにわかっていたのだろう。
使徒たちは、自らの能力を発揮するさい、副産物として生まれてくる聖石の子供石のいくばくかを――つまりは、現状にあっては不要と見なされる分を――、育ててくれた恩返しの意味を兼ねて、神殿に委ねるようになった。
そうして、長い歴史のなかで、いつの間にか使徒の生み出した子供石の所有権は神殿にあると……それを『守り石』として売った場合の利益ゆえにか、そういうことになってしまったのだ。
使徒のなかにも、神殿に売却することで小銭を稼ぐことを覚えた者が増えた。
聖石に連なる子供石は、そこに宿る力のすべてを発揮させようとした場合、姿を消してしまうためだ。
欲に正道を見失うような人間が、使徒として選ばれるはずもなかったが、人生の苦しい場面において、そのせいで心に迷いが浮かぶ者が出なかったかと問われれば、答えは否である。

結果的に、使徒たちはさまざまな方策を学び、知識と心根を豊かにしたことになったわけだが、それではすまないことも、もちろんあった。

多くの使徒たちが、利得の前に挫折していったなか、彼女は……アリオーニだけは違ったのだという。

彼女は、血が原因で苦しんでいる病の人々のために、惜しみなく自らが生み出した子供石の力を使い、人々の治療にあたっていたのだという。

そんな彼女を、いつしか救われた者たちが聖女と呼び始めたのは、それほどおかしなことではなかったのかもしれない。

だが、聖女と呼ばれた彼女の名誉は、ある日、ある人物との出会いによって地に堕ちた……。

たったひとつの出会いが、彼女からすべてを奪いとってしまった。

最初から、彼女と出会うべきではなかった相手と出会い、そして互いに恋しあってしまった……その瞬間に。

彼女の出会った最初にして至高の恋人は、いささか誠実さに欠ける人物だったのだ。

それを真実の恋だと、心底から感じたのならば、彼は、隠すべきではなかった。偽るべきではなかった。

すべてを明らかにすべきだった。

すでに自らには妻がいることを。その妻の胎内には、新たな命が宿っていることを。
だが、男は打ち明けられずにいた。
秘められることと信じていた――到底無理なことだと、わからぬはずもなかったろうに……。

そして、訪れた当然の破局。
嘘は破綻してしまった。真実は暴かれてしまった。
アリオーニは男の嘘と不実を知ってしまったのだ。
そして彼女は心破れた。
悲劇は、その直後に起こったのだ……。

「アリオーニさまが姿を隠されたのはその直後でしたわ……」
そう告げたファタラーニの紫色の瞳には、どうしようもない苛立ちと怒りと悲しみがあった。
「あの方を偽りつづけていた恋人の……ガネルオージェの、生まれたばかりのお子が攫われたのも同じころでしたわ。神殿もあの男も、必死にふたりの行方を捜しましたが、成果のないま

ま、今日に至っております……」

ファタラーニの言葉づかいはどこか奇妙だった。

聞けば、そのガネルオージェという男は、紅釉の王家に連なる名門の当主であるという。本来ならば、罪を犯した——たとえかつては聖女と呼ばれていたとはいえ——女性と引き比べれば、どちらに敬意を示すべきかは明らかなものだというのに、彼女の口調はまるでその男こそが罪人であるかのように聞こえる。

確かに女性の身としては、不実な男に対する怒りはあるに違いない。だが、罪は罪だ……禁忌とまで隠されてしまった聖女を、どこまでも敬う態度を崩さぬ彼女に、いささかの訝りを覚えたナウルニールとトリノアークは、しかしつぎに彼女が洩らした一言で、その理由を知った。

切なげに半ば瞼を伏せたまま、ファタラーニは断言した。

「恐らく間違いありません……あれは、アリオーニさまと、攫われたお子なのだと思いますわ。わたしは幼いころ、あの方に母の命を救っていただき、それがご縁で親しくしていただいておりました……間違えるはずがございません。あの方です。あの子供も……あれほどに父親にそっくりなのですもの……きっとそうに違いないはずですのに……なぜ、あれほどに幼い姿をしているのか……いえ、いいえ、それでも、あのふたりはあの方とその子供に相違ありませんわ……」

うっすらと浮かんだ涙を隠すように、ファタラーニはそれきりうつむいてしまった。
そんな彼女を前にして、男性陣ふたりは、なんとも反応に困り、互いに目配せをかわしあったのだ……。

5

「想像してたより大事みたいだなー」

そうは言いつつも、ちっとも緊張感を感じさせない口ぶりで、宿に戻ったトリノアークがつぶやくのに対し、ナウルニールは冷ややかな表情と態度と声とで応えた。

「……金剛石の子供が生まれており、しかも正規の教育を受けていないらしいとわかった時点で、かなり深刻な事態だと、わたしなどは思っておりましたが？」

なまじ柔和な雰囲気を纏っているだけに、ナウルニールがこのような態度を取った場合、劇的なまでの効果がある。

冗談ではなく、周囲の気温が氷点下に下がったような錯覚を覚えるのだ。

感受性という点において、ほかの使徒たちに比べ、ずいぶんと鈍感というか、神経が頑丈にできているトリノアークですらもそう感じるのだから、敏感な人間なら悲鳴をあげて逃げ出しているかもしれない。

「ああ、いや、だから……手ごわそうでもなんでも、相手はまだ未熟なガキひとりだと思って

たからさあ。いざとなったら強硬手段取ればいいから、ある意味楽かなーとか思ってたもんだからさー」

緊張感にかなり欠ける男の言葉に、真紅の瞳の青年は首をかしげる——わざとらしく。

「いざとなったら……？　どんな、強硬手段を……？」

相棒がかなり剣呑な波動を、全身から放出しているのに気づかないわけでもなかったが、トリノアークはあっさりと本音で答えた。

鈍感であれるというのは、ある意味幸福なことである。

「んー？　だから、不意打ちでもなんでもいいから、問題のガキの急所でも死なない程度に狙ってオトして？　回収しちまえばこっちのもんだーとか？」

呆れたとばかりに、ナウルニールがため息をついたのは致し方のないことだったろう。

「あなたの辞書には説得という言葉は載っていないのですか？」

皮肉半分、非難半分の相棒の言葉に、しかしトリノアークはあっさり答える。

「おれ、元々面倒くさいの、嫌いだし」

よく存じてますよ——とは、相棒の答えだった。

「だが、まいったよなあ……正気失ってるつっても、そのひと、使徒の能力封じられちゃいないわけだろ？」

「そうらしいですね」

相棒の声は、どこまでも涼しい。

聖石の使徒は、余人より神に近しい人間だとされている。だが、あくまで人間であることに違いはなく、道を踏み外す者もいれば、耐え難い衝撃ゆえに正気を手放す者もいる。

両者とも、大抵の場合は問題とはならない。

そうなってしまった者のほとんどは、早晩聖石の持つ力を失い、ついには聖石そのものも消滅してしまうからだ。

だが、たまに例外が生じる。

狂気に陥りながらも、神々への信仰を捨てぬ者——あるいは盲愛ゆえに道を踏み外したことにも気づかぬ者。

これらが一番タチが悪い。

現在目覚めている神々のなかに、これを断罪できる者はいないのだから。

我欲に走り、神々への尊敬と愛情を失った者が力を失うのは、あくまで神々の感情の変化なのだ。

愛され、敬われれば、大切にしてやろうとも思う。だからこそ加護も与える。

だから、それが歪み、愛や敬意が失せてしまえば、想いも冷める。

それゆえに能力は失せ、聖石も消え失せる。

だが、神々への愛情はそのままに、しかし道を外した者、あるいは狂気に身を委ねてしまっ

た者は……？

神々は、裁けない。裁く力を持つ唯一の女神は、浄化のために眠り続けており、彼女の目覚めは世界の破滅――。

ならば、人間が裁くしかないではないか。

聖石との絆を断ち切り、能力に封印し……。

だが、今回の事件の渦中にあるのは、それがなされていない使徒である女性と、彼女に育てられた未熟な、だが最強の潜在能力を誇る聖石に選ばれた子供なのだ。

そのふたりを、いかにして無事に保護するか――。

さしもの鋼玉石の使徒ふたりにとっても、これは難題だった。

子供を殺したくはない。

女を殺すのはもっと御免だ。

だが、それ以上に見たくないのは……。

「ナニィ……」

相棒の愛称を呼んで、トリノアークはクギを刺した。

「おれが、やるからな」

だから、お前は手を出すな――。

言外の意味はしっかりと通じたらしく、やさしげな外見の相棒は、困ったような顔で瞼を瞬

かせた。

「努力する……では、いけませんか？」

「結果に繋がってこその努力だろうがよ」

拒否する意を感じ取ってか、ナウルニールは珍しくしばし沈黙した。

ほんの数瞬の、だが当事者たちにとっては、恐ろしく長く感じられた時間の後に、ナウルニールはあきらめたようにうなずいた。

「限界まで、我慢しましょう」

それはトリノアークの望む答えではなかったが、最大限の相棒の譲歩だということもわかっていたから、彼は仕方なくうなずいた。

「おう……我慢してくれ」

永遠を望んだわけではない。

けれど、かなう限りの時間を、ガネルは望んでいた。

永遠など意味がない。人間の命には限りがあるのだから——夢の世界に生きるあのひとの紡いだ幸福なそれを、あのひとの時間が尽きるまで守ってあげたかった……それだけだった。

ガネルはすべてを知っていた。自分が彼女の――アリオーニの血を分けた息子などではないことも、なぜ自分が彼女のそばにいるのかも。

絶望と悲嘆のあまり、アリオーニは記憶をねじ曲げた。

ガネルは、自分と恋人の間に生まれた子供なのだと――恋人は、いまは遠くに出掛けているが、必ず自分たちの元へ戻ってきてくれるに違いないのだと。

だから、彼女にとってガネルは息子なのだ。

攫ってきた事実を無理やり忘れ、彼女はその夢に深く身を沈める。

けれど、彼女は完全に正気を手放したわけではない。真実の夢のなか、彼女は真実を突きつけられる。そして、上げる悲鳴……幼いころから、ガネルは何度、悲鳴を上げて飛び起きた彼女に抱きしめられたかわからない。

彼を抱きしめることで……彼の存在を確かめることで、アリオーニはふたたび夢に沈む……仮初めの、幸福な夢に。

だからずっと、ガネルはその夢を守りつづけていきたかった。

だが、破綻の兆しは、ある日突然起こったのだ。

アリオーニは午睡していた。過保護な母親である彼女のために、ガネルは、彼女が目覚める前に、その傍らに戻っていなければならなかった。

美しく慈悲深い柘榴の使徒……聖女アリオーニ。

菫の瞳をガネルに向けて、彼女は嬉しそうに彼の名を呼んだ。

『ガネルさま……』

ガネル――ではない。

息子である彼に向けた眼差しでも呼びかけでもなかった。

それは、自分を裏切った……不実な恋人に対するものだったのだ。

そうと気づいた瞬間の、ガネルの衝撃は筆舌に尽くしがたいものだった。

彼女の夢に自分のそれが同調することで、彼はすべての事情に通じていた。彼女を欺いた、不実な彼女の恋人――自身の父親の顔も知っていた。

似ている……とも思った。

仕方のないことかもしれないが、その事実は彼に嫌悪しかもたらさなかった。

それでも、彼女のために、我慢することはできた。

父親によく似た子供だということで、彼女の偽りの夢は守られるのだから……少なくとも、もしも自分が、実の母に酷似していたとしたら、アリオーニの夢はもっと早くに破綻していたに違いないとわかっていたからだ。

だが、この午後――恋人を見る眼差しを向けられた瞬間、ガネルはあるひとつの可能性に思い至り、恐怖さえ覚えたのだ。

どれほど彼女の夢を守ろうと、変えられない現実がひとつ存在するのだという……その事実

に、いまさらながらに彼は気づいた。いや、気づかされた。

そのころ、ガネルは十だった。

アリオーニの世話をさせるために、付近の街から見繕い、意識の一部に干渉した上で屋敷で働かせている者たちに聞いたところでは、彼は他の同年齢の子供に比べ、成長が早いほうなのだということだった。

ガネルは焦った——そのどうしようもない事実ゆえに。

もしもこのまま、自分が成長していけば、どうなってしまうのか——。

恋人によく似た子供なら、彼女は恋人を待つ夢に浸っていられる。訪れてくれない恋人を、それでも我が子という支えがあるから、じっと待っていられるのだ。

だが、もしもその子供が成長してしまったら……恋人そっくりな子供が、恋人そっくりな少年ないし青年に育ってしまったとしたら……!?

考えるまでもなかった。

彼女は、恋人が帰ってきたのだと信じるに違いないのだ。

全身の肌が粟立つような衝撃と恐怖だった。

彼女が自分を恋人だと思いこんだそのとき、自分はどうすればいいというのか。

あくまで彼女の夢を守るつもりなら、自分は彼女の『恋人』になるしかない。

大切な仕事のために、長年彼女と子供に淋しい思いをさせた……だが、ようやく帰ってきた

恋人を演じるしかないのだ。

だが、果してそれが可能なのか……。

いや、自分にそれができるのか。

ガネルにとって、血のつながりは関係なく、アリオーニはあくまで母親だった。ずっと母として慕ってきた。息子として愛されてきた。精神的な部分で、ガネルは彼女を母親としか認識できない。

そんな相手の恋人になる……？

それは、精神的な意味における母子相姦に外ならない。

拒絶感と嫌悪感に、彼はそのとき、蒼白になった。

あれから、五年になる。

ずっと、自身に言い聞かせてきた。

育つなと。子供のままでいろ、と。

おかげで、十五になるというのに、外見は十二、三にしか見えないように保っている。アリオーニはだから、ときおりは恋人と錯覚することはあっても、まだ子供である自分を認めている。

しかし、もう、限界に近い。育つべき肉体を押さえこむには限界がある。これ以上の力を、自らの肉体にそそぎこんでいたのでは、彼女の夢を保持するだけの力を揮えない。

しかも、ここ数年の、あの得体の知れぬ『黴』の気配……。

「……どうすれば、いいんだ……!?」

思わず叩きつけた問いに答えるかのように、アリオーニの夢を保護する結界の一部に亀裂が走ったことに気づいた。

「そんな馬鹿な！」

慌ててその方向に駆けだそうとしたガネルは、それを止めるように、背後から体を拘束された事実に目を瞠った。

（いつの間に……!?）

自問する彼の想いが伝わったわけでもなかろうが、背後を取った人物は、彼の首の一部を指で押さえながらこう告げてきた。

「不意打ちですまんな。だがこれ以上ぽこぽこと不毛の地を増やされても困るし、やつらの恨みつらみ晴らすためだけの傀儡なんぞ、作られちゃあ困るわけだよ。お前だって、そんなもんにはなりたくないだろ？　だから、ちょっとおとなしくしてな。安心しろ、おれだって、わざわざ酷い真似なんざする気はないからな」

言いたいだけ言って、首を束縛する指は離れた。

だが、どんな仕掛けをほどこしたのか、ガネルは指一本動かせなくなっていた。

気配が、背後から遠ざかっていく――アリオーニのいる屋敷の方角へと！

「お前……貴様！　なにをするつもりだっ!?　アリオーニになにを……っ!?」

大丈夫ですよ――と、今度は正面から声がかかった。

どこから入りこんできたのか、ガネルの目の前には、処女雪のような髪と真紅の瞳を持つ青年がいた。

ガネルは、男性だと一目でわかった。同時に、ガネルだからこそ、相手の柔和そうな顔だちや優しげな振る舞いにも騙されることはなかった。

現れたその青年は――とても恐ろしい存在だった。

「彼は……トリノアークは、優しい男です。決して悪いようにはしませんよ」

言い切って、青年はにっこり笑った。

それは人好きのする、見た者を安心させるようなものであったにも拘わらず、ガネルは恐怖を覚えた。

「なにを……彼女を、どうする、つもりなんだ……？」

一言、一言区切るように、そして返答次第ではただではおかないという意志をはっきりと示しながら問いかけた彼に、最高級の紅玉の色彩をたたえた瞳の青年は、安心させるように微笑んだ。

「無体な真似は決してしません……というか、彼には、トリノアークにはできません。ですから、信じてここで待っていてはくれませんか？」

それは偽りのない申し出だった。

だが、そうだとわかったからと言って、はいそうですかとうなずくことはガネルにはできなかった。

「答えてないな。あいつは……あの男は、彼女になにをするために、屋敷に向かったんだ……!?」

「あなたはわかっているでしょうに……それでも尋ねるのですか？」

感じたのは、圧倒的な相手の優位とその自信――。

かなわないと直感しながら、ガネルは抗わずにはいられなかった。

「もちろん、尋ねるし反抗するさっ！　おれはあのひとを守ると誓ったんだからなっ！」

叫んで、ガネルは相手の拘束から無理やり抜け出した。

ぽきり、と音が聞こえた。

腕の骨の折れる音だ。

だが、そんなものは気にならないほど、彼は焦っていたのだ。

「アリオーニ……アリオーニ！」

唯一の希望、ただひとりの夢――。

「アリオーニ！」

折られた腕もそのままに、彼はただひとりの女性の部屋へと駆け向かった。

恋人にはできぬ相手でも、彼女は彼にとって最初の、至高の女性だった。
いや、だからこそ、別の存在に置き換えることのできぬ、絶対的なひとだった。
「アリオーニ！」
ようやく駆けつけたその場所で、彼女のための部屋の扉に体当たりしたガネルは、自分が間に合わなかったことを知った。
あの男の手に、真紅の刀身の大剣が握られていた。
アリオーニの生み出す石とよく似た、けれどもっと明るく華(はな)やかな色彩――極上の紅玉(こうぎょく)の刃。それが、彼女の体を貫(つらぬ)いていた！
「アリオーニ……っ！」
叫びながら、ガネルは走り出した――灰銀の双眸(そうぼう)を憎悪に燃やして。
彼女を傷つける者を、彼は絶対に許すつもりはなかったのだ。

6

長い、長い夢を見ていた。

少しだけ淋しい、けれど幸福な夢を。

（あの方を信じて、あの方によく似た息子とふたりで、あの方のお帰りを待って……）

それは夢であると同時に現実――けれど、真実ではない。

（とても甘い、蜜のような夢……だからわたくしは、夢だとわかっていたのに、目覚めるのを拒んでいたのだわ……）

目覚めた現実は、決して自分にやさしいものではないことを知っていたから、彼女は夢に浸りつづけた。

いや、今回のことがなければ、命尽きるまで浸りつづけていたに違いない。

目覚めるきっかけとなったのは、結界の綻びだった。そこから入りこんできた、ふたつの強い気配に、彼女の意識は揺さぶられたのだ。

夢を終わらせる者たちだ、と彼女はどこかで確信していた。

心地よい夢を手放したくなく思い、怯える一方で、潮時だとも思い、安堵していた。
近づいてくる――それがはっきりとわかった。同時に気づくことがあった。
結界を包む、強烈な瘴気に、彼女は自らが犯しかけた罪を知った。
聖石の使徒は、心を虚ろにしてはならない。常人より強い力を宿し得る耐性を持つ彼らの肉体は、常に器を欲する瘴気が最も求めるものなのだから。
瘴気は使徒の肉体を器とすることで、その人物の持つ知識までも吸収する。瘴気を抑え、あるいは封じるための知識が、逆の目的に利用されてしまうのだ。
現実を拒み、長いこと夢にたゆたっていた彼女の存在は、瘴気にとっては恰好の器と見なされたのだろう。だから、これほどに集まってしまったのだ。
無事でいられたのは、ガネルのおかげだった。
彼が金剛石に選ばれた子供であったことと、そしてこのような自分を心から慕ってくれたそのことが、結界となって、この身を守ってくれたのだ。
（わたくしにはそんな価値はないのに……）
涙が溢れそうになる。
彼女は自らの罪を思い出していた。恋人だと信じていた相手の裏切りに、正気を保てなかった罪、さらには夢に逃げこみ、そのために彼の妻たるひとから生まれて間もない息子を奪った罪、現実を見据えることをせず、ひたすら夢に浸りつづけた罪、知らせる必要のなかったガネ

ルに、すべてを知らせてしまった罪――。

弱く浅ましい心が犯した罪だった。

（だから……これは、当然の報いなのだわ）

夢から醒めた彼女は、起き上がるときに感じた胸の痛みの理由を、はっきりと悟っていた。心臓が弱っている。あり得ない常春の――間違った夢を紡ぎつづけたツケが、体に回ってきたのだ。

現実に戻ったからといって、この衰弱ではもはや長くはない。それに、使徒として、ここまで瘴気を集めてしまった責任は取らなければならない。拡散させるよりいい方法があり、幸運にもそれができるらしい人物が、わざわざ来てくれたのだから。

そう彼女――アリオーニが思ったとき、扉が開き、その人物が姿を現した。

アリオーニは……それが自分を断罪する相手だと覚悟していたにも拘わらず、意外さに軽く目を瞠った。強い邪気を祓う気配から、彼女はてっきり相手は青玉の使徒だと思っていたのだ。

だが、現れたその相手は――。

なるほど、外見はまさに青玉の使徒としか思えぬ男性だった。最高級の青玉の、矢車菊のような――と表現される深い、深い青の双眸は、彼が青玉に選ばれた使徒であることを示しているかのように見える。

けれど、アリオーニにはわかった。彼を選んだのは青玉ではない。

「なぜ、青玉のお方ではなく、紅玉の……貴方がいらっしゃったのです？」
尋ねた彼女に、その男性――トリノアークは肩をすくめて答えた。
「おれは、あいつに女殺しをさせるわけにはいかないんでな」
そこに、相手を気づかう以上のなにかを感じて、アリオーニはもの問いたげな顔になったが、答えてもらえそうもないと即時に判断し、こくりとうなずいた。
「幾重もの罪にまみれた身です、覚悟はできております……どうぞ、ご存分に」
アリオーニはそう告げ、目を閉じた。
「いい覚悟だ」
と、男が答えた。
男がすらりと剣を抜く気配がした――真紅の、紅玉の刀身の、鉄などより遙かに硬い刃の剣――破邪と浄化の気配を纏うのは、その柄に埋めこまれた青玉のせいだった。
ぶん、と刃が空を切る音――。
そして、紅玉の大剣は、瘴気の器と化したそれを、深々と刺し貫いたのである。

「貴様……っ！」

（許さない、許さない、許さない……！）

アリオーニを傷つける者は決して許さない。

アリオーニは絶対に守ってみせる。

そう、心に決めていたというのに……守れなかった。守りきることができなかった。

そのことで自身を責めるより先に、彼女を殺した相手への憎悪を抑えきれない。

ガネルは暴走しかけていた。

「よくも……よくも……アリオーニを……っ！」

信じるのではなかった。

こんなことになるのなら、あんな束縛ぐらい、全身の骨が砕けても、抗うべきだった。這いずってでも、相手を追うべきだった。喉笛に食らいついてでも、あの男を止めるべきだった！

動けなかったなど、言い訳にすぎない。現に、腕の骨は折れたけれど、動こうとしたら動けた。なぜあのとき、そうできなかったのか!?

悔いばかりが残る。

だからこそ、男が許せない。

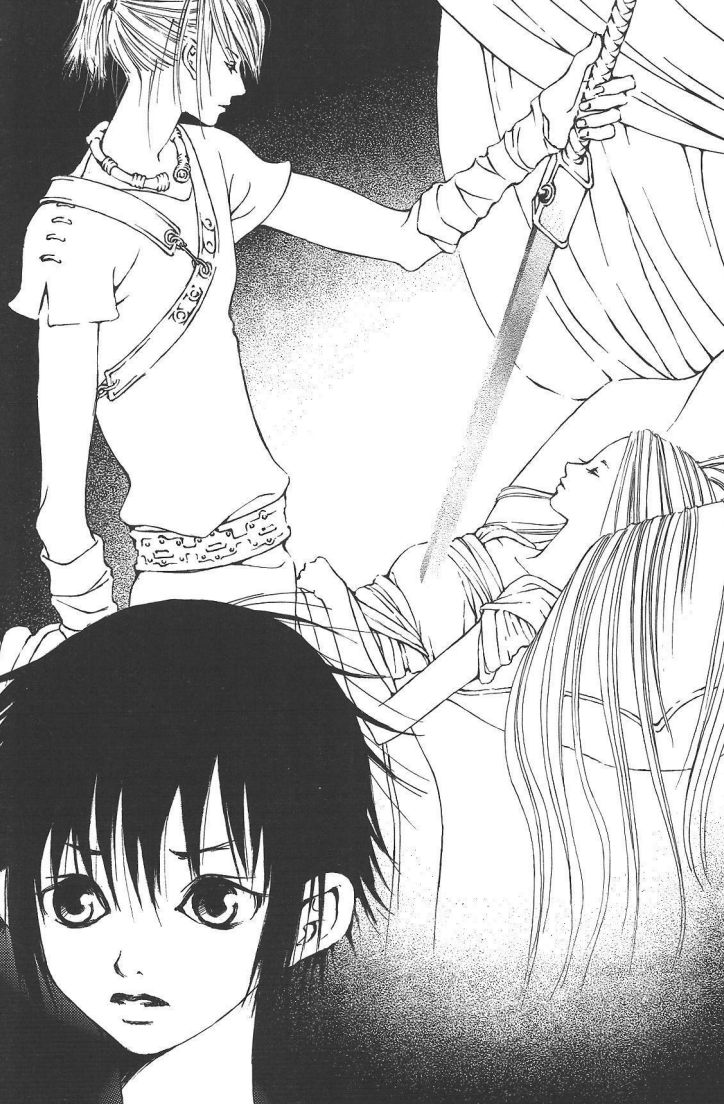
（殺してやる……絶対に許さない！　必ずこいつを……）

殺してやる！

ただひたすらにその一念で、トリノアークに襲いかかろうとしていたガネルオージェの体

を、不可視の糸がからめ捕り、その動きを封じたのは次の刹那のことだった。
不思議の技――ではなかった。
「お待ちなさい、ガネルオージェ。方向違いの八つ当たりをする前に、真実を見極める努力をなさい。それすらできないのであれば、わたしがこの場で貴方を粛清しますよ……あなたは、とても貴重であると同時に、非常に危険な存在なのですから」
相手はただ、そう――まあ、かなり物騒な内容だとはいえ――語りかけてきただけに過ぎなかったのだから。
ただ相手の声に宿る意志の強さ、そして言葉自体に宿る力が、彼の動きを封じこめてしまったのだ。
（……なんだ……!?）
思わず振り返った先には、先程出会ったばかりの真紅の瞳の青年が佇んでいた。
その髪は純白、その肌は乳白色、ただ双眸だけが鳩の血を連想させるあざやかな真紅だった。
全身の肌が粟立つような衝撃と恐怖を覚え、この目に見える事実以外のなにがあるのかと、再びアリオーニの身を襲った現実に目を向けた……向けたはずのガネルは、二重写しのように、視えた映像に目を瞠った。
ひとつは、先程目にしたままの光景だった。

紅玉の大剣を持つ男によって、アリオーニがくし刺しにされているもの——だ。
ところがなぜだか、いまでは違うものまでもが視えた。
刺し貫かれているアリオーニの全身は、あの黴に覆い尽くされており、なのにそれらが、徐々に消えていこうとしているのだ。
しかも、それはアリオーニのはずなのに、アリオーニに見えなかった。
黴が消えていくにつれて、それは全然違う、別のものに見えはじめたのだ。
核に柘榴石——その周りをびっしりと覆うのは青玉。さらにその周囲を包みこむのは無色の水晶。
はっきりと、それが見えた瞬間、それは破砕され、室内に飛び散った。
その一片によって傷つけられた痛みのおかげで、ガネルはは っと正気に戻った。
まるで長い幻を見せられたような気分だった。
だが、千々に砕かれた水晶や青玉や柘榴石のかけらは床に飛び散ったままだった。
そして……なによりも大切な、アリオーニは寝台のなかで眠りつづけていた。
「……アリオーニ……」
無事で——という言葉は、声にならなかった。
脱力し、座りこんでしまった彼に、真紅の双眸の青年は告げた。
「形代の術と言う……こういうことも、できるんだよ。君のこれまでの無知は責めないが……



これからもそのつもりなら、わたしはいずれ、君を狩ることになるだろうね」

このまま、君が無知を理由に安逸な立場に安穏とするつもりなら――。

「間違いなく、わたしは君を狩ることになるよ」

優しい声で、穏やかですらある口調で、はっきりとそう告げた青年の顔を、ガネルは見返すことができなかった。

生まれて初めて、魂からの恐怖を覚えて、彼はそれでも絶対に譲れぬ一線を提示した。

「学べというのなら学ぶ。知らないことが多すぎるというのなら、いくらでも知る。けれど、彼女のそばを離れるのだけはいやだ。絶対に、イヤだ」

言い切った彼に、ナウルニールは微笑んでうなずいた。

一定期間の猶予を認めるようなその態度に、ガネルは不快なものを感じたが……それが事実でしかないことを、いまの彼はわかってしまったから、唇を噛みしめてでも認めるしかなかった。

「……約束、する……」

言い切って、ガネルはかたく目を閉じた。

最大の悲劇と思われる事態や状況を退けることはできるかもしれない。免れることもできるかもしれない。けれど、絶対に避けられない瞬間というものはあるのだ。

訪れるのだ。

「約束する！」
その絶対の時を迎えた場合の誓いを、ガネルは叫んだ――遠からず訪れるに違いない、その一瞬をひたと見据えて……。

「よかったのか？」
結界の消えた土地は、浄化のおかげか、荒れ地にはならなかった。
とはいえ、アリオーニの夢が作り上げた花園や屋敷は、彼女が夢から醒めたことで消失した。そんなふたりに、暮らしていくためのこぢんまりとした屋敷を用意したのはナウルニールだった。
正確に言えば、この付近にツテを持つファタラーニに相談し、適当な物件を見繕ってもらったのだ。購入するための金子は、彼らが生み出す聖石の子供石をいくつか手放すことで手に入れた。青玉も紅玉も大変貴重な宝石である上に、彼らの生み出すそれは、色も大きさも申し分ないものだったから、買い手に苦労することはなかった……もっとも、ガネルオージェには、しっかり貸しただけだと念を押したわけだが。
「神殿のほうじゃ、見つけ次第連れて来いって話だったんだろ？　あの元聖女が一応の教育は

してたみたいだが、モノがモノだ。万一にも暴走させたらエラいことになっちまうわけだからさ」

相棒の問いに、ナウルニールはうっすらと微笑んだ。

「いまの状況で、あの子供を彼女から引き離すほうがよほどに危険ですよ。それに、あの子供も、その時になれば、自らの務めから逃げようとは思わないでしょう……一応念入りに約束させましたしね」

にこにこにっこり——笑ういまの青年からは、「無知なままでいるのなら殺す」と少年を脅したときの迫力は感じられない。

ちなみに、あの台詞が威嚇でもはったりでもないことを、相棒であるトリノアークはよく知っていた。出会ってまだ間もないころ、ナウルニールの優しげな物腰や口調に騙されて、軽くあしらった結果、洒落ではなく本気で死神ナムラタールの世界へつづく川を渡りかける羽目に陥ったことがあったためだ。

それ以来、相棒の性格や精神状態に、細心の注意を払うようになったトリノアークが、よくわかっていることはもうひとつあった。

ナウルニールが一度言いだしたら、いっさい退かないということだ。

「……まあ、いいけどな。神殿にはどう誤魔化すわけだ？　まさか無視するわけにはいかないだろうが」

そう問いかけたトリノアークに、相棒の青年は、けろんとした顔で、とんでもない言葉を返してくれた。

「なぜです？　一足違いで逃げられた後だったとでも報告しておいても、別に害はないでしょう？　半年から一年ほどのことです……その子供を捜すという名目で、美陶のあちこちを旅するのも悪くないと思いますよ？　ファタラーニは元々あの女性に好意的でしたからね、事情を話しましたら、快く協力を約束してくれましたよ。どうせ、こちらの神殿には、あの子を教育できるような……というか、暴走したあの子を止められるような人材はいないでしょうからね。教師兼目付役として、わたしたち以上に適した人物はないと思いますし」

唖然とさせられたトリノアークだった。

確かに一理ある。生まれ持った聖石の硬度ばかりが使徒の能力を計るわけではない。珊瑚や真珠の使徒のように、柔らかくとも非常に強い力の持ち主もいる。

だが、相手が金剛石の使徒となれば、話は大きく違ってくる。

聖石でなくとも、金剛石には大変な力が宿る。そんなものを抱いて生まれてきた子供を教育するとなると……確かになまなかな人物には務まらない。

「……もしかして、お前、最初からそのつもりだったのか？」

尋ねたトリノアークに対する答えは否――。

「手のつけられない相手だったら、さっさと簡単な方法を選びましたとも」

つまりは殺していたというわけだ。

「おっかねえ相棒だなあ……」

ぽつりと洩らしたトリノアークを、ナウルニールは軽くねめつけ、こう告げた。

「せっかく、仕事扱いで骨休めできる時間を工面したつもりでしたのに……お気に召さないのなら……」

そこまで言われて、初めてトリノアークはこの話の最大の旨味に気がついた。

ここは美陶だ——故郷の樹翁ではない。ということは、今回の一件が——本当は解決しているのだが——片づくまでは、余計な仕事を入れられることなく、思い切り休暇を満喫できるわけではないか！

青い瞳をきらきらと輝かせながら、トリノアークはばんばんと相棒の肩をたたいた。

「ない、ない！　文句なんかひとっつもないって！　いやあ、お前、相変わらず頭がいいなあ！」

悪知恵のほどを褒められた恰好になったナウルニールは、しかし悪びれることもなく、にっこり笑ってこう結んだ。

「そうでしょうとも」

かくして青玉と紅玉の使徒たちは、数年ぶりの長期休暇を満喫することとなったわけである……。

エピローグ

夢から醒めた元聖女は、一日の大半を寝台のなかで過ごす日々を送っていた。
傍らには、かつての恋人そっくりに育ちつつある彼の息子が寄り添っている。
アリオーニは何度も、ガネルオージェに、本当の両親の元へ戻るよう言い聞かせたが、ほかのことでは彼女の言うことを素直に受け入れる彼は、しかしこのことにだけは絶対にうなずこうとはしなかった。
せめて顔を見せるなりしてほしいと懇願した彼女に、ガネルオージェはゆっくりとかぶりをふりながら答えた。
「おれを生んでくれた母さんってひとが生きてるんなら、そうしようって気になったかもしれないけど……ファタラーニさんから聞いた話じゃ、もう亡くなってるそうだし。まあ、妹が生まれたそうだから、アリオーニの具合がもう少しよくなったら、顔ぐらい見せに行ってくるよ」
それでも戻るつもりはないのだと、言外に言い切る彼の態度に、アリオーニは悲しげに目を

伏せる。

ガネルの徹底した父親への拒絶(きょぜつ)が、自分のせいだとわかっているためだ。

そんな彼女の態度に、逆に申し訳なさを覚えながらも、ガネルはこれだけは譲れないと思った。アリオーニと実の母親のふたりを、不幸にした父のことだけは、どうしても許せなかった。

けれどその感情は、目の前の女性を傷つけるだけだから、なるべく隠しておくことにした。ただ穏やかに、ただやさしく……残された少ない時間を、笑顔で彼女に過ごさせてやりたい。その一心だった。

そうこうしているうちに、冬が訪れた。弱っていたアリオーニは、寝台から起き上がることができなくなった。

刻々と時間は過ぎていく。ガネルにも……そして恐らくはアリオーニにも、わかっていた。次の春を迎えることはできまい……と。

砂時計の砂が落ちていくように、彼女の命が滑り落ちていく。

そんなある日、ガネルはファタラーニづてで、不思議な見舞いを受け取った。

それは……水晶だった——なかに花を封じこめた。

両手の親指と中指を合わせたほどの太さを持つ、見事な六方結晶のそのなかで、赤い麗春花(れいしゅんか)が咲き誇っていた。

麗春花――それは春の花。
アリオーニが最初で最後の恋人とであった場所に咲いていた特別な花。
胸を衝かれる想いを隠して、彼は彼女の寝台のそばの小台にそれを置いた。
「……綺麗ね……」
アリオーニはいまにも消えそうな、透明な笑顔でそうつぶやいた。
「本当に……綺麗……」
その夜、彼女は息を引き取った。
翌朝、水晶のなかの麗春花もまた、散っていた。
彼女に殉じるかのように――。
ひとつの恋が、確かに終わった瞬間だった……。

あとがき

暗い出生の秘密とかないぶん、今回のヒロインは暗くぐだぐだと考えこんだりしないだろうからきっと原稿楽々ね♡

なぞと期待していたわたしが馬鹿でありました。

天然ぼややん娘は、それはそれで大変なようです。

……まあ、お風呂屋さん目指してるのに、勝手に世界存亡の危機に巻きこまれちゃってもなあ……本人、確かに迷惑なことでありましょう。

とまあ、そういう筋書きを書いた悪魔のような作者はわ・た・し。

ふふふ、取り敢えずご挨拶を。

聖石の使徒第2巻『其は力を放つ者』をお届けいたします。

前回、あとがきのページが少なかったので、今回はちょっと作品に関するあれこれなど書きたいと思っております。

とは言っても、まだ謎も多いので、さわりだけですが。

興味のあることがそのままネタになるというのは、わたしにはよくあることです。趣味のつもりが調べていく上で作品のネタになってしまうというのはありがちなことで、この『聖石の使徒』もその流れに添ったものでした。

パワーストーンとかそういうの以前に、単にわたしは石がなんとなく好きなんです。石コレクターとは違うんでしょうね。そのままの姿を重視するというわけではなく、うーん……昔、私の家には木目の荒いのから細かいのまで、砥石が何種類かありまして、道端に落ちてる砂利なんかでも、拾ってきて、そのきめの細かい砥石で研ぐのが好きな子供だったりしたわけです。

そうしたら、するするのぴかぴかの断面が現れるわけです。

もう、その断面の綺麗さだけで、満足してました……そう、道端やら川原に転がってる石を拾ってきては、砥石ですりすり磨いて悦ぶような、少々変な子供だったわけです。

もっとも、一時期はそういう子供時代のことは、綺麗さっぱり忘れてました。

でもなぜか、三年から五年周期で、石への興味を抑えられない時期が訪れたわけです。

水晶に興味を覚えた時期もあったし、宝石と呼ばれるものにしか意識が向かないこともあり

ました。天然石と呼ばれるもの全般に興味を惹かれた時期もありました。

何度目かの偶然のとき、思ってしまったわけですね――。

力を秘めた石を抱いて生まれてきた子供――それが、珍しくはあるものの稀有ではないとされる世界を。

そうしてこの世界は出来ました。

けれど、パワーストーンのブームがなかったら、この話は書けなかったろうなと思います。石に関する色々な書籍が見つかったからこそ、できたことも多かったですし。もっとも、魔除けだとか薬湯だとかは伝承を元にしたフィクションですけど。当たり前だけど。

さて、先日友人との電話中「黒珊瑚なんて見たことも聞いたこともないから、てっきりあなたの創作だと思っていたわ」と言われ、もしかしたら同意見の方がいるかもしれないと気づいたので、ここで明記しておきます。

黒珊瑚はあります。現にわたしも持ってます。血赤珊瑚も当然ありますし、作品中に登場した石は全部実在のものです。金剛石、青玉、紅玉……は、ダイヤモンド、サファイア、ルビーです。緑柱石はエメラルド、月長石はムーンストーン、柘榴石はガーネット。まあ、このあたりは割と知られています。赤瑪瑙はカーネリアン、黄玉はインペリアルトパーズ、鋼玉石はルビーやサファイアを含むコランダムのことで、だから金鋼玉はゴールデンサファイアのことだったりします。正確には『金鋼玉石』ですね。

で、なんでわざわざ和名のみを用いたかと言えば、響きや字面が美しいと思うからです。特に秀逸なのは砂金水晶――なんと想像力を刺激する言葉でしょう。アベンチュリンという緑の、水晶の仲間の石なんですが、ときどきラピスラズリの表面に見られるような金粉が見られます（私の持っているブレスレットにもあります）。それは本当に砂金のようで、きっとこの呼び名をつけたひとはこれを見て、だからこんな美しい言葉を選んだろうなと思い、同時にしみじみと日本語の美しさを再認識させられます。

ただ、これには一部の問題があります。和名のない石とか、あるいはあっても『電気石』だとか『アホー石』とかだったりしますと……ねえ？　もしかしたら、そのうち勝手に和名をつけてしまうかもしれません。

ああ、石のことばっかり（笑）。ここらへんでちょっとキャラクターについて語りましょう……といっても、まだまだ開幕間もない状況なので、深くは突っこめませんけど。

今回初登場の三人について。

特にナウルニールとトリノアーク。

このふたりは、設定だけは決まっていたものの、実は最初、あんまり本編には絡まないはずの方々でした。カーラとセイの先輩で、アラクセイトと出会う以前のふたりの番外編あたりにしか登場しないはず、の予定だったんですが……。

予定は未定とはよく言ったものです。

今回収録されている『夢紡ぐ聖女』は、一度雑誌に掲載された作品なんですが、これに登場するのは実はカーラとセイのコンビだったはずなんです。ところが、途中まで書いた時点で、ぴたりと筆が止まってしまいまして、なぜだろうと原因を探った結果、『カーラもセイも、この騒ぎに係わるには敏感すぎて繊細すぎる』という答えにたどりついたわけです。けれど、騒ぎの内容そのものを書きたくて考えた話でしたから、「じゃあ、びくともしない図太い神経のコンビに当たらせたらいいんだわ」と思い、そこで表舞台にしゃしゃり出させるつもりなんか皆目なかった鋼玉石コンビに白羽の矢がたったというわけです。

でも、こんなクセの強すぎる師匠を持つことになったガネルは不幸ですね。アラクセイトも強烈すぎるカーラのせいで主役の座を脅かされているというのに（カーラが主役なんだと思ってましたというお便り、少なからずいただいたのです）……いや、しかし！

子供は親や師匠を越えて一人前になるのだ！　頑張れアーク！　頑張れガネル！

とかエールを送ってるわりに、ガネルにはショックな展開にしてしまってますけど……いえいえ、試練はきっと、子供を成長させるんです。麦は踏まれて強くなる！　きっと彼も踏まれ強い麦に成長してくれることでしょう……多分。

うーん、これ以上書くと、いつネタばらしをやるかわからないので、話題転換。

近況といきます。

予定通りに原稿が上がってたら、次の季節を見越しての石鹸作りに入れるはずだったんです

が……しくしく。なかなかうまくいきません。でも、そろそろストックも（熟成期間四週間かかるのを考えると）微妙なところなので、このあとがきが終わったら、ちょっとまとめて作ろうかな、と思ってます。

檜木の精油が手に入ったんで、まず檜木の香りの石鹸と、あと花粉症対策のユーカリの香りのやつと、あと冬には乾燥しやすい肌なので、保湿効果のあるアーモンドパウダー加えたものとか、あと台所用に消臭効果のある竹炭の粉末入れたやつとか……ほんと、作り始めたらあれもこれも作りたくなって困ります。でも楽しいからやめられない♡

そろそろ結びと参りましょう。

川野さま。

今回は大丈夫だと胸を張って断言したにも拘わらず、結局いつもの二倍の時間がかかって、ご迷惑をおかけしてしまいました。

本当に申し訳ありませんでした。

山本鳥尾さま。

次こそは……とか前回言ったくせに、同じことになってしまって、お詫びのしようもありません。

でもでも、次こそはと思っておりますので、見捨てずおつきあいくださいませませ。

そして、読んでくださる方々へ——。

アラクセイトは経験を積むことで、徐々に育っていくヒロインです。
劇的な才能の開花を見せる一面は確かにありますが、それは彼女にとって一瞬の夢のようなものなのです。
そんな彼女の状況を理解してもらえたら、嬉しいな……と、心から思います。
現実にも、彼女はこれから確実に学習しますし、成長しますから。
どうか、暖かい目で彼女とその周囲の成長を見守ってやってくださいませ——。

本当に最後の最後となりましたが、NY同時多発テロ事件の被害に遭った方々のご冥福をお祈りいたします。
宗教とは無関係に、テロリズムには一片の正義もないと、私は思い、信じてます。
それでは、また、次の作品で——。

平成十三年　十月　一日

前田　珠子

まえだ・たまこ

1965年10月15日、佐賀県生まれ。天秤座のB型。『眠り姫の目覚める朝』で1987年第9回コバルト・ノベル大賞佳作入選。コバルト文庫に『破妖の剣』シリーズ、『カル・ランシィの女王』シリーズ、『聖獣』シリーズ、『ジェスの契約』『トラブル・コンビネーション』『陽影の舞姫』『女神さまのお気の向くまま』『万象の杖』『月下廃園』など多数の作品がある。興味を覚えたことには積極的だが、そうでない場合、横のものを縦にするのも面倒くさがる両極端な性格の持ち主。趣味と実益を兼ねてアロマテラピーに手を出したものの、最近では実益のほうが大きくなり、趣味とは言いがたくなりつつある。次こそは優雅な趣味を持ちたいと身の程知らずにも思っている。



聖石の使徒
其(そ)は力を放つ者

COBALT-SERIES

2001年11月10日　第1刷発行
2002年3月15日　第2刷発行

★定価はカバーに表示してあります

著者　前田珠子
発行者　谷山尚義
発行所　株式会社 集英社

〒101－8050
東京都千代田区一ツ橋2－5－10
(3230) 6268 (編集)
電話　東京 (3230) 6393 (販売)
(3230) 6080 (制作)

印刷所　大日本印刷株式会社

© TAMAKO MAEDA 2001　Printed in Japan
本書の一部あるいは全部を無断で複写複製することは、法律で認められた場合を除き、著作権の侵害となります。
造本には十分注意しておりますが、乱丁・落丁（本のページ順序の間違いや抜け落ち）の場合はお取り替え致します。購入された書店名を明記して小社制作部宛にお送り下さい。
送料は小社負担でお取り替え致します。但し、古書店で購入したものについてはお取り替え出来ません。

ISBN4-08-600025-3 C0193

〈好評発売中〉 コバルト文庫

彼らは、神々に選ばれた存在ー。
異世界アクションファンタジー！

聖石の使徒

其は焔をまとう者

前田珠子
イラスト／山本鳥尾



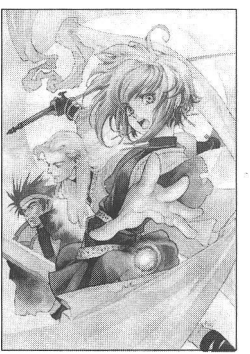
神々に選ばれた存在であり神々の力の一部を授けられているという「聖石の使徒」。その能力を秘めている少女・アラクセイトは使徒となるために神殿で修行に励んでいたが…!?

〈好評発売中〉 コバルト文庫

とびきり有能な人材、提供しますー。

イズァーカ商会へようこそ

前田珠子
イラスト／鈴木理華



イズァーカ商会はどんな厄介事も引き受ける、世界最大にして唯一の人材派遣会社。特殊護衛課のカリンたちのもとには今日も物騒な依頼が舞い込んできて!?トラブルコメディ！

〈好評発売中〉 コバルト文庫

選ばれし少女よ、魔性に立ち向かえ!

前田珠子 〈破妖の剣〉シリーズ

イラスト／夏門 潤



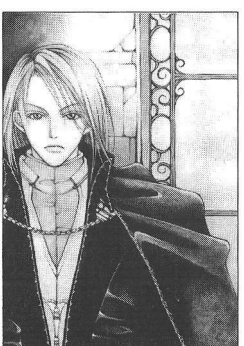
漆黒の魔性
白焔の罠
柘榴の影
紫紺の糸(前編)(後編)
翡翠の夢1〜5
女妖の街 破妖の剣 外伝①
ささやきの行方 破妖の剣 外伝②
忘れえぬ夏 破妖の剣 外伝③
時の螺旋 破妖の剣 外伝④
魂が、引きよせる 破妖の剣 外伝⑤
呼ぶ声が聞こえる 破妖の剣 外伝⑥

〈好評発売中〉 コバルト文庫

約束の庭でほほえむ、美しい妖魔。
華麗なる王国の幻想ファンタジー！

タラスタロスの庭

前田珠子
イラスト／木々



狂王カァスタイーンは残虐な殺戮の末、遂に広大な国タラスタロスを平定した。だがその裏には、選ばれし者にしか見えない、空中に浮遊する庭で会った妖魔との約束があった…。

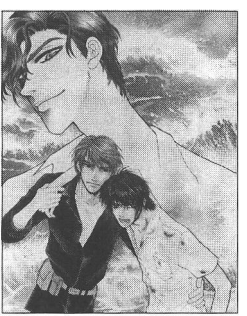
時代の壁を越えた、怨霊バトル！

『炎の蜃気楼』㉝

耀変黙示録Ⅳ

―神武の章―

桑原水菜
イラスト／浜田翔子



〈闇戦国〉が怨霊の無法地帯と化すなか、神武天皇の剣を求め、奔走する直江。一方、成田譲にさらわれた高耶は彼の毒牙にかかり…。

〈炎の蜃気楼〉シリーズ・好評既刊

黄泉への風穴〈前編〉〈後編〉
火輪の王国〈前編〉〈中編〉〈後編〉〈烈風編〉〈烈濤編〉
十字架を抱いて眠れ
裂命の星
魁の蠱
怨讐の門 青海編 赤空編 白雷編 黒陽編 黄壌編 破壊編
無間浄土
耀変黙示録Ⅰ～Ⅲ
『炎の蜃気楼』Exaudi nos
『炎の蜃気楼』砂漠殉教

〈好評発売中〉 コバルト文庫

美少年・咲哉（さくや）が事件に挑む！
華麗なるフローラル・ミステリー！

大地（デメテル）のささやき

―「花の探偵」綾杉咲哉―

七穂美也子
イラスト／凱王安也子（がいおうあやこ）



再婚する父親の結婚式に列席した中学生の峻。突然現れた不思議な女性から『湖の花嫁』の言い伝えを聞く。それをきっかけに憧れの義兄・咲哉と共に怪奇事件に巻き込まれて…!?

コバルト文庫 雑誌Cobalt

「ノベル大賞」「ロマン大賞」

募集中!

集英社コバルト文庫、雑誌Cobalt編集部では、エンターテインメント小説の新しい書き手の方々のために、広く門を開いています。中編部門で新人賞の性格もある「ノベル大賞」、長編部門ですぐ出版にもむすびつく「ロマン大賞」。ともに、コバルトの読者を対象とする小説作品であれば、特にジャンルは問いません。あなたも、自分の才能をこの賞で開花させ、ベストセラー作家の仲間入りを目指してみませんか!

〈大賞入選作〉
正賞の楯と副賞100万円(税込)

〈佳作入選作〉
正賞の楯と副賞50万円(税込)

ノベル大賞

【応募原稿枚数】 400字詰め縦書き原稿用紙95～105枚。
【締切】 毎年7月10日（当日消印有効）
【応募資格】 男女・年齢は問いませんが、新人に限ります。
【入選発表】 締切後の隔月刊誌Cobalt12月号誌上（および12月刊の文庫のチラシ誌上）。大賞入選作も同誌上に掲載。
【原稿宛先】 〒101-8050 東京都千代田区一ツ橋2－5－10（株）集英社
コバルト編集部「ノベル大賞」係
※なお、ノベル大賞の最終候補作は、読者審査員の審査によって選ばれる「ノベル大賞・読者大賞」（大賞入選作は正賞の楯と副賞50万円）の対象になります。

ロマン大賞

【応募原稿枚数】 400字詰め縦書き原稿用紙250～350枚。
【締切】 毎年1月10日（当日消印有効）
【応募資格】 男女・年齢・プロ・アマを問いません。
【入選発表】 締切後の隔月刊誌Cobalt8月号誌上（および8月刊の文庫のチラシ誌上）。大賞入選作はコバルト文庫で出版（その際には、集英社の規定に基づき、印税をお支払いいたします）。
【原稿宛先】 〒101-8050 東京都千代田区一ツ橋2－5－10（株）集英社
コバルト編集部「ロマン大賞」係

★応募に関するくわしい要項は隔月刊誌Cobalt（1月、3月、5月、7月、9月、11月の18日発売）をごらんください。

9784086000253

ISBN4-08-600025-3

C0193 ¥476E

1920193004762

定価 本体476円＋税



コバルト文庫